

---

# 愛する者のため全てを駆ける者

永遠の翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛する者のため全てを駆ける者

### 【Nコード】

N7373L

### 【作者名】

永遠の翼

### 【あらすじ】

ある男は普通に幸せを謳歌していた  
しかしそんな彼に不幸が舞い降りるしかしそんな彼は前を見据え何  
故か真恋姫無双の世界に舞い降りる！！  
しっかり一刀君もです

## プロローグ1（前書き）

初めまして

永遠の翼です！！

処女作です。いきなりシリアスですが頑張って書きました。こんな駄文ですがこれから楽しみにしてもらえたら幸いです！！これからよろしく願います！！

## プロローグ1

俺の名前は御剣真何処みつるまじんにでもいる普通に明るい男  
ただ周りと違うのは親がない。

それでも俺は辛いと思っただ事はなくて一人ではなく唯一血の繋がった妹、「すい」が居たお陰で普通に幸せだった。

そんな血の繋がった唯一の妹「すい」が二年前、急に倒れてしまった。

医師によれば原因は解らないらしい。俺はすぐに高校を辞め治療費を稼ぐため知り合いの親父さんなどに頼み、がむしゃらに働いた。

そして今日は「すい」の14才になる誕生日！俺は誕生日を祝うためプレゼントを持って病室に向かった

ガラガラッ

真「す〜い〜、元気にしてたか〜？」ニコッ！

すい「お兄ちゃん〜！」

真「誕生日おめでとう〜！ケーキとプレゼントだ〜！」

すい「わ〜！！ありがとう〜！！お兄ちゃん開けていい？」

真「いいよ、開けて〜らん」

すい「うん〜！！・・・わ〜綺麗なペンダントだあ〜！！」

真「ほら、それ前渡した雑誌みて、欲しいって言ってたし、すいも女の子だし良いお年頃だから・・・って痛い痛い痛い、ほっぺつねんな」(泣)

すい「も〜！！いつも一言余計なんだよお兄ちゃんは！！でも嬉しいよ／＼でもお兄ちゃん、なんでこの指輪のペンダント半分に欠けるの？雑誌で見た時は一つの指輪だったじゃん」

真「それはだな・・・じゃ〜ん！！もう一欠片はこっち  
俺は首から下げている者を見せる

真「なんか元々、こういう物だったみたいでさ、ペアペンダントなんだって、でも二つやるより一つずつもってる方が繋がってる気がしていいだろ？」

ボソツ！！！！

すい「つながつツ！？／＼／＼／＼」

真「お、おい！！すい、大丈夫か！？顔真つ赤じゃね〜か！？・・・はっ！？まさかまた熱か！！熱が振り返したのか！？ナース！！医者！！あわわわわ！！」

すい「大丈夫大丈夫！！なんでもないから、・・・それより気づかないの！？」

真「へっ！？なにが？」

真は完全な鈍感で恋愛は疎く、一度も恋愛はした事がないのでわかりません。でも正義感は強く、お人好しなので友達も多く、密かに女子にも人気があるらしい（笑）本人自覚なし。

すい「も〜なんでもない！！・・・この鈍感兄貴」ボソツ  
真「ん？なんか言ったか？」

すい「ん〜ん」

その日の誕生日は楽しく笑いに包まれ終わった

それから三ヶ月が過ぎ、仕事中に一本の電話がなり、急いで俺は病室に向かった

ガラッ！！

真「すい！！！」

すい「お兄・・・ちゃん？」

医「意識は取り戻しましたので、大丈夫だと思えますが、今日は付いていてあげてください」

真「ありがとうございます・・・」

真は医者に一礼してすぐにすいの元に行く

真「大丈夫か？」



すいはいつから握っていたのか分からないペンダントを握ったまま  
手をペンダントをダランとさせて息を・・・ひきとった・・・  
・・・。

## プロローグ1（後書き）

どうでしたか？まだプロローグは終わってませんがすぐに終わると思います！最新は早め早めでいけたらいいと思っていますのでまた次話で合いましょう

プロローグ〜運命が変わった日〜（前書き）

やっと二話目です〜

少し長いので途中で切り連続投稿にしました

今回は初挑戦のものもあります

みなさん楽しんでください

ブローグ々々運命が変わった日々

一年後

自分が壊れるには十分だった……

一年で彼の表情は変わってしまった。明るく優しそうだった笑顔は色褪せ、無表情な暗い顔になり本当に生きているのかというぐらい表情がない。

そんな彼、御剣真に運命が変わる日が訪れた……

「????」おっ!?!?あの子じゃな?聞いた話より随分と表情がちがうのお」

彼は今日も公園のベンチに座り空を見上げる……

真「空は変わらず流れる……でも俺の時間は止まったままなんだよ……すい……さびしいよ……俺には……すいがないと何も……できないんだ……」

彼の目はもう疲弊し、音もあまりきこえなくなっていた。

そこまで彼は壊れてしまったのだろう

「????」しかし、あの子の妹の頼みじゃ、ちくと悪いが死んでもらうかのぉ」

そんな時、居眠り運転だろうか?猛スピードで走ってくる車が来たその時、そろそろ帰ろうと空を見上げるのをやめ、前を向いた時、すいより4〜5才くらい下の女の子がボールを取ろうと周りも見ず走って道路に向かってるのが目に映り、音が甦ってくる

ブオーーン!!!!!!

真「お、おい!!やめろ!!行くな!!ちっ!!くそっ!!聞こえてない、頼む、間に合ってくれ!!」

時間の進みがスローになっていく

「この……！！やろう！！」

真は跳んで女の子を突飛ばし

キキィー！！！！

ドン！！！！

真「ぐはっ！！」ビチャ

( やっちまったか、まゝ女の子は助けられたみたいだな )

薄れていく視界の中擦り傷ですんでいるような感じが視界に入り安息のため息がでる

真「ゴホッ！！ゴホッ！！」

( あゝこれは流石に死ぬか……死ぬよな……でも……こんなつまらない一年間を最後の最後であの子のやくにたてたんだ……すい……いいよな……今、会いに行くから……すい…… )

彼は最後の最後ですいと約束、安らかな笑顔で意識を無くした

だんだん意識が覚醒してゆく、真はゆっくりと目を開ける

真「……………は？」

そこは一面真っ白な空間、そんな空間？に一人の真っ白なおじいさんがいる

????「お？やつと来たのか」

真「はい？……は？て言うかここは天国？っておじいさんは誰ですか？」

????「お前の……………おじいちゃんじゃよ」

俺のおじいちゃんと言う目の前のおじいちゃんは慈愛の笑顔で両手を広げる

真「そう・・・なの？じいちゃん顔見たことなくて／＼／＼」

「？？？」おいで

真「じいちゃん！！じいちゃん~~~~ん！！」

そこで時間はスローモーション

「？？？」ま・ご・よ〜」

感動の再会が・・・・・・今・・・・・・

「？？？」な・わ・け・あるか~~~~い！！！！」  
真「ぶるべぶん！？！？」

ならなかった・・・・・・（笑）

「???」わしは、お前のじいちゃんではないわ!?!というかある子に頼まれてのおゝそれで運命を変えてわしが殺したんじゃ」「テヘッ  
／／／／

白いおじいちゃんは、顔を染め、照れながら告げる

「???」そして・・・わしは・・・結構・・・上の・・・神・・・  
じゃ!?!?!?!」

ドーーーーン!?!?!?!?!

無駄に後ろの背景がキラキラしていた・・・

真「ピク・・・ピクピク・・・」

神「おゝい、聞いとるかのおゝ」

そんな神のサプライズもモロに良い右ストレートが顔面に入りピク  
ピクしていた

真「状況はなんとなくわかりました、っていうか……顔面痛い  
です！！神ストレート見えないです！！顔面歪んでます！！」（泣）

神「ま〜そこはギャグ補正でなんとかなるじゃろ」

なぜか神じいちゃんVサイン

真「ギャグ補正で、なんですかその設定は……ま〜いいです、  
そのさつき話していたある子に頼まれて言ってましたけどある子  
って誰なんですか？」

神「お〜そじゃった、そじゃった、その子の名前はの、す」

シュボツ！！

場の空気が急に変わり辺りは冷たくなり、神の顔の横に真の拳がと  
んでいた

神「お〜恐いのおお〜いきなり」

真「今……すいの名前を言おうとしましたね、おじいさん……  
・他人がすいの名前を語らないでもらいたいです」

神「頭に血が昇っている内は話ができんのおお〜、よし、ここは

ポコポコに、完膚なきまでに叩きのめすしかないのお〜」

神は超絶だった・・・さっきまで殆ど普通の生活をしていた真には到底勝てるはずもなくポコポコにされていた

真「ぐっ！！ぶはっ、ぐはっ！！」

神「目はいいし、鍛えれば強くなるんじやがまだまだじゃの」

シュシュシュシュ！！！！

神の拳が急に四本に見えたと思つた瞬間には、自分の体は吹っ飛んでいた。

しかもただの拳の風圧で・・・

ズドーン！！

神「ま〜すいちゃんに頼まれた事じゃしの！！わしが世界の時間軸を止めて50年間ぐらい鍛えてやるわい！！それと、すいちゃんはもうわしの家族じゃ！！じゃから真！！お前ももうわしの家族じゃぞ！！これからは何でもわしに言つてこいの「ニコッ」

真「（く・・・そ！！こつちは変な汗が出るぐらい死に体だったのに神じいちゃんは満面の笑顔か・・・よ）くそ・・・じじい」バタッ

そんな捨て台詞を残し真は倒れた・・・

神「そんな捨て台詞が言えるんじや、これから楽しくなるのお〜」  
カツカツカツと高笑いする神じいちゃんでした（笑）

それから最初の十年が地獄だった

だつて起きたらいきなり鳩尾殴られ「耐久力じゃ」とか意味も分からず殴られ意識を刈り取られ、意識が戻ったと思つたら笑顔で拳圧ぶっぱなされの繰り返し（泣）本当に死ぬかと思つたよ。あつ、つて俺死んでんだな（笑）

また十年は精神鍛えるため目を瞑り静かに過ごし、また十年じいやん直伝の技を教えられ残りの二十年は自分との戦いだつた。そんな風に時間は過ぎていった

時は過ぎ

神「そろそろあいつも、帰ってくるかのお〜」

神「じいちゃんは遠くを見ていた」

コツ・コツ・コツ

白い空間からボロボロの服を着た真が帰って来た

真「じいちゃん!!!...ただいま!!!」ニコツ

神「(・・・良い表情をするようになったのお〜これならば・・・  
(おかえり、纏う気が二十年前と違って強い気になったのお」ニヤツ

真「流石にあれだけの地獄を味わえばね」(苦笑)

神「でも自分を越えたんじゃないか(笑)これでわし  
からも卒業じゃな」

真「は!?!何言ってるんだよじいちゃん!?!」

真「剣な顔でじいちゃんと言う」

神「真よ、三つ・・・プレゼントがあるんじゃない、一つ目は・・・  
真よ服を脱いで背中を見せい」

真「うわっ!?!いきなり真剣な顔で変な言葉くちばしんなよ」

真は変な汗がでていた

神「変な想像をすな！！いいから背中をむけい！！」

真「ああ〜もう！！わかったよ、変なことすんなよ！！」

背中を向けた瞬間じいちゃんの掌が乗り、「ドン！！」となにか入った瞬間何かが弾けるように身体中を駆け回り、激痛が襲った

真「がつ！！！！ぎっ！！ぐふっ！！」

神「それに耐えろ！！今お前に神脈を広げるため神気を流しこんだ、なれば身体能力は格段に上がる、それと、背中に神鳥の紋様が浮かべば出来上がりじゃ！！」「ニコッ

真「笑うなっ！！ぐふっ！！かなりしんどいんだぞ・・・って身体中痛ええ〜！！！！！！！！」

数時間後

神「おお〜もう馴染んだようじゃな（笑）神鳥も浮かんでおるぞ」

真「もうボロボロ・・・」(泣)

神「まだまだじゃの(笑)これからというのに」

真「まだ痛いのかよ!!死んじまうよ!!」

真君君はもうしんでます

真「知ってるよ!!はあはあ、くそ!!変な声まで聞こえやがる」  
(泣)

神「何アホな事一人でやってるんじゃ?まゝよいか・・・二つ目な  
・ある正義の味方がここに来ての自分の能力をあげてほしいと言  
つてきよった!!カツカツカツ真も変なのに好かれたのおゝ(笑)  
しかしこれは強すぎてわしでも制御出来んほどの諸刃の剣じゃ、じ  
ゃがお前ならなんとかするじゃろ、ほれこれじゃ」

いきなり人の頭を鷲掴みしたと思ったら、頭の中に色々な剣が浮か  
んでは消えてく、そう思ったらいきなり激しい頭痛で意識を失いか  
けるぐらいの痛さがあった

真「ぐあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ!!!!!!!!!!」

神「これはやばいのおゝまゝわしの孫じゃ、乗り越えるじゃろ」(笑)

じいちゃんは真の横で楽観的に笑っていた

真「あゝ……死んだねこれ、もう死んだよ」(泣)

いや、真君も君は一度

真「う・る・お・い」「ニコッ

うぎゃ~~~~~ドカツバキグシャ!!!!!!

チーン

神「お、おい、ついに壊れてしまったか!？」

真「いや、大丈夫、なんかブツ飛ばしたらスツキリした！！それにこの能力すごいよ、念じれば・・・ほら！！剣が出た！！手品できるよこれ」（笑）

神「すごいのお〜（制御できんはずじゃ、ていうか手品みたいに遊んどるが使い方違うんじゃないか）」

真「あっ！？そうだ！！じいちゃん！！」

神「何じゃ」

真「もう痛いのは勘弁してください」

綺麗などうげいざあった

神「三つ目はこれじゃ」

スルーですか（笑）

真「これは！？・・・・・・・・何？」

神「知らんのか！？これはの某ライ セイ ーを持った戦う人の先頭服じゃ（笑）わしの服に似てて良いと思って取り寄せた（笑）」

真「ああ〜・・・もういいですorz」（泣）

泣くしかない真だった（笑）

プロローグ〜運命が変わった日〜（後書き）

いかがだったでしょうか？

戦闘、ギャグと少し挑戦しましたが難しいです（-o-;）

みなさんアドバイスなどよかったら色々感想など書き込んでもらえると助かります

真、世界へ旅立つ（前書き）

連続投稿です、やっと恋姫の世界にかなり大変です

ではお楽しみください

## 真、世界へ旅立つ

真「どう？似合う？」

神「馬子にも衣装じゃな（笑）」

真「あんたが進めたんだろ！！」

神「じいちゃんに向かってなんじゃその口のききかたわ！！」

シュボツ！！！！

真「ふっ………みきつたぜ！！！！」

神「アホタレ」

ズドーン！！！！！！！！！！

神直伝神チヨップが炸裂、しかし三つのプレゼントで格段に上がった身体能力で掠り傷ですみました

神「チートすぎたかの？」

チートすぎましたかね？

神「ま〜なんとかなるじゃろ（笑）」

神じいちゃんと笑いました

神「おっと！〜忘れておった、これはサプライズじゃ」

パチン！！

じいちゃんが指を鳴らした瞬間目の前で奇跡がおきた！！

すい「お兄ちゃん」

真「す・・・い」

神「積もる話もあるじゃろ、お互いに、すいちゃん話しておいで」

すい「うん」

すいと色々な事を話した、すいがその後の俺を知っていた事、すいが死んでじいちゃんに天国に行かずここに留まった事、俺を心配していた事など

真「そつか・・・それですいは幸せなんだな」

すい「うん お兄ちゃんにも会えたし、病気にならないし幸せだよ」

真「そつか・・・それじゃあここで一緒」

神「それはできん」

真「何でだよ！！やっとすいと一緒になれたんだぞ！！じいちゃんもできて・・・幸せなんだ！！もうこれ以上望まない！！！！だから！！！！っ！！！！」

神「バカモン!!!まだお前は妹に心配をかけるのか!!!すいは心配しとる!!!お前には確固たる夢がない……もういい加減妹から卒業せんか!!!」

真「ぐっ」

神「これからお前はをある世界に送り込む、そこで自分の道を!!自分の夢を見つけ、幸せになってすいの自慢の兄……わしの自慢の孫になってこい!!!!!!」

真「でもっ!!!また……俺は一人になっちまう……」

すい「大丈夫だよ、お兄ちゃんは一人じゃない、私もおじいちゃんも見守ってるから……私の分まで幸せになって!!!約束!!!」

すいは泣きながら笑っていた

真「ぐっ!!!……わかった、頑張ってみる……いや、頑張るよ、だからじいちゃん!!!」

神「何じゃ?」「ニロシ」

真「すいの事、宜しくお願いします」

真は礼儀正しく一礼した

神「任された!!--というかバカ孫よりすいちゃんのようなカワイイ孫という方が最高に嬉しいからの」

真「さいですが(苦笑)」

神「それじゃあすい、別れの挨拶じゃ、確りの」

すい「お兄ちゃん・・・頑張つてね・・・お兄ちゃんなら幸せになれるって信じてるから」

真「ああつ、絶対約束は守る!!--もう大丈夫だよ」

安心するようにすいの頭を撫でる

すい「うん／＼／＼」

照れた顔もカワイイ／＼／＼

すい「それじゃ……いつてぶっしゃい……! チュッ……!

ボン! あっこれは真君の音

真「なっ……! なっ……! なあああ!! / / / / /」

すい「えへへ / / /」

神「よくやつあ!! すい!!」

二人でVサイン真君のファーストは妹さんです!!

神「真く顔が赤いの」

じいちゃんちゃんが真に近づこうとしたそのとき

ポチッ

真「あん？」

すい・神「は？」

・  
・  
・  
・  
・  
・

真「うわあああああああ」  
なぜか地面に穴が開き真は落ちて行きました

神「テヘッ」

テヘツ じゃないと思うよ（苦笑）

????「あらあら、相変わらずねえ〜鉄真さん<sup>てっしん</sup>」

神改め鉄真これが名前だったのです!!

鉄「おお〜貂蟬!!元気だったかの?」

貂「元気も元気ちよ〜〜〜元気よ!!それより真君に送る世界の名前言わなくて良かったのかしら?」

鉄「あ……ま〜なんとかなるじゃろ!!（笑）なんせわしの「真」を受け継ぐわしの孫じゃからの」

貂「そうね〜若い頃の鉄真さんにそっくりだものね、ちょっと純粹過ぎなところもあるけれど」

鉄「そうじゃの、あの頃のわしの方がもっとブイブイ言わせとったんじゃが……ま、あいつの良い所じゃ、貂蟬……バカ孫を宜しく頼む」

貂「あなたの孫でしょ、大丈夫よ、でもしっかりストーク・げふん!!げふん!!見守るわ」

すい「あ……あの……」

貂「あら〜またカワイイ子ね（クネクネ）この子が真君の妹ね、初めまして、貂蟬よん」

すい「ひっ!?!?・・・は、はい!!お兄ちゃんを宜しくお願いします」

貂「もちのろんよん 見も心もぐんずほぐれつ守ってあげるわん」

すい「そこまでは・・・ちょっと・・・お兄ちゃんが・・・」(苦笑)

鉄「本当にいつもいつも貂蟬はきも」

貂「ふんぬ~~~~~」

鉄「うおっ」

貂「それ以上は、言わないや・く・そ・く」パチン

おえ〜、すみません作者の体調が

貂「ふんぬ~~~~~」

うわ、やめ、あ、あ、ああ~~~~~!!--!!

貂「それじゃあ私もそろそろ行くわ」

鉄「そうか、それじゃまたの」

貂「またね」

鉄「・・・行つたか、真、これから色々大変かもしれないけど、お前は一人じゃない、大切な者を見つけ、それを守ってほしい、そしてあの世界を救ってやってくれ、・・・いい子ばかりじゃからの・・・大丈夫、頑張るんじゃないぞ」

そんな真が落ちた後の出来事、こんな事があつたなど真はもちろん知るよしもなかった



## 真、世界へ旅立つ（後書き）

いかがだったでしょうか？

これから御剣真によるハチャメチュラブラブな外史が始まります

とその前に主人公設定などをはさみたいと思います感想などありましたらバンバンください！！

ではまた次回！！

## 主人公設定（前書き）

今回は主な設定オリジナルなどの説明です

見ても見なくても大丈夫だと思います

## 主人公設定

御剣 真 みつるまこと

身長178 体重65 ヤセマッチョ、無駄な肉はなく引き締まっている

髪

某正義の味方の能力の痛みで、白くなっている（本人は気づいていない）一刀君より少し短めのツンツンヘア

能力

1、神脈

気の二段階上ぐらいだと思ってください（笑）真は気も使えます神脈を使うと本人は気づかないが背中の神鳥の紋様が反応し、色が浮き出る

身体能力向上、感情によって色も変化、多少の傷は神脈で治る

2、某正義の味方の固有結界

真もじいちゃんに鍛えてもらったが、あまりにも能力の方が強いいため、体に負担をかけないため、普段の戦闘ではあまり使わない、いざというとき使うと思われる

3 神鳥

背中 of 紋様

赤 主に投影した武器や自分の拳に纏わせ、強度を上げ飛ばしたり、もしくは粉碎するときなどに使う

青 素早く動き体内などに攻撃するときなどに使う  
赤は剛、青は柔と思ってください

黒 ????

今は謎に包まれている、もしかしたら真の心の中に問題が・・・

アクセサリー

2つの指輪のペンダント

これはあることに使う予定です

御剣 すい

身長147体重???

容姿は馬超の髪型に、馬岱のような身長+性格病気により死にその

後はおじいちゃんのそばで兄の幸せを願っている

密かに兄が好き

御剣鉄真みつるぎてっしん通称神じいちゃん

いわずもがな、主人公の実のおじいちゃん

生前、格闘家であり、主に拳を主体とした格闘をするが、一応武器は一通り使う

主人公にすべての能力、技術を与える、主人公の大切な家族の一人。能力などは主人公が色濃く鉄真の血を受け継いでいるため継承にいたった

神脈は神になってから覚えたらしい

## 主人公設定（後書き）

こんな感じでももしかしたら増える可能性もありますがその時は文章などに軽く説明を入れたいと思います

それでは次回から恋姫の世界に入ります!!

ついに!!あの子と・・・あの子に!!会います(\*^\_^\*)

## 運命の出会い（前書き）

みなさん最新ですお待たせしすみません

最近いろいろな人を見て思いますすごいなあ〜ってホントにゲムしてみたいに想像できます

それに比べ俺のなんてって具合に落ちます（笑）でも頑張ってみなさんに楽しんでもらえたら嬉しいです

## 運命の出会い

????「お姉様さっき話ってホントかな」

????「どござるうなあ自称世界一の占い師って自分で言ってたからな」

ある世界一の占い師は言った……

この乱世の世の中に天から遣わされた二人の御使い流星にのり舞い降りる……

一人、白髪の白い布を纏い背に鳥の紋様を背負いし青年

一人、白く輝く布を纏い、二本の刀を持つ青年。

二人が舞い降りたのち、戦乱の世が始まる、だが……二人が御使  
い、乱世を鎮め、この乱世を平和にするであろう……

「????」だっけか？」

「????」そうだよ」

「????」しかし、昼間に星なんて流れるワケないってたんぽぽ」

たんぽぽと言われた少女……名を馬岱

「そんなのわかんないじゃん　どんな人なんだろうね〜お姉様」

お姉様と言われた女の子……名を馬超、かの有名な涼州・盟主の娘……後の五虎大將軍が一人錦馬超であった……

馬岱はウキウキ、馬超ははなっから信じていないような……いる

よくな・・・である

そんな話をしながらブラブラと馬に乗っている時であった

馬超たち二人が帰る方向の1〜2里辺り先目掛け空から一筋の流星が流れ落ちた

「ほら、お姉様!!今!?!」

「ああ、・・・まじだ」

「たんぽぽ先行くね」

「お・・・おい!!たんぽぽ!!!!って聞く前に行っちゃった、くそ!!!私も行くから待てってたんぽぽ」

「あれ？そろそろ落ちたところだと思っただけど・・・」

周りをキョロキョロするたんぽぽ

「あっ！？人が倒れてる」

「おっ・・・い！！待てっ・・・てばたんぽぽ」

「あ、お姉様 見てあそこ、人が倒れてる」

「へ！！！？ああ、行ってみよう」

二人は倒れている男（真）に近付いて行く

・・・

「何か倒れてるっていうより、カワイイ顔で寝てるねお姉様」

たんぽぽは手を口に当てにししし笑いながらほっぺたをつつく

「《ぽーーーーー》／／／／／」

「お姉様？」

馬超は男（真）を見たまま固まっていた

「・・・・・・・・／／／／／（何だ！？あいつを見ると胸が）」

「お姉様！！！」

「へ！！？な・・・なんだよ!？」

馬超は突然呼ばれた事となぜかニヤケているたんぽぽに嫌な予感を  
感じ後ずさる

「……にししし もしかしてお姉様……一目惚れ？」

「《ぼんっ！》 なっ なっ 何言っ てんだ！ たんぽぽ！ ！」

馬超は明らかに動揺していた

「だってお姉様顔真つ赤だよ でも確かに寝顔カワイイもんね、  
私はカツコイイ方が好きだけど ！」

「そっ、そんなこと言っ てないで早く起こすぞ！！！！！！」

「はっい ！」

「おっい、大丈夫か？ 《ペチペチ》 ！」

馬超はペチペチとホッペタを軽く叩く

「うっん ！」

男（真）は身動きをするだけで起きない

「お〜い！お・き・る〜！」

「あと……五分」

「いいから、起きろって、風邪ひくぞ」

「あと五分……だけ……寝かせて……すい……」

『!?!?』

真は寝惚けている、元気だった時はいつもすいに起こして貰っていたため、今まさに爆弾を踏んだ事を理解していない

《プルプルプル……》

「お姉様……っ!?!(やばっ)」

「起きろって……いつてるだろ——!!!!!!!!!!」

馬超は真名を急に言われ、怒りのあまり槍を真目掛け降り下ろして

いた

「も……朝からすいはうるs!?!」

真は起きた瞬間目の前に槍が迫ってきていることに驚きそのまま横にゴロゴロと転がる

ズドーン!!!!!!

今まさに真がいた所には小さなクレーターが出来ていた

(おいおい(苦笑)いきなりなんだ)

「おっ、おい、いきなり槍はないだろ!?!す……い?」

そこにはすいに似てはいるがすいではない女の子がたっていた

「てんめっ、また言いやがったな!!」

「はい!?!」

なっなんですか?この状況、すいの声が聞こえて起きたと思ったらいきなり目の前に槍とごたごたいめぐるんで(泣)

《クイクイ》

「ん?」

「お兄さん、ちょっといい?」

「ん、ああ、大丈夫・・・だと思う、どうしたの?」

「あのん「おい、お前、たんぼぼから離れる!!!!たんぼぼも離れてる!!!!」お願い、お姉様ちょっと黙ってて、話さなきゃ分からない事もあるよ」

「ぐっ!?!・・・ぐあああ、わかったよ!!!!」

あっなんか我慢してくれるみたいだ

馬超は頭をガシガシ掻き槍を地面を刺しこちらを睨んでいた

「ごめんねお兄さん、でもねお兄さんも悪いんだよ、いきなりお姉様の真名を呼ぶんだもん」

真名？真名とはなんぞ？

「そつだ！いきなり真名で呼びやがって！！」

馬超は《ガウガウ》と今にも噛みついて来そうな勢いで怒る

「ちょ！？ちよつとごめん！！いきなり真名？なんて言われても分からないんだ、俺は妹の名前を口にしただけだと思っただけだ」

真は慌てて早口で言う

『えっ！？』

あれ？なんで驚くんだ？でもなんか状況を見ると俺がなんかしたっ  
ぽいな

「でも、もしも君の感に障って怒らせてしまったとしたらごめん」

「い、いや、もういいよ、あなたの妹さんとまさか一緒の名なんて分らないし、それに私もいきなり槍ブン回しちゃって……ごめん……」

え？すいと……同じ名前？……って今は固まってる場合じゃないか

「いや、俺は怪我もしてないし、大丈夫だから顔を上げてください  
《ニコッ》」

「ッ！？／／／／／／／／／／」

「ん？大丈夫かい？君、顔が真っ赤に」

スツと自然にいつもすいにしているように自分の手を女の子のおでこにあてる

「  
%  
く／／／／／／／／／／」

バターーン……！！

「あゝあ」

馬超はあまりのドキドキに意識をシャットダウンし倒れてしまった

「うわあゝ！！き、君、大丈夫かい！？」

「大丈夫、大丈夫 お姉様男の人にそういう事してもらった事なくて倒れちゃったただだよ でも今時それぐらいで倒れるなんてカワイイよね」

「？・・・そうだな、カワイイな、でも君も十分仕草とかカワイイと思うよ《なでなで》」

妹にするように頭を撫でる

「ツ／＼／＼あ、ありがと／＼／＼」

「そ、そんな事より、近くに私達の村があるから、そこで自己紹介とかお話しよ」

確かに現状把握やどこなのかは知りたいな

「でも、いいのかい？いきなりあつた俺を連れてって」

「うん お兄さん悪い人には見えないし、あつ、あと悪いんだけど馬はお姉様が乗ってた馬に乗ってお姉様を運んでももらえませんか？」

「ありがとう、ああ、了解、あつても俺馬には乗れないから、この子はおぶって行くよ」

「んじゃたんぼぼは馬を引いてくね」

二人は各自準備しはじめ

「ごめんね、失礼します」

真は女の子（馬超）を背負う

「ん……んう」

「//////////」

真の耳の横で、吐息がかかり、真の顔は真っ赤になっていた

前の方がよかったかな、イヤでも意識してしまう・・・

「（お姉様もだけどお兄さんも純情なんだね）」

たんぽぽはニコニコ、真は真っ赤な顔でしっくはっくしながら村に向かった・・・

ここに、一人の御使いの運命の歯車が動き始めた

一方・・・

もう一人の御使いは・・・

「ふっ…!はっ…!せっ…!でやあああ…!」

「おお、精がでるのお」

「じいちゃん、おはよ」

まだ時を待っている・・・

## 運命の出会い（後書き）

駄文ばかりですみません

自信が持てたらいいんですけどなかなか（苦笑）

さてこれからどうなって行くのか自分でも分からないのが面白いです

ではまた次話で会いましょう（\*^-^）ノ

村までの道中（前書き）

遅れてばかりですみません最新です

あとよろしければ真恋姫での風と稟の魏に仲間入りする時期を知ってる方もし良かったら教えてくださ〜い（泣）

作者かなりこまってますでは始まり始まり〜

## 村までの道中

村までの道のりの途中……

「村まではあとどれくらいなんだい？」

「ん〜あとちょっとでつくよ」

「そっか（重くはない、寧ろ軽い、それに疲れた訳でもない、しかし……この状況はちょっと）」

「ん〜〜《ギユ〜》」

（んぎゃ〜！！頼む！！頼むからそれ以上抱きつかないでくれ／＼／＼）

「」

「君はなんでニコニコなの？」

真は出発からずっと笑顔な馬岱に聞いた

「ん〜なんでだろうね（この人が占いで言ってた天の御使いなのか  
な？だつたら・・・いいな）」

俺が聞いているのにorz

「お姉様も大胆だね」

解ってるなら助けてください

そんな時、遠くからこちらに向かって、砂煙を巻き上げながら来る  
者立がいた・・・

「なんか、あつちから向かってくる人たちがいるね、君達の仲間か  
い？」

「ん？どこ？」

真は向かって来る者達の方に指を指す

「なんだろ？」

黄色の布を腰に巻いた人達が俺達の前で止まった

「お嬢ちゃん兄ちゃん金目の物置いていくなら見逃してやるぞ」

「いきなりだな（苦笑）」

どこのヤンキーみたいだな

「そーだそーだ、兄貴が言ってんだ、見逃してやるから金目の物置いてけ」

背の低い奴が兄貴？に便乗して言うそんな兄貴？と言われた男が

「んゝさっきは金目の物だけって言ったが・・・よく見ると嬢ちゃんに男の背中寝てる女、結構良いじゃねゝか」

「オ、オラは小さい方がいいんだな」

兄貴の後に結構デカイ男が答える

「この・・・ゲスが」

俺の隣でさっきまで笑顔で可愛かった馬岱が歯をくいしばり怒っている

「似合わないな」

「え!？」

俺は背中(馬超)子を地面に置き前に一歩ずつ歩き、(馬岱)の横までいき頭の上に手を乗せる

「君には笑顔の方が似合ってるよ」

「あっ／＼／＼」

軽く頭を撫で、少女(馬岱)の前に一歩出る

「君はお姉さんの所に居てくれ」

「でも!!!(お兄さんに強さは感じない……このままじゃ死んじやう!!!)」

「大丈夫」

「おうおう、見せつけてくれるじゃねえか」

「あの話し合いで解決は出来ませんか？」

「それはできねえなあ」

「そうです……か……」

覚悟を決めなきゃな……あの子達を……守るために……

「てめーら！！男は殺して構わねえ、女二人は無傷で捕縛だ！！てめーらぬかるなよ！！」

『おー！！！！』

おま、おま、おま、おま……

くたんぽぼサイドく

お兄さんは男達と喋っている

大丈夫って言われて少し安心したけど強そうには見えない  
本当は村までお姉様を運んでもらって、お姉様を運んだお兄さんを  
村の人達に見せて、お姉様とお兄さんの 促成事実 を造ろうと思  
ったのにもくせつかくの作戦がくく!!って早くお姉様を起こさなきゃ

「お姉様!!起きて、早くしないとお兄さん死んじゃう!!」

「んくくくもうたんぽぼはいつも煩いんだよ」

「そんなのどうでもいいの!!いいから早く起きて!!」

「何なんだよく、気持ちよく寝てたのに」

「いいから、お兄さん助けなきゃ」

「んあ?あいつがどうしたんだよ?」

「ほらあそこ・・・で」

「ん？どこ・・・だ・・・」

二人は真の方を見た、しかしそこでは予想外な出来事がおきていた

『は？』

くたんぽぽサイドアウトく

剣を抜いた三人組は俺を囲み襲いかかってくる

『死ねー！！』

三人の鳩尾に瞬時に移動し拳をぶつける

「ぐ……ぐはっ!!」

「ふん、少しは出来るようだな」

続いて六人が向かってくる

「これは囲まれたら面倒だな……じいちゃん、使わせてもらおうよ……」

場の空気が一瞬で変わる……真は体勢を獣の用に低くし向かってくる六人に向かって行く

「御剣流……朧……月……」

その名の通り、残像を微かに残し瞬時に相手の懐に潜りこむ技である

《バタバタバタ》

六人は意味も解らないまま意識を失う



疲れたな・・・

「強いんだなあんだ」

「うんうん たんぽぽビックリしちゃったよ」

真が深呼吸をしていると二人が近寄ってくる

「ん？ああ、まだまだですよ、俺より強い人はいっぱいいますしね」  
特に俺のじいちゃんとか・・・

「なんだよそれ（苦笑）」

「あつ！？それより良かった、急に倒れたけど大丈夫みたいだね  
《ニコッ》」

「あ、ああ／＼／＼心配させちゃったな、ありがとう（なんだよ、  
その笑顔／＼／＼すげー恥ずかしいじゃんか）」

「お姉様をここまでお兄さんがおんぶしてたんだよ 大胆にもお姉  
様だったらギョッてしがみついて気持ち良く寝てたんだから、ね？お  
兄さん」

「 \$@ 」

「 / / / / / / / / 」

二人は真っ赤になり固まる

「 たっ、たんぽぽ！！！！ / / / / / 」

「 ホントの事だもん 」

二人は走って先に行ってしまった・・・

「 はははは 」

（仲いいな、あの二人は・・・）

そんな二人を思い空を眺め

「 すい・・・大変だったけど・・・護れたよ 」

空のどこかに居るであろう妹に報告する

『おゝい！！早く来いよ！！（おいでよ！！）』  
（なんて儂そうな横顔なんだ）

「ああ！！今行くよ！！」

三人は揃って村に向かった

村までの道中（後書き）

どうだったでしょうか少しずつでも戦闘をかければいいと思っています

難しいですよね戦闘って

涼州連盟盟主（前書き）

どうも～永遠の翼です（\*^\_^\*）

見てくれる皆様いつもありがとうございます…！

なぜこうなったのかは作者も分かりませんが楽しんでもらえたら幸いです（笑）

## 涼州連盟盟主

えゝ皆さん初めまして御剣真です

え！？なんでいきなり紹介かって？それはですねゝ御剣真は今・・・  
・ムチャクチャ混乱中であります！！

だって、・・・だって聞いて！！聞いてよみんな！！おかしいよ、  
オカシイコトニナッターヨ・・・げぶんげぶん・・・すみません、  
だってですね、今日の前にいるのがですね

左におりまのがゝ馬岱ゝ馬岱ゝ、右におりまのがゝ马超ゝ马超、  
真ん中におりまのがゝ馬騰ゝ馬騰ゝ・・・（車掌さん風）

って全部女の人じゃねゝかゝ！！

おいおい俺をどこに落としたんだゝえゝクソじじい、ないだろ！！  
武将が女の子って、あん！？ここはかの有名なパラレルワールドと  
でもいうのか？あん！？

そしてしかも落ちた場所は三・国・死！！いや・・・間違った、三  
国志、俺また死ねと申すかしじい！！死にますよ、ねえ！！だって  
あの三国志で有名な呂布とかさゝ呂布とかさゝ！呂布とかさゝ！！

「いやゝまさか、うちの娘が天の御使いを拾ってくるなんてねゝ、  
ん？御使い殿？なぜそんなに顔を蒼くしている？しかも汗もダラダ  
ラと・・・」

「いやいや……ちょっと待て……《ブツブツ》」

「御使い殿？」

「いや……それはない!! 《ブツブツ》」

「み・つ・か・い・殿!!!!」

「うひゃい!!!!」

「大丈夫か？御使い殿」

「あ……ああ、大丈夫ですよ、ちょっと脳内トリップしてまして」

「のうないとりつぶ？」

この可愛さはなんだ!! あんなおっきい娘がいて、この若さ!! は  
ん・ざ・い・だあ!!!!!!!!!!!!!!

「いはいえくなんでもないです……それよりもう一度三人のお名  
前をお聞き願えませんか？」

「ああ、いいよ、私から見て右にいるのが・・・」

「馬岱だよ 真名はたんぽぽだよ」

「お、おい！！たんぽぽ真名まで・・・」

「翠！！ちよつと黙ってな、たんぽぽが決めたんだ、良いと思ったんだろ？ましてや天の御使いなんだから信用にたる存在だってたんぽぽが思っただろ」

「うん そのとおり」

ガオーって感じが浮かびそうに手を挙げてたんぽぽは言うてるけど馬超さん睨んでるんだけど・・・

「まゝ・・・たんぽぽが決めたんなら」

渋々だよね（苦笑）

そうそう、さっき聞いたら真名とはどんなに知っていても本人が許さない限り言っちゃいけないらしい、だから俺が初めてあった時、馬超さんあんな怒ってただな

「うん、ありがとうたんぽぽ」

癖でまたたんぽぽの頭を撫でてしまう

「えへへ」

「なっ！？また気安く・・・」

「いいか？」

「あ、はい」

「それで左にいるのが私の娘の・・・」

「馬超だ・・・あと・・・翠」

「え！？」

俺は耳を疑う、あんなに怒ってた馬超が・・・

「だから・・・真名は翠！！あんたに預ける」  
「ってそんな真つ赤な顔で怒らなくても（苦笑）」

「そっか・・・ありがとう・・・翠」

「やっぱ・・・この名前は心がとても穏やかになるなあ」自然笑顔になってくる・・・

「／／／／《カーーー》」

「あら、翠あんたもしかして・・・《ボソツ》御使い殿に惚れたか？」

「  
」

あら？なんか翠は固まってるし馬膳さん？はゲラゲラ腹を抑えて笑ってる、いいなやつぱり家族は笑顔が一番だよな、とちよつと喉が渴いたしお茶でも・・・

「なあ、御使い殿、うちの婿にならないか？」

「ぶふうーーー！！げほっげほっ！！」

やっべあまりにもいきなりで気管につて鼻からもお茶が・・・

「たんぽぽもーーー！！」

「うえーーー！？」

ないでしょ！？ないよね！？俺の妹と同一年ぐらいって犯罪だよな、そもそもなぜいきなり婿の・・・

「それじゃ私も」

『うえー!?!?』

つて旦那いるよね!?!?いるよね!?!?さっき翠のこと娘って言ったよね!?!?略奪愛・・・できません、ヘビーですそもそも恋愛したことないってできないよ!?!?いや、“確かに三人共綺麗だしカワイイ”けどそれはちよつといきないすぎだろ!?!?・・・つて、ん!?!?

『ノノノノノ《カアアアア》』

何で三人共顔を赤くして俯いていらっしやるのですか?もしかして・

「声に出てました・・・?」

《コクツ・・・》

三人共頷いたー!?!?!!やっちゃまった、やっちゃまったぜ真よ俺は猛烈に恥ずかしいのだあゝ!?!?

『（慌てる姿、カワイイなあ）』

三人が同じ気持ちだったことは誰も知らない・・・

「う、うほん！・・・でなんだ話がそれたけど私が一応ここを納める馬膾だ、真名は向日葵、ひまりもしくははお義母さんと呼んでほしい」

「あの真名までよろしいんですか？ってお義母さん！？」

いやあんな綺麗なお義母さんなんて呼べるのもなってくれるのも確かに嬉しいけど

「お！？お義母さんって呼んでくれるのかい？」

「いえいえ！？ひまりさんで」

いやいやって言えないよね！？って翠が睨んでるから！！

「んゝ残念」

ひまりさんは残念そうだけど、俺はヒヤヒヤです

「あっ！？俺も自己紹介を、姓は御剣名は真、字と真名はありませんので呼びやすい呼び方でいいです」

「あいわかったそれで真これから宛はあるのかい？」

そうなのだ、この先やっていくにはまだまだ俺には足りない事があ  
りすぎる、できれば・・・

「んゝ家族もいませんし、この時代の事もそれなりに知らなければ  
いけないししばらく置いていただけませんか？あとよろしければ字  
の読み書きなども教えてください」

「ん？家族もいない？」

「あ・・・あゝこの世界にはって事です」

あちゃゝ余計な事いつちまった・・・

『・・・・・・・・』

「・・・そうか、わかった！！それじゃあしばらくうちにいな私が  
色々教えてあげる、翠、たんぼぼこれから真をうちに住ませるか  
ら部屋の準備お願い」

『わかった！！（よー）』

二人は走って出て行ってしまった

「ひまりさん何かから何までありがとうございます、このご恩は必ず」

「それは別にいいよ、私が良いと思ってしたんだからそれよりさっき話を濁したろ？」

「!？」

「当たり前かい？嫌じゃなかったら話聞くよ？」  
はぐやっぱ俺隠し事って出来ないのかな・・・

「やっぱり隠せませんか」

「そりゃあね、顔とても辛そう、いや泣きそうだったよ」

泣きそう・・・か

「そう・・・ですね、それじゃあ昔話をちよつと」

俺はひまりさんに今までであったことを話した

父が仕事の事故で亡くなり母も追うように妹を産んですぐ亡くなり親戚にたらい回しになり、妹も途中から病気で亡くなり自分の心が壊れてしまった事、そのあと起こった事も全部、吐き出すように喋った・・・その間ずっと黙って優しい目でひまりさんは聞いてくれていた

「・・・」

「ということですが、翠とたんぼには黙っていてください、余り悲しい顔は見たくないし」

といきなりひまりさんはスツと立ち上がって俺の前まで来ていきなり抱きしめられてしまった

「ってうわっ!? ちょ!?! ひまりさん!?! くるしっ」

ムネ、ムネが!?

「あんたはなんで他人ばかり!?! 何で辛いなら辛いって言わない!?! 今もそうだ、自分の方が辛いはずなのに翠とたんぼの気にする!?!」

ひまりさんは泣いていた・・・  
ありがたいなあゝ俺の為に・・・

「ありがとうございます・・・でも約束したんです、妹・・・すいと前を向いて笑顔で幸せになって今度こそ大切な者を守るって」

そうだ!?! これだけは何かあっても絶対に貫く!?!!

「ッ!?! あんたは・・・少しは甘えるって事をしなさい」

ワシヤワシヤ頭を撫でられた・・・何年ぶりだろうな

「ああ・・・ありがとう“かあさん”」

あつ、やべつ、口すべった・・・

「ツノノノああ、かあさんでもいいよ、あんたはこれから私らの“家族”だ!!」

「はは、ありがたいですけどそんな事言ったらまた翠が真つ赤な顔で怒りますよ？」

「そんな事で翠は怒らないよ（それに真つ赤になってるのは別の意味なんだが・・・翠、この子色々と苦労するよ、どうも鈍感みたいだ）」

「そうですね、翠もたんぼも優しい子だと思います・・・それじやあちよつと外の空気でも吸って来ます、長々と話してしまってますみません」

「ああ、行ってきな、それと敬語はやめな、家族なんだから敬語は似合わないよ」

「はは、そうですね・・・そうだねそれじゃあいつてきます」

く馬膳サイドく

ボタン！！

真は挨拶をして出ていった・・・

「ふうく」

いったか、翠達が男を連れて来た時はびっくりしたしかも今噂の一人天の御使いなんて、でも・・・話を聞いて、同じ人間だと、なにも特別な人間だとは思えなかった・・・なにより、真には誰よりも幸せになってほしいそう思ったらいてもたってもいられず、気付いたら抱き締めていた・・・

「あれはやり過ぎてしまっただろうか／＼／＼／」

思い出したら恥ずかしいな・・・まあ、カワイイのだからいい、それと・・・

「翠、たんぽぽいるんでしょ？出てきなさい」

スツと二人は下を向いて出てきた、真との約束だ、真がいつか言うとしても今は口止めしとかなければな

「聞いていたみたいね、あの子は平気って言ってたけど多分あの子まだ辛さを抱えてるわ、もしかしたら一生抱えるかもしれない、二人共良かったら・・・」

「大丈夫だよお婆様、たんぽぽもお姉様もお兄様の事好きだもんね？」

「・・・」

『翠？（お姉様？）』

《ポタ・・・ポタ・・・》

翠は泣いていた

「なんで・・・真は・・・あんなに笑っていられるんだ」

「翠、あれが真にとっての信念だからよ、それに・・・男の子だからね」

私は笑って翠に話す

「でも・・・それじゃあいつが可哀想だ・・・報われないよ」  
私は翠の頭を撫でる

「だったら翠がそれとなく支えてあげなさい、それにあの子気にしてるわよあなたたちの事、言っただでしょ？“あまり翠とたんぽぽの悲しい顔をみたくない”ってそれって気にしてなくちゃ言わないわよ」

「う、うん／＼／／」

「えへへ」

「あの子は気付いてないだろうけどもう家族みたいになってるのよ、私たちは・・・だからこれから何があってもあの子を支えましょ」

「ああ！！」

「うん」

「それじゃあ、真も呼んでみんなご飯にしましょ、翠は呼んで来て、たんぽぽは私の手伝い!!!」

『了解!!!』

さあ……これから騒がしくなるわね……

涼州連盟盟主（後書き）

ちよつと翠の性格違ふ気がするのは俺だけですかね（苦笑）

でも作者は前向きに考えます（笑）

それではまた皆さん次話で会いましょう（\*^\_^\*）

翠・蒲公英の事情（前書き）

皆さん遅くなつてすみません!!

やっと出張から帰ってきました遂にパソコンを買い明日届きます!!

そして真恋姫無双買いました!!より話を上手く出来たらと思います

では始まり始まり（\*^-^）ノ

## 翠・蒲公英の事情

（蒲公英サイド）

私とお姉様はあの夜聞いてしまった・・・

お姉様は・・・悔しそうだった、私も悔しい、いや悲しかったのが正しいかな、何かをしてあげたかった、でも何をしてあげればいいのか解らない、それが悔しい、お兄様は絶対幸せになるべきだと思う、と言うか幸せにしてあげたいな・・・お姉様もそう思うよね、なにより好きになったんだもの、一緒に幸せになりたいな・・・

そんなある日の朝、私は外に散歩に出た

近くの森を抜け川辺に近づくとそこにはお兄様がいた

《バシャバシャ》

「ん〜!!冷たい!!」

お兄様は上半身裸で水浴びしていた

なんたるあの背中 of 模様?なんか鳥のような……ま、聞けば分かるかな?

「お兄様、おはよう」

「おっ!!蒲公英おはよう」

こっちを向いて挨拶してくれる、当然上半身裸で……やっぱり引き締まってる、良い体してるな

「じい〜〜〜」

「ん?なんだ?じつと見て……はうあ!?!」

お兄様はすぐに上着を着てしまおう

「あゝあ勿体無い、もうちょっと見てたかったのに、残念」

「男の体なんか見た所で良い事ないでしょ、それに女の子なんだからもうちょっと・・・」

なんか言ってるけど聞こえない（笑）

「聞いてますか！？蒲公英さん!？」

「そんな事よりお兄様の背中の鳥？みたいな模様何？」

「そんな事よりって・・・まゝいいか・・・これか？じいちゃんが言うには、神脈を受け継ぐと浮き出るんだって、俺もまだ見たことないんだよな」

「触ってみていい?」

「ああ、いいよ」

ちよっとドキドキする・・・

《ザワザワ》

普通に肌に浮き出てるだけっぽいなあ〜

ん？あれ・・・？

「・・・お兄様」

「ん？どした？」

「模様が・・・動いた」

「ああその鳥の紋様生きてるからな」

お兄様は笑ってそう言った、へ〜生きてるんだ不思議〜

「神脈を使うと連動してこれが少し動く・・・ちよつと見てるよ」

ムン！！！！！！

お兄様の纏う気？みたいなものが変わったと思ったなら背中  
の鳥の模様も色を変え空の色になった

「お兄様すごい 色まで変わったよ」

「色も！？何色！？」

「なんか空と同じだよ」

「マジか！？色まで変わるなんて・・・」

なんかブツブツ考え初めたよ

「えい！！そんなブツブツ考え事ばかりだと疲れちゃうよ」

私はお兄様に抱きつく、だって落ち着くんだもん

「！？／／／た、蒲公英さん・・・その・・・ムネが・・・背  
中に・・・」

やっぱりお兄様は純情だよね耳まで真っ赤だもん

「にじしし し〜らな〜い」

「分かってるよね!?!わざとだよね!?!」

こんなお兄様だもん、やっぱり、幸せにしてあげたい、みんなです  
っと一緒居れたら・・・いいな〜

〜蒲公英サイドアウト〜

く翠サイドく

私と蒲公英はあの夜聞いてしまった・・・

私は悔しかった、何もしてあげられない声すらどうかけていいかわからない苛々もした何もできない自分に・・・

私は思う、あいつに幸せになってほしいと、あの笑顔をずっと見ていたい、ドキドキはするけど一緒にずっといれたらって思う、でも私は可愛くも綺麗でもない、自信がないんだ・・・

そんなある日の事、私は稽古をしようとして稽古場に向かった・・・

まさかあんな事になるなんて・・・

シュー!! シュツシュ!! シュボボボ!!!

「ふっ、はっ、でやあ、うらあゝー!!!」

稽古場に行くと真が一人稽古をしていた

私は声をかけれず隠れてしまった

なんで私は隠れなきゃいけないんだ、一緒に稽古でもすればいいのにその一言がどうしても出ないし、一緒に稽古しても上がっちゃうし、あゝもー!!!

私は頭を抱え考えにふける、それがいけなかった・・・

「翠、頭なんか抱えてどうした？」

気づいた時には遅かった気づいたら真は私の顔のすぐ目の前にあってそれだけで頭の中が真っ白に

「あ、う、い、や、その／＼／／／」

「おい、翠？」

真は私を心配してくれるその時……

「お・兄・様〜！！《ドン！！》」

ズキューーン!!!!!!!!!!!!!!!!!!

『んー！？』

私と真の、く……くち……くちびるが……

『な、な、なあ〜！！』

私も真もビックリしたけど、私は恥ずかしくなって真の前から逃げてしまった、真は声を掛けてくれるけど私は真の顔が見れないんだ  
く！！

「ふう〜撒いたか」

「逃げないでよ翠」

「へっ!?!」

逃げたと思ったのに真はすぐ隣に居てまた逃げようと思った時には  
手を握られ逃げれなかった

「て、て、手〜〜!?!」

「ごめんね、でも手離したら翠逃げちゃっつじゃん」

「うっ〜」

これは逃げれなそう

「ごめんな、事故とは言え翠にキ、キスなんて」

「きす？なんだきすって」

「あ、ああ、キスつてについや、天の国では接吻をキスって言うんだ」

「あ、ああ・・・さっきの事か／＼／＼真も男なのにごめん、私となんてしたくなかったはずなのに」

「へ!？」

真は何を言ってるの？って顔してる、だからあゝ!!

「だから!!私みたいな可愛くないやつと接吻なんてやだろ!!手だって槍ばっか振ってるからゴツゴツしてるし逃げなかった手だって真は繋がないだろ!!」

なんか気持ちが悪くモヤモヤしてるのもあって真にあたるつもりがないのにあたってしまう

そんな私を冷静に安心させるように真は頭を撫でてくれる・・・

「ごめん、あ、いや、ごめんっていくら事故でもカワイイ女の子にキスしてしまったって事で」

カワイイ・・・

「嘘だ！！私、可愛くなんてない！！」

「じゃあ綺麗だ」

真は真剣に私を見つめて言う、手は頭を撫でたまま・・・

「あつあつあつ／＼／＼」

「それに手だつて・・・これは翠が一生懸命に頑張った証じゃん、誇りに思うことがあっても汚いとかなんて思わないよ」

嬉しかった・・・真の目が真剣だったから嘘じゃないって解る

「俺じゃ信じられないかも知れないけど、信じて!! 翠はカワイイし綺麗だ!! それに俺翠の笑顔好きだよ」

好きって、笑顔って／＼／＼／

「なっとなっとな!!? / / / / /」

「そういう恥ずかしがるところも」

「も、もうわかったから言うな!! 頼む!! それと、後で嘘だつて言ったらブツ飛ばすからな!!」

「はは、そんな事言わないよ、さっきのも含めて俺の本音だから・・・もう大丈夫そうだな・・・、それと今度から隠れてないで一緒に稽古しようよ、一緒の方が楽しいし良い稽古になるだろ?」

「へ!? 隠れてたの知ってたのか!? あううう、分かった今度から一緒だな、でも手加減はしないからな!!」

「ああ、その方が嬉しいよ・・・それじゃ、悪いけど蒲公英懲らしめてくるわ」

「ああ、程々にな・・・」

私は苦笑して見送る

空を見上げ唇を触る・・・

「真としちゃったんだよな・・・私・・・やっぱり・・・真が・・・」

そんな気持ちを抱えながら私は空が赤くなるまで空を見上げ続ける。

•  
•

翠・蒲公英の事情（後書き）

くその後の真く

「た〜ん〜ぼ〜ぼ〜いるのは〜分かってるんだぞ〜」

「ひい〜!〜!」

「つ〜か〜ま〜え〜た〜」

「グリグリだけは辞めて!〜お兄様!〜お願い!〜!」

「む・り」

「い・や〜!〜!ごめんなさ〜い!〜!」

なんていうのがあったとかなかったとか（笑）

## 真の一日(前書き)

皆さんこんなに時間があいてしまっただけすみませんでした!!! m( )  
| ) m

夏バテやら真恋やら仕事やらで(。口。 ; こんなになっちゃいました  
感想を書いてくださったりでも嬉しいですアドバイスも参考に  
なります!これを見てくださる方々遠慮なくばんばん感想アドバイ  
ス宜しくお願いしますでは(始まり始まり)

## 真の一日

朝

川辺で体を拭く、俺の活動の始まり

気持ちいいよね朝の冷たい水って気合いが入る  
今日もまた忙しいんだ頑張らなきゃな

体を拭き終わり、城に戻って鍛練を始める・・・始める前に

「おいつちに〜さんし〜」

ストレッツチしなきゃね、体を壊しちゃう

そろそろ翠がくるころかな？

「真、おはよう」

「おう！おはようさん」

これが最近の二人の日課

「こっちは準備いいぞ」

「ああ、俺もいつでもいける」

二人は互いに構える

翠は右肩を前に槍先を下に構え重心を下げ、俺も右を前に半身になり構える、拳は握らない、主に俺は拳を握るときは外面の破壊、掌底の時は内面の破壊と分ける、あとは基本左利きだから今は重点的に右で捌いて右で攻撃ってとこ、ってそろそろか・・・

「いねー」

「ああ」

『参る!』

二人は一気に間合いを詰め激突する・・・振りをして俺はすぐに避ける・・・だって・・・

「しゃーんなろー!」

ドゴーン!

これくらったら俺潰れるもん(・o・;) )

「おい真!すぐ避けんなよ!」

「いやいや、避けるよねそれ!?地面陥没してるから!ほら、俺武器もってないし、鉄甲とかあればいいけどその辺の物じゃ多分翠の攻撃に耐えられず壊れるって」

俺は苦笑しながら構えなおす

「一回ぐらい当てたいんだよ!ちくしょー」

いやいや、翠の攻撃一回でも当たったら死ぬって、ツブレル

それでまた二人は鍛練をする、主に俺、さける、さける、さける  
翠、攻撃、攻撃、攻撃、しゃーんなろーね

二人で汗を流して一旦別れ、翠の相棒「紫燕しえん」「黄鵬おうほう」「麒麟きりん」を翠と二人で川辺に連れていき体を洗う  
ここまで来るときに翠に馬を上手に乗れる用に少し訓練してもらっている

「いつもいつもご苦労様」

麒麟の体を藁でゴシゴシ洗う

麒麟は気持ちいいのか鼻を俺の体に擦りつける

「真は不思議だよな」特に麒麟なんて警戒心強いはずなのに、すぐ仲良くなって、今じゃ意思の疎通もできる感じだもんな」

「俺も不思議に思うよ、天にいた時から動物にはなつかれてたからな、特に猫とか、気付くと足にへばりついてたよ」

「ははっ、なんか想像できる」

翠と他愛もない話をしながら馬の体を洗って馬小屋まで行って別れる

その後はたんぽぽと二人（たまに翠も）で晴れた日は日向ぼっこ、雨の時は二人で勉強、今日は・・・

「お兄様、また天のお話聞かせて」

「ああ、いいよあそこになっところがるか」

そう今日は日向ぼっこ、つまり雲ひとつない青い空

たんぽぽには俺の国での昔話、スポーツ、アクセサリーなどの話をする・・・そこはやっぱり女の子アクセサリーの話には食い付く

「ねーねーお兄様、ぺんだんとって？」

「ああ、そっか、ええ、こっちは、そう！首飾り」

チャリ

俺の首から下げている指輪のペンダントを服から出し見せる

「わ〜きれえ〜、なんかキラキラ輝いてる」

「これな、俺の妹に誕生日のお祝いにあげただけだね、二つあって実は色々あって今は俺が二つ共持つてるんだ、ホントはこれ好きな子とそれぞれ一つずつ持つとく物らしいんだけど知らなくて買っちゃってさ（笑）」

「お兄様ってドジだね（寂しい顔もするけど妹さんの話だと笑顔にもなるんだよね）」

「ああ、妹にも言われたよ（笑）」

そんな風に笑っていたら徐にたんぽぽが

「そんなところ隠れてないでお姉様もこっちにおいでよ」

「ん？翠？」

たんぽぽが声をかけた方に振り向くと

「よ、よう、さっきぶり、偶然見掛けてさ、声をかけようと思った

「らたんぽぽ」

「にじしし、偶然じゃないくせに」

「な、たんぽぽ！／＼／＼」

「ま〜ま〜、翠もおいでよ気持ちいいよ」

「気持ちいいよ〜」

「あ、ああ／＼／」

翠はいそいそと俺の隣にくる

「ねっねっお姉様、お兄様って凄く良い匂いがするんだよ（くんくん）」

何故かいきなり脈略もなく俺の胸辺りに顔を埋めて匂いを嗅いでくる

「なあっ！？／＼／／」

「ははははっ！たんぽぽくすぐっ、くすぐったい」

「えへへ〜」

「こ、こらたんぽぽ、お前女の子なんだからもうちよっと・・・」

「にじしし、お姉様はこんなこと出来ないもんね 羨ましい？」  
それがいけなかった、翠の意地を火をつけてしまった

「う、う、うがあああ、こ、こんな余裕だ！に、匂いを嗅ぐぐら  
いー」

翠がいきなり胸の辺りに飛びついて来て嗅いでくる

「たんぽぽも負けないう〜！」  
いつから勝負事につて

「うは、はは、ははは、くすぐった、くすぐったいって二人とも、  
ひ、ひー、笑い死ぬ」

三人は一暴れして落ち着いて寝る

「ね？お兄様良い匂いしたでしょ？」

「あ、ああ（確かにしたけど、私はなんて事をノノノノ確かに落ち  
着く良い匂いだったけどノノノ）」

「良かったねお姉様」

「ノノノノノ」

因みに真は笑い過ぎて倒れていた……

昼

町で困っている人の手伝いをする

「御使い様、ここなんじゃが・・・」

「ああ、ここね、今直しちゃうから、それとお爺ちゃん俺の事は真で良いって言ったのに（笑）」

そう、俺は昔働いた大工の仕事を生かし、壊れている所を片っ端から直している

「また困ったことあったら遠慮なく言ってねお爺ちゃん」

「ああ、ありがとうのお〜」

「またね、お爺ちゃん」

大体終わったら今度は子供たちと遊ぶ

「あっお兄ちゃんだ！」

一人が見つけ、二人三人と次々によってくる

「オッス！お前ら元気にしてたか？」

「うん、兄ちゃんを待ってたんだぞ」

「悪い悪い、今日はちょっと多くてな、終わったから少し遊ぼっか」  
『わ〜い！』

子供は元気が一番だな・・・ん？あそこで一人でいる女の子が・・・

「ちょっとごめんな」

「なんだよ兄ちゃん」

俺は輪から抜け出しその子に声をかける

「どうしたの君」

「……」

「良かったら一緒に遊ぼう」

「でも……」

「大丈夫、お兄ちゃんと一緒に行こう」

俺はその子を肩車し輪の中に戻る

「わ……たか……」

「気持ち良いかい？」

「うん！」

ホントは遊びたかったろうに、恥ずかしくて声をかけられなかったのかな？

「名前は何？俺は真」

「すす鈴」

「そっか、鈴ちゃんねこれからよろしく」

「うん！」

「お兄ちゃんその子だけずるい、私も私も！」

「はいはい、順番順番」

私も僕もとどンドン来て順番にやってしばらく

「おーい真はいるか？」

「あゝ馬膾様だあゝ」

「お前たち元気にしてたかい？」

「うん、お兄ちゃんとずっと遊んでた」

「そっかい、それは良かったね楽しかった？」

「うん」

子供達と他愛ない話をし

「みんなごめんよ、ちょっと今日は真を借りてく」

「うん大丈夫だよ、お兄ちゃんお仕事頑張ってるね」

「ああ、また今度くるよ」

俺とひまりさんは二人で子供達に手を振って別れた

「お疲れ様、いつもありがとうね」

「はは、そんな俺子供大好きなんで苦だとは一度も思ってますんやなよ」

「そうか、それじゃ孫楽しみにしてるよ（笑）」

「はい!？」

「翠とたんぽぽどっちが先かね」

「ひ、ひまりさん!？」

「ははははっ冗談冗談（あながち冗談ではないが）」

「ひまりさん怖いですよ」

二人はそんな話をしながら城に戻った

「それで今日は？」

「ああ、きょうも悪いが書簡の整理を頼めるか？」

「はい、大丈夫ですよ」

「それじゃ私が必要な時は声をかけてくれ」

「はい」

そう、最近になってやっと読み書きが少し出来るようになった読みは出来るんだけど書きになるとちよつとね（笑）

「さあちゃちゃつとやりますか」

袖を捲り気合いをいれて書簡を見通す

「苦情の物が多いけど・・・これは!？」

ふと目にとびこんできた物を掴み見る・・・それは・・・

「ひまりさん!!これぞ!」

「何だ!・・・ふむふむ、最近噂でも聞いている確か真も戦ったよな?」

「はい、俺の時は十人ぐらいでそんなに多くはありませんでしたが」  
そう書簡には今黄色い布を巻いた、いやもうこう呼ぼう、三国志で  
解る「黄巾党」が多くなつたと書簡には書いてあった

「それで、・・・真はどうしたいんだ」

もう俺の次の言葉が解っているような素振りでも聞いてくる

「俺は・・・黄巾党から民を助ける為に旅に出たいと思っています・  
・・・」

「そうか・・・」

「駄目・・・ですよね」

俺は下をむく

この町だつてまだまだ賊や違う部族など時たまちよっかい出してく  
る仕事も多くある・・・だけど・・・

「私、翠、たんぼぼがダメだつて言つたつてあんたは行くよ、そう  
いう目・・・してる」

「分かりますか？」

「分かるよ、あんたは分からないけど少なくとも私は真を自分の息  
子の用に思つてる・・・そんな息子の考える事くらい分からなきや  
な」

「すみません・・・」

「謝るな、まゝ私は良いが、翠とたんぼぼに怒られるのは覚悟しと  
きなよ（笑）」

「はいそれは（苦笑）でも謝らせてください、恩も返せずこんな事  
を・・・」

「恩を返せだなんて思つちやいないよ、家族にそんなの不要だよ・

・それでいつ発つつもりだい？」

「準備や色々挨拶などもいれて七日過ぎぐらいには」

「そうか・・・速いが真が決めたらならば仕方ない」

「はい、ありがとうございます」

「それじゃ今日はみっちり書簡と勉強やるぞ！」

「ははっ、わかりましたお願いします！」

そうして俺のある一日は終わる

## 真の一日（後書き）

なぜか会話文が多すぎる気が皆さんは気になりませんか？できれば  
そこら辺の感想もお聞きしたいような怖いような（笑）

空いている日はちよくちよく書くつもりなので長い目で見てください  
ると嬉しいと思います

確かな一歩・・・そして（前書き）

あゝついに頭が沸いて14才病とご都合主義が・・・

皆さんこれからこんな事が続きまわると思います!!

それでもオツケー!!と云う方がいれば嬉しい限りです

確かな一歩・・・そして

あれから6日が過ぎついに出発の日・・・

はあくついに出発の日か、不安がないって言ったら嘘になるけど噂じゃもう一人の天の御使いもあらわれたって聞いたな、あくまで噂だから会ってみない事には分からないが・・・あとは一度呉の「孫策」、魏の「曹操」、蜀の「劉備」、洛陽の「董卓」に会えるなら会ってみたい・・・

「おーい、真準備は出来たか？」

「はいひまりさん、後は出発するだけです、ですが・・・」

「ああ、解ってる、翠とたんばぼだろ？」

「はい・・・二、三日口聞いてくれませんか、覚悟はしてたんですけどさすがにきついですね」

二三日前に出発の報告をたんぽぽ・翠の順に説明していった

たんぽぽにしたときは「バカー!!」の一言と熱烈な腹にパンチ一発、翠に到っては一言も言わず無言で仕事に向かってしまった・・・

「まゝ二人共真を心配してたからな」

「心配されるような事なんてありませんたっけ？」

心辺りがないんだが・・・

「これは私から言つなと言つたんだが、真がこの世界にくる前の話をしたろ？あの話二人共聞いてたんだよ」

「えっ！？全部？」

「ああ、全部だ」

あちやう、聞かれていたか、だからかあの二人が一所懸命に・・・

「そうですね・・・悪い事をしてしまったかもしれません、相談の一つでもしておけばよかった・・・」

「そうだな・・・ってそんな長話もしてられないか・・・町の入口までは一緒だ」

「はい、行きましよう、もう会えないって訳じゃなし、会った時謝ります」

用意した物は無駄になったけどいつか渡そう・・・

二人で町の入口まで行くとそこにはムスツとした二人が待っていた。  
・  
・  
・

「翠……たんぼぼ……」

「……（ムスツ）」

はは、頬を膨らましてしまった……、用意した物は無駄にならな  
かったな……

「ごめんな、二人に相談もなしに決めちゃって・・・でも一度口に  
した事だし、町の子供たちみたいなお親がいなくなるような事を見過  
ごせないんだ悪い、・・・それと俺の天の国の生活の話聞いてたん  
だな」

『ッ!?!?』

「ごめん、ちゃんと二人にしっかり話せば良かった」

「でも!!それは・・・」

たんぽぽが歯をくいしばり言う

「いや、二人には俺から言うべきだった、それに俺達家族だもんな  
《ニコッ》」

『ッ！！！！』

「二人には笑っていて欲しい、俺、二人の笑顔好きだから、二人の笑顔を見て出発したいんだ」

「ム、もうお兄様にはかなわないな」

「はは、ホントごめんな、あとたんぽぽとひまりさんはいこれ、腕出してくれる？」

『ん？』

二人にある物を見せる

『なんだそれは？（何？それ）』

「これはね、俺が居た世界の昔に流行った“ミサンガ”ってやつで願いを込めながら手首に結ぶんだそれが切れる時に願いが叶うって

言われてるんだよ、願いを考えてくれる?」

『ああ』

決まったかな?

「二人共決まった?手首に結ぶね」

二人にミサンガを結ぶ・・・うん似合って良かった

「うん!!やっぱり二人共似合ってる」

「ありがとう真」

「ありがとうお兄様」

あとは……

「翠」

「……なんだよ」

あれ、まだ不貞腐れてる……しょうがないなあ

《ギョッ》

俺は翠を力強く抱きしめる

「へっ！？／／／ええええ！？／／／」

「翠にはこれを渡したかったんだ」

《チャリ》

俺のペンダントを翠の首にかける

「それって!?!」

たんぽぽは知ってるからな、驚きもするか

「たんぽぽ?」

「たんぽぽは知ってるんだ、あのねこれは妹にあげたお祝いの首飾りなんだけどほらそれは俺が持つてるから、それは俺がずっと身に付けてた首飾りなんだ翠に似合うと思ってる」

「そ、そんな大切な物!?!」

「大切な物だから大切な家族ひとに持って置いてほしいんだ」

「大切なっ!?!? / / / / /」 《ボン!?!?!》

『おお〜!?!』

あれ?なんか真っ赤に・・・

「わかった・・・大切にする / / / / /」

「ああ、俺も持ってるし、それにそれってお互いに持ってないと意味ないしさ、元々そういう物だし」

「ッ / / / / / (そ、それって!?!?)」

「真、そろそろ……」

「はい、それじゃあ皆……」

「お兄様体には気をつけてね」

たんぼぼの頭を撫で……

「ケガしないようにな」

ひまりさんと握手をし……

「無理……すんなよ」

翠を抱きしめ……

「いってきます…！」

『いってらっしゃい…！』

三人の笑顔を背に俺は確かな一歩を踏み出す！！

はずだった・・・んだけどなあ、まさかあれだけカツコつけて笑顔  
でただいまあなんて言ったら翠とたんぽぽに何されるか・・・ちゃ  
んと地図入れたと思ったのに・・・仕舞いには森に入ったら夜にな  
つちまうし・・・運悪いな俺・・・ていうか踏んだり蹴ったりだ！！

頭を抱え悩んでいると後ろから声をかけられる

「あゝんらお困りのようねん」

「・・・」

うん、見なかった事にしよう

「あゝんら、お困り」

「ふん!!」

シュ!!

俺は渾身の左ストレートを放つ

「ふんぬ——!!」

「うお!!—!!うぐ……はぁ——!!」

自分の腕を前で交差し風圧を自分の気で弾く

《パン!!》

「んも〜いきなり攻撃なんて危ないじゃない」

「すまない……あまりな姿だっ!?!いやごめんなさい」

こえよ目光つたし、何より紐パン一丁の裸の筋肉マッチョだぞ夜の森で……ヘタなホラーより恐いわ!!

「それで……あなたは？」

「貂蟬よ」

え〜と……あの三国美女……の？

「マジ?」

「マジよん」

頼む!!嘘だと……誰か嘘だと言ってくれ!!orz

「あのね、私が会いに来たのは此れを渡すの一言助言をしに来たのよ」

貂蟬に布に巻かれた物を渡される

「これは?」

「いいから開けてみなさい」

《シユ・シユシユ》

紐をほどき布を取る

「これは!?!?…何?」

明らかに手甲と脚甲ですけど後は普通と変わらないし…

「これね鉄真さんに預かって来たのよん」

鉄真？誰だそれ？

「あの、渡す人間違えてない？俺鉄真なんて人知らないんだけど」

「あらん、それはお祖父ちゃんの事よん、それと血の繋がった実のお祖父ちゃん」

じいちゃんの名前初めてしった……ってか名前あるならしっかり言おうよ……それとなぜここで目の前の筋肉に実のじいちゃんとかミングアウトされにゃならん、孔に落とす前にそこ重要だろ！？

「それとお祖父ちゃんから伝言よん」

《その手甲は代々御剣流を継承した者に渡すはずだったんじゃがワシの代で終わりじゃと思っと思って渡すの忘れとった テヘツ》

おいおい、まず一つ……そんな物あるなら最初っから渡してくれ

てか思い出してくれ・・・それと《テヘッ》じゃねー!!まぐろ  
れで避けまくらず懐にも行けるようになるからいいけど・・・

「それとねん、その武器龍の鱗でできてるからその辺の武器じゃ傷  
一つつけられない防御に適した武器よん、それでその武器の名前が・  
・・・」

「《ゴクッ!》」

「・・・」

「・・・」

「忘れちゃったわん」

「ずいー!」

やべー、あまりの溜めで盛大にヘッドスライディングしちゃった

「だったらあなたが新たに名前を付けてあげればいいじゃない 愛  
着も湧くと思うわよん」

いやいや代々受け継がれて俺の代で名前を変えていいんだろうか・  
・まゝ解らないなら仕方がないけど

「そうだなあゝ・・・龍が元で俺には二つの拳で人々を・・・いや  
大切な者を護りたい・・・なら・・・この手甲のこれからの名前は・  
・・“龍拳護人”だ!!」

144

《ピカーー!!》

名前を決めた瞬間二つの手甲が光、声が聞こえた

「主、これから私が主を 護りましようぞ  
その時は 名前を」

目の前の光が戻ってくる

「・・・」

「どうかしたかしらん？」

「解らない・・・けどなんか声が聞こえた気がした」

「あら？」

貂蝉が龍拳護人に目を向けたので自分も見ると

「色が・・・なんか手甲の色が真っ赤になってるな・・・」

「あらん？あらん？あらん？」

クネクネするな!!!

「ど、どうしたんだ貂蟬」

「んゝもしかしたら持ち主の意識が通じたみたいでこの手甲にも意志が宿ったみたいねん、まだあまり目覚めてないけどそのうち目覚めるわん、あながちさっきの声って言うのもその子だったのかもねん 大切にね真君」

だ・・・だからクネクネ・・・

「あ、ああ、付けて見るとしっくりくるしな大切にする」

「それは良かったわ」

「あ!?!あと、なんか一言助言があるって言ってなかったか?」

「そうよん それはねまずここから北を目指しなさいそこにあなたと理想を同じにする子がいるはずよん、そこにごしゅ、もう一人の天の御使いもいるわん」

「そか、何から何までありがとつな貂蟬」

「あらん そんな笑顔を向けたらキス」

「それはやめろ」

「もういけずね〜あ〜あとこれをもう一人の御使い君に渡してくれ  
るっ」

貂蟬はどこから出したのか一振りの剣を渡してくる

「これは？」

「これは御使い君のお祖父ちゃんのところから拝借してきたのよんなか渡したかったみたいだから手助けしちゃったん」

「そっかしっかりと渡しておくよ」

俺は背中くくりつける

「今日はしっかりと寝て明日の朝に行きなさいよ〜ん!」

貂蟬はこちらに別れの挨拶もさせないままそのまま言うことだけを言っただけで消えてしまった・・・

「ありがとも言えないのか・・・忙しい奴だな・・・でも助かったありがと」

新しい武器、目指す場所もとりあえず決まった・・・真は心に活を入れ出発を明日にし寝る事に決めるのだった

確かな一歩・・・そして（後書き）

いや、本当に本能に任せるのは気持ちいい限りです

ご都合主義万歳！！！！

感想など怖いですがお待ちしております

黄巾党襲来！！（前書き）

みなさん本当に毎回毎回遅くなってすみません！！

しかもこんなに待たせて短いという体たらくホントすいやせん

一言ごめんなさいしか出てきません

それでは駄文ですがどうぞ

黄巾党襲来！！

貂蝉に言われたとおり北を目指しゃつと村に辿り着いた

「やっと村に辿り着いた、まゝまずは腹ごなしに飯でも食べて情報収集だな、んゝ食べるとこ食べるとこつと」

俺は食べる所を探すため村をブラブラ歩いていた、その時村人達の話が耳に聞こえてきた

「おい！公孫贄様のとこの領地で黄色の布を巻いた奴らが大群で陣はってるって噂だぞ！」

「本当か！？それが本当ならこんな近くの村にも攻めてくるんじゃないのか！？村が攻められたらひとたまりもないぞ！！」

んゝ穏やかな話じゃないな、てか遂に軍単位で動き始めたかそろそろ黄巾の乱の時代に入ったのか？

俺三国志ちょこつとしか知らないし、何より三国志に天の御遣いなんて出て来ないからどう歴史が変わってるかも分からん

とりあえず今は頭の中に入れておこう、って考えながら歩いてたら  
食うところみつけ！何をするにもまずは飯食わなきゃ！！

「すいませ〜んマーボー辛めと飯一ツ」

やっぱり中国なら本場のマーボーは食べなきゃだよな？ね？

「へい！おまちどお〜！」

「これこれ！うまそ〜いただきます〜！」

まずはマーボーを一口食べ・・・美味しいよじいちゃん、感無量です！

その後は熱々のご飯にマーボーをぶっかけ・・・ってなんで店主驚  
いてんだ？ま〜いいそのままぶっかけて食べる

「ふう食った食った、やっぱり辛いマーボー美味しいな」

食べ終わり食休みをしていると外が騒がしくなり店内に入ってきた男が声を張り上げて言う

「みんな賊がくる！早く逃げろー！！」

なんだって！？やっぱりさっきの噂は本当だったのか！？

「おっちゃん！そいつらはどっちからくる？」

「なんでい兄ちゃん、兄ちゃん一人行った所でどうにもならねーよ」

「そんなの行ってみなきゃ分からないじゃない、それに村失いたくないでしょ？」

「当たり前だ！俺達が育った村だ出来ることなら逃げたくもねーだけど・・・」

「大丈夫、俺が護るよ、それにそれなりに武もある心配しないで」

「だけどよ一人でなんてよ……、それになんでそこまでしてくれんだ？」

「ん〜困ってる人を見て見ぬ振りできないだけだよ」

安心するようにおっちゃんに笑いかける

「おめー、……名前は？」

「真だよ」

「真……頼む！俺達の村を救ってくれ！」

いつの間にかおっちゃんの後ろに村人達が集まっていた、その中には涙を流し悲願する者もいる

「了解、大丈夫だよ必ず勝ってくるからみんなは安全な所に」

「ああ、死ぬなよ真、賊はここから北の方角から来るらしい」

「おう！それじゃあ行って来るよ」

俺は賊が来るであろう場所に向かって走って向かおうと酒家から出ようとした

その時いきなり目の前に二人組の女の子が現れた……って俺の前方不注意だわな、これはぶつかる！！

『ぎゃっ……』

「うおっ！..」

????サイド

私達は水鏡塾という水鏡先生が開いている私塾で学んでいたけど

今この大陸を包み込んでいる危機的な状況を見るに見かね、力の無い人達が悲しむのが許せなくてその人達を守るために私達が学んだ事を活かす為に

今公孫贄さんのとこにいますという天の御遣い様が義勇兵を募集しているという噂をこの村で聞き今宿屋でこれからの旅の準備をしている

「ん〜もうちよつと食べ物も必要かなあ〜」

私が旅の準備に悩んでいると・・・

「しゅ、朱里ちゃん！」

あ、ご紹介します、私と同じ水鏡先生の所で学んでいた鳳統、真名を雛里ちゃん

私は姓を諸葛、字が亮で、名を孔明、真名を朱里といいます

「雛里ちゃんそんなに慌ててどうしたの!？」

「き、黄色い布のじょくが、あう」

「とりあえず落ち着いてもう一度」

「う、うん。あのね今情報を集めに村を歩いてたら向かいの酒家で村のおじさん達が大声で言ってたんだけど、この村に黄色い布を巻いた賊が攻めてくるって」

「え！？それじゃあ早く村の人達を逃がさないと！！」

私と雛里ちゃんはすぐ宿屋を出て呼び掛けようとした時向かいの酒家からはっきりと鮮明に声は聞こえた

『んゝ困ってる人を見て見ぬ振りできないだけだよ』

私はその言葉を聞いて体が動かなくなってしまった、横を見ると雛里ちゃんも同じく立ち止まっている

「雛里ちゃん！！」

「うん！！」

私達と同じ様な考えの人がここにもいたのだと理解したとき無意識に声を出して一歩一歩酒家に近づいた時だった、急に視界に影がで

きたと思ったらその人とぶつかった

『きゃっ!!!』

「うおっ!!!」

ぶつかってしまい尻餅をついていると私の頭の上からあの澄んだ声の人が……

「すまん、君たち大丈夫かい？」

両手を差し伸べ私達を見ていた

?????サイドアウト

あゝこの状況はどうしたら・・・

「ぼーーーーーーーーー」

なんか心ここにあらずだよ、とりあえず早く起こしてあげないと、俺は反応がない二人の手を取りすぐ立たせる

「ごめんね、ケガはないかい？」

「はわわ」

「あうう」

立たせたのはいいのだが何故か前の二人は慌てて下を向いてしまう

と思ったらいきなり一人の女の子ががばつと勢いよく頭を上げ何を

思ったのかいきなり自己紹介を始めた

「せ、姓は諸葛、字は亮、名孔明でし！！」

あ嘸んだ

「あう〜」

「しゅ、朱里ちゃん」

嘸んだ舌を出して涙目だ、うわ〜申し訳ないがカワイイな〜すげ〜和む

ん？今すげ〜重要なワードが出たような、それこそ誰かさんの罨み  
たいな

「す、すまない、もう一度名前を聞いてもいいかい？」

「ほ、はい、諸葛亮といます」

諸葛亮きたあゝ！！ごほんごほん、取り乱した、あの諸葛亮がまさかこんな小さい女の子なんて、もゝ驚かねえゝ

「そ、そうか諸葛亮ちゃんね、君は？」

俺は諸葛亮の後ろに隠れている魔女っ娘防止の子の近くまで行きしやがんで答える

相手は帽子を深く被り直し答えた

「ほ、鳳統でしゅー！」

「よろしくね鳳統ちゃん」

俺は安心するように微笑み帽子の上から頭を撫でる

「ほ～～～～」

おおぅ、なんかトリップしてる、俺は立ち上がり

「俺の名前は姓は御剣、名が真、この世界には真名があるみたいだけど、俺には真名がないから真が真名みたいなものだから真って呼んでくれたら嬉しいかな」

俺も自己紹介をすると二人は急にひそひそ話をしだし決意の眼差しで俺にこう言った

「私の真名は朱里っています」

「わ、私は雛里です」

まさかあってすぐに真名を教えてもらっなんて

「いいのかい？真名っていうのはしん」

「はい！！受け取って欲しいんです」

諸葛亮、改め朱里が勢いよく答える

「鳳統ちゃんも？」

俺が隣にいる鳳統ちゃんにも答えると

「は、はい！！」

元気に答えてくれる、嬉しいなこんなにも信頼してくれるなんて

「ありがとう、有り難く受け取らせてもらつよ、朱里ちゃん、  
雛里ちゃん」

『は、はい!』

「それじゃあ、二人は急いで安全な場所まで避難して」

「え!?!真さんはどこに?」

「俺はこれからくる賊を懲らしめてくる」

俺がそう言つと慌てたように

「ひ、一人でなんて無茶です!」

朱里が慌てて俺の腕にしがみ付き

「そ、そうです、みんなで協力してなんとか」

雛里も心配するように俺の腕にしがみ付く

「ありがとう、でも村の人達を危険なめに合わせたくないし、俺もそれなりの武があるから大丈夫だよ、それに」

俺は二人の手をほどき安心するようにしゃがんで二人はの頭に手をおき微笑みながら空を見る

「俺には天がついてるからね」

朱里・雛里サイド

「朱里ちゃん」

「うん」

《俺には天がついてるからね》

そう言っつて真さんは賊が来るであろう場所に向かって行った、もしかして真さんは……

「真さんは一人の天の御遣い様なのかな」

「かもしれない、噂だと天の御遣い様は二人だって言ってたから」

「真さんが天の御遣い様だったらいいね朱里ちゃん」

雛里ちゃんは顔を赤くしながら真さんが向かった場所を見つめていた

「うん、私達も何か出来ることをしよう、雛里ちゃん大人の男の人達を集めて!!」

「うん、わかってるよ朱里ちゃん」

やっぱり雛里ちゃんも同じ考えなんだね

「それじゃあ手分けして集めよう」

「……」

真ちゃんどっか無事に帰ってきてください

朱里・雛里サイドアウト

「ふう〜この辺でいいかな？」

これぐらいなら村に被害もいかなだろう、てか俺がそこまで行かせないけどな

「それにしても、うわ〜かなりいるなざっと千人ぐらい？」

俺は遠くを見ながらそう誰に言うでもなく呟いた

俺はこれから人を“殺す”、“人”を殺すのは始めてだ、けどどついう経緯でこの世界に来たとしてもあの魔術を授かった時の映像、御剣流の修行、この世界に来た以上“覚悟”をしなきゃいけない

人を殺す覚悟を

その人の分まで最後まで生きる覚悟を

俺はそれを心に留め“龍拳護人”を身に付ける

《カンカン》

両手の甲を打ち付け音を鳴らす

「さあ行こうか龍拳護人」

遠くにいる黄巾党を睨み言っ

『はい、行きましょつ、主』

そう聞こえた気がした俺は口角を上げ軽く笑いながら黄巾党の方に  
静かに歩いた

黄巾党襲来！！（後書き）

どうだったでしょうか？

新たに恋姫キャラを出しましたが少しは掘めているでしょうか

こんな駄文で文才のない俺ですがこれからも長いめで見てくださると嬉しいです

ガンガン！！なんでもよろしいので感想などを頂ければ嬉しいかぎりです

真の真の覚悟（前書き）

やっぱり戦いの前にしっかりとした覚悟を書きたかった

間違ってるとは思いたくない

後悔はしないさ（笑）

## 真の真の覚悟

目の先には千人ぐらいの黄巾党がすごい形相で俺に向かって来ていた

「村を襲うにはちと多いんじゃないかい？」

誰に聞かせるでもなく呟く

覚悟を決めたつもりでもやはり初めてなのだ、武者震いなのかそれとも恐怖なのか体が震えてしょうがない・・・

「ははっ、俺って奴はよえーなあ〜」

そんな事を思っていると何処からか声が聞こえたような気がした

『ばっつっつつかもー！ーん！ー！』

目の前が急に止まったような感覚に陥り過去が甦る

〈回想〉

「ばつっつつかもーん！！」

俺は神じいちゃんと組み手をしてる最中にいきなり怒鳴られぶつ飛ばされた

「ぐはっ！なんだよいきなりっ！」

「真、組み手だからといって気を抜くでない！！これがもし本当の人間同士の殺し合いならばお前は即死じゃ」

「そんなこと言ったって俺今まで普通の人間だったんだぞ」

「お前はそういう世界に飛び込んだと理解せい！！真には教えなんだか・・・、真よこれは御剣流の教え　　ひいては人が人を「殺す」心構えと心得よ」

神じいちゃんはいつにもまして真剣に語った

## 大事なのは人を殺す前と後じゃ

激情にかられて殺した、不慮の事故だったこういう動機は殺す前はいい・・・殺す覚悟をしなくて済む、だが後がいかん。殺した人間の精神がマトモなら一生を後悔することになる

逆に、殺す覚悟をして殺す場合、後悔はしなくて済むだが簡単にそう言っても殺す覚悟するのは早々容易く身につくものじゃない

殺す前なら、相手に殺されるという恐怖、相手を殺すという罪悪感。殺した後なら、他にもっと平和的な手段はなかったのか。他にもっと上手いやり方はなかったのか・・・そんなことを考える。殺人という行為は辛く、苦しく、不意に首を締め付けてくる縄じゃ。だなそれでも尚。

人は人を殺さなきゃならんときがあるんじゃない。それが何か分かるか？

大切な何かを護りたいときじゃ。弱い者を護るときじゃ。

自分が殺さなければ見知らぬ誰かが、あるいは見知らぬ誰かが傷つき、死ぬ。それは　自分が罪を被るより、もっと辛い

いいか、真。人を殺さなきゃならないっていうのは、どっちみち辛い

い状況じゃ。

覚悟しろ。いいか、

「罪を背負つ覚悟をしろ」

「殺される覚悟をしろ」

「戦つ覚悟をしろ」

そしてだ。

「生き残る覚悟をしろ」

まあのお、正直言つてじゃが。……人なんてあんまり殺すもん  
じゃないと思うんじゃがなもう一つ。

これよりお手軽で気楽な手段があるぞい。こつちは全然辛くないそ  
れはな人を殺すときに辛いのは、マトモな心を持っているからじゃ。  
だからマトモじゃなくなればいい

人を殺しても、虫を潰したみたくなんとも思わないように心を凍ら  
せる、あるいは 人を殺すことに快感を覚えるように心を煮え  
たぎらせる。まあ分かりやすく言うつとじゃ

「人をやめてしまえば」「いいんじゃよ

まあ、お主はの優しい子じゃ、そう覚悟しても震えたり恐れたりす  
るときがあるじゃろう

そういつときはこの言葉を思い出すといいじゃろ

そう言って最後は笑顔で「己の覚悟」と「ある言葉」を教えてください

〜回想終了〜

じいちゃん

今がその時なんだよな・・・

「すう~~~~はあ~~~~」

深呼吸をし丹田に力を籠めまだ目の先にいる敵を睨みじいちゃんに  
教えられた言葉を口ずさむ

心は熱く

手は綺麗に

頭は冷静に

体を半身に構えいつでも行けるように準備をする、そのとき後ろから雄叫びが聞こえたと思ったたら何本もの矢が俺の頭上を越え敵に吸い込まれていくようだった

「ありがとう、朱里、雛里、村のみんな」

その助力を受けながら俺は敵に突っ込んだ

これより真の初めての覚悟を持った大切な者を護る戦い

そして二つ名

味方からは「白き龍」

敵からは「炎鬼」

と呼ばれるきつかけとなる戦いの幕開けである

## 真の真の覚悟（後書き）

ちよつと戦いを引き延ばした感バリバリですが気にしない方向で皆さん一つ宜しくお願いしますだ

勝利、護った者（前書き）

みなさん連続投稿です

みなさんもお気づきかと思われませんがこれの一個前の話とこの話のちよっとした所は俺が大好きな「あやかしびと」と言うゲームの九鬼先生という人の言葉そして主人公の拳法九鬼流が大好きなので参考にさせて頂きました

不快に感じてたらすみません

でも俺は後悔しません！！

## 勝利、護った者

（黄巾党サイド）

「何一人にてこずってんだ！！村はもう目と鼻の先なんだぞ」

頭は焦りながらも部下に声を張り上げ叱咤する

「しかし頭、前に出た者からどんどん無惨にも殺されていきます！  
！首がなくなる者、内臓が背中から飛び散る者これじゃあ全滅です  
！！」

それもそのはず、お頭と部下が話している間にも一人、二人  
いや十、二十と部下が死んでいく

その時お頭はやっと気づいた　　手を出してはいけない奴に手を出したと

「頭それに奴は変なんです、気づかないうちに隣の奴は死ぬは攻撃  
をしてもあたららないそのうちに懐にいるらしいんです」

そう真の受け継いだ拳法は掌底は先の後、カウンターを主体、拳の時は先の先、つまり相手が気付かない神速の速さで敵を沈める

中国は北派、円華拳の流れを汲んだ我流の拳法それが真の使う拳法

### 御剣流の真髄なり

気付けば回りには二十人ぐらいの部下しかいなかった  
そこにさっきまで向こうにいたはずの青年が此方に静かに死にそう  
な部下の首を掴み引きずりながら近づいてきた

「お前が頭だな　　なんの為に村を襲いに来た」

その声は底冷えする地獄があるなら地獄から聞こえたと思えないような声だったろう・・・

「ふ、ふん！！そんなの決まってるだろうが！！食料と女だ」

頭ではなく部下が答えていると

パンツ！！！！　　ブシャー！！！！！！

隣の部下の頭がなくなっていた

「お前には聞いていない  
呼ばれてるものよ」

それで今の言は真実か？頭なんて

気づくと残りの部下は必死で逃げていた、興味がないのか目の前の  
「怪物」は目もくれず目の前で立ちこງ言った

「構えろ、そして死んで今まで殺してきた人達に泣いて詫びろ」

俺は怖くなり震える体で剣を構え形振り構わず横から剣を振った

「し、死ね—————!!」

〜黄巾党サイドアウト〜

頭は恐怖に耐えられず震える体で俺に向かってくる

俺は静かに柳のように構える

半身になり右掌を前へ左腕を螺子り（ねじり）ながら引いていく

そこからはスローモーションのように流れた

直線ではなく、円を描く様に動く

一歩だけ踏み込み、掌打で剣を持った腕を右で腕の内側を叩く

捌く           これが御剣流の基本骨子となる技の一つ

これは例えるなら飛び交う弾丸を腕で弾けと言っているに等しい行為

相手が怯み体制を崩す

俺は右で捌いた体制を直すため相手の懐で回転し体制を相手の正面にする

御剣流の動きは円と球を基本とする円を十重二十重に繰り返せばそれは螺旋に通ずる

「円転自在にして、球転自在」

懐にしているのにビックリしているのだろう目をパチパチさせて目と目が合う  
時が止まったような瞬きのような瞬間一言

「俺はこれからもこの罪を背負っていく」

拳ではなく掌で

御剣流

絶招

肆式名山

内の壱

「ねじりほむら  
螺子焰」

心臓の位置に掌打を打ち込む  
相手の服は螺子れその部分だけが裂け吹き飛びこときれた

「ふう~~~~~」

丹田に溜まった力を逃がして終わったことを噛み締めていると後ろから

『真さくさん!!』

と声を張り上げ笑顔で走ってくる可愛い二人を安心させるため手を振って無事を知らせ

「すい、じいちゃん……護れたよ」

その上を見上げ見てくれているであろう二人に呟いた

?????サイド

「見たか趙雲殿よ」

私は隣にいる者に声をかけた

「あ、ああ、凄まじいな、まだ体が震えている気がしてなりません  
な関羽殿」

「ああ、私でも勝てるか分からん」

「ふむ、関羽殿にそこまで言わせる武、一度手合わせ願いたいもの  
ですな」

「そうだな、その前にうちの義妹が突っ込んで行きそうだけどな」

「はははは、張飛殿ならやりそうですな」

「あれを止めるのは大変なのだぞ」

「大丈夫、御遣い殿がなんとかしてくれるであろう、それよりもあの者御遣い殿とどちらが強いのだろうか」

「そうなのだ、まだご主人様の本気を見ていないから分からないがどちらが強いのか興味はある武人として」

「まあ、それよりもこの事を公孫蒼殿に伝えよう、近い内あの者と合える予感もある」

「ふむ、間諜に来てよかった、良いものが見れた」

二人でもう一度あの者を見る

空を見上げ何かを考えているのだろう、その姿はとても、とても儂く見え、胸が締め付けられるような感覚に陥った

「????どうかしましたかな関羽殿」

趙雲殿が一瞬見たがすぐに平然を装い私達は馬に乗り

「いや、・・・なんでもないそれよりもいきましょう」

公孫賛殿の元に私達は向かった

そんなことがあったことなど真はまだ知らない

?????サイドアウト

「大丈夫ですか？ケガはありませんか？」

朱里が心配でそう声をかける  
俺はゆっくり空から朱里に視線を戻し

「ん？　　ああ、大丈夫、多少切り傷はあるけど命がどうこう  
にはならないよ」

「それでも手当ては必要です！！」

朱里はちよつと怒り雛里は不安なのか俺の服の裾を軽く引つ張る

「雛里、もう俺には触っちゃ駄目だ、俺は血に汚れた、君たちまで汚れてしまっ」

雛里は一瞬怯むも今度は大胆にも腰に抱きついてきた

「汚れてなんかいません、汚れていたとしてもそれは私達を護ってくれた結果です」

「はい、私も雛里ちゃんと同じです、その体もあなたが武器にしたその二本の腕も私達を護ってくれました、それなのに汚れてるなんて思うはずがありません」

二人は胸を張って言いきる

「それに見てください!」

朱里が指差した先には・・・

「じーん！」

「御遣い様——！」

などおっちゃんや村の人の笑顔がそこにはあった

『これを見てもまだ汚れているなんて仰るなら怒ります』

なんて朱里も雛里も声を揃えて言う

そんな可愛いお怒りを見て吹っ切れ俺は泣きながら笑っていた

「はははっ！ありがとう朱里、雛里」

『ツ！？／／／／』

なんか赤くなっていたが気にせず返り血で汚れていない右手で二人の手を取り

『きゅっ！っ。』

なんて声も無視ししつかり二人の手を握り村のみんなのもとへ行く

時間もたち村のみんながお祝いにと宴をしてくれ酒を飲んでいと  
朱里と雛里が来てお酌をしてくれる

「そうだ、朱里と雛里だよなあの時村のみんなに援護を頼んだのも、  
助かったありがとう」

「いえ、私達も何かしなきゃって必死で」

朱里が答え雛里がコクコク頷く

「それでもだよ、本当に助かったんだ、ありがとう」

二人は顔を赤くし俯いてしまうそれが可愛くて無意識に撫でていた  
はわあわいいながら慌てていて更に可愛いそんなとき朱里が不意に  
質問をしてきた

「これから真さんはどうするんですか？」

「俺は明日から旅の準備をしてでき次第公孫賛のところに行かなきゃ  
ならない」

「行かなきゃならない？」

可愛いく首をコテツと傾げる

「ああ、これがある奴から渡されて公孫贄の所にいる天の御遣いに渡してほしいって」

二人は顔を見合せ頷き俺に

『私達も連れてってください』

「ん〜良かったら理由を聞いていいかい？」

俺はなぜ朱里と雛里二人が旅をしてるのか理由と経緯を聞いた

「そうか・・・成る程ね、君達の覚悟は本物なんだね  
った、護衛も兼ねて二人を送るよ」

分か

「はい！でも・・・ずっと一緒にはいれないんですね」

悲しそうに二人は俯く

「ごめんな、俺にも旅をする理由があるんだ、でもすぐにいなくなる訳じゃないしそれに一生会えないわけじゃないと思うから」

「はい・・・」

「ほら、君達にそんな顔は似合わないよ」

「／／／／／」

俺は元気づけるよに二人の前にしゃがみ頭を撫でる

「それじゃあ今日はもう遅いし、宿を借りて明日準備しよう」

『はい!』

朱里と雛里二人に宿を教えてもらいなんと偶然にも二人の部屋の隣だった

「それじゃあまた明日な」

『はい!』

俺は部屋の前で別れすぐに眠った

この時天才軍師二人があることを考えていたなんて寝てしまった俺にはわかるはずもなく

それは時に天国であり時に生殺しという地獄だった

朝起きて両脇に違和感。そう可愛い寝顔で真の部屋で可愛い可愛い  
天才軍師は健やかに寝ていた  
そんな状況で真は耐えるために二人が起きるまで狸寝入りを決め込  
んだのはまた別の話

これより後、公孫贇の使いという兵が村に来て村を護ったことでお  
礼がしたいらしく俺、朱里、雛里は兵の人に行くことを伝え公孫贇  
がいる城に向かった

勝利、護った者（後書き）

どうだったでしょうか？

主人公完全に九鬼流でしたね（泣）

ごめんなさい！！素直に謝っておきたいと思います

関羽、趙雲初登場、そして初戦闘画写難しいと言っより想像が難しいです

また良かったら感想など頂けたら嬉しいです

意外な出会い（前書き）

先に謝っておきます

公孫釐好きのみなさんホントにすいやせん！

でも楽しく書きました

## 意外な出会い

「ごほんっ！」

おい、そろそろ手離してやったほうがいいぞ

「はい？」

急に声をかけられ周りを見回すといつの間にか城の中に居た

「いや、後ろの二人赤くなって俯いてるぞ？」

後ろの朱里と雛里が恥ずかしいのかもうこれでもかと赤い

「うわっ！ごめんな朱里、雛里」

『い、いえっ／＼／＼』

考え事しててどうやって城に入ったのか全然分からん

「それで自己紹介していいか？」

目の前にいる話しやすそうな赤い髪の後頭部で結んだ女の子が聞いてくる

「あ、はい、では俺から」

バンッ！

急に玉座の間？の部屋の扉が勢いよく開けられ何事かとみんながそこに注目すると

「公孫贖！」

天の御遣いらしい人が来たって本当か！？」

そこに勢いよく飛び出してきた男、後ろからそれを追いかけるように三人の女の子が来た

???サイド

俺の名前は北郷

ほんごうかずと  
一刀

この世界では天の御遣いなんて呼ばれることもある

訳も分からずこの世界に紛れ込んで賊に襲われ倒しどっいつことが  
考えていると、三人の女の子に声をかけられこの世界の事、名前を  
聞いてビックリ!

なんと自分は三国志の世界に来てしまったことが判明

あゝあのときは本当に驚いた

「ご主人様どうしたの？ぼくとして」

この子は 普段はぼくとして信じられないけど聞いたらび  
ツクリだよ、かの有名な、「劉備玄德」  
それも女の子真名は「桃香」

「あゝこの世界に来てから結構たつなと思ってさ」

俺がそんなことを言うと

「そうですね、ついこの間なのにもつずっと一緒だったように感じ  
ます」

このキリッとして綺麗な長い黒髪の子は後の、「五虎大将」の一人  
関羽、真名は「愛紗」

「にゃはは、最初会ったときのお兄ちゃんはすごかったのだ」

このニコニコ顔の太陽みたいな子は張飛、真名を「鈴々（りんりん）」

「そうだよね、あの時のご主人様すごかったよね、敵をバツバツ倒して、かっこ良かったな、ほんと管路ちゃんに聞いて良かったよ、でももう一人の天の御遣い様はどこにいるんだろかね、愛紗ちゃん」

「それなんですが桃香様、先日」

二人は真剣に話はじめ

「ん？どうしたのだお兄ちゃん」

急に村人達が集まっている方に目を向け一刀に鈴々が声をかけるが聞こえていないらしく集まりの方に向かって行った

『ご主人様？』

「何でも公孫贄様の所にもう一人の天の御遣い様がいらしたらしい」

「あの隣村を一人で護ったっていう奴か？」

「なんでも凄い綺麗な人らしいわ」

「あの白き龍なんて呼ばれている」

俺はそれを聞いて一目散に城に向かった、後ろで声が聞こえるが振り向かず向かう

会ってみたかった。

俺と同じようにこの世界に迷い込んで大変かもしれない、何より愛  
紗に聞いた千人の賊を苦もなく全滅させた人がどんな人なのか・・・

敵になっってしまうのか味方になってくれるのか

そんなことを考えながらそこにいるであろう部屋の扉を勢いよく開

けて

「公孫贖！」

天の御遣いらしい人が来たって本当か!？」

俺は息も整えず言ってキョロキョロ探していると後ろから三人が追いかけて来ていた

「ご主人様急に走って行ってどうしたのっ!？」

桃香達が俺の後ろに来ても気にせず探すと、

ある男に目が留まり視線が合い背中に電気が走ったような感覚に陥り、

俺がそんな風になってることなんて分かるはずもなくその人は

「俺がその天の御遣いだか？」

そんな澄んだ声で答えた

????サイドアウト

「俺がその天の御遣いだか？」

俺がそう答えるとみんながビックリしたように固まる・・・  
みんな？

あれえ〜何故にみんな？

朱里に雛里までビックリして固まって俺言わなかったっけ？

ガシャン！

いきなり入ってきた男が自分の武器を落としプルプル震えだした

「（こいつはいきなりどしたっ!?!  
気持ち悪いぐらい壊れかけのロボットみたいに震えだしたぞ!?!  
しかも涙目!?!おいおい、俺はなんか泣けるような事でもしたか?  
なあ、なあ）」

そんなことを考えている俺に誰も答えてくれるはずもなく、  
引き気味でいると武器を落とした男は今この場で誰も思わないぶっ  
飛んだ言葉をぶっ放した

「兄……さん」

『!?!』

みんなが今度は一斉に俺を見る

はい？

この目の前にいるイケメンバカタレは今なんと？

兄さん??

ふむ、確かに俺には目に入れても痛くない可愛い可愛い妹はいる、  
だがしか〜しどんなに記憶を遡ってもこんなイケメンの弟など出て  
こん！

否！断じて否だ！

第一こんな弟いたらみんなに自慢しながら町内を歩いて自慢しとるわっ！

（本人は自分の顔もイケメンの部類だということを理解していません）

「やっぱり・・・兄さんだ・・・髪の色が変わってるけど兄さんだ！兄さ〜ん！」

その男が何を思ったのか急に飛び込んできた

何故に好き好んでイケメンに抱き付かれなきゃならん！断る！

俺はヒョイと横にずれると勢いが良かったのかナイスなヘッドスライディングをかました

「ナイスヘッドスライディング」

ガバツと勢いよく起き上がり

「やっぱり！」

この世界で現代語を喋って、その姿に、その忘れっぽい性格！完全に真兄だ！」

む？今このイケメン俺の名前を言った？

てことはこいつは本当の事を？本当に俺に弟が！？

親父！なあ隠し子か！？

隠し子なのか！？

前のイケメンは苦笑しながら

「その様子だと、まだ気付いてないね！？」

「一刀だよ！北郷一刀！」

北郷・・・一刀・・・

「ん~~~~ん~~~~ん~~~~んあ!?!~~~~ん~~~~」

とりあえず思い出せないのでほらを吹いた

「あの一刀か？」

「あの一刀だよ！」

「その一刀か？」

「その一刀だよ！」

みんなは空気をよんだ  
間違いなく覚えていないと・・・

「このか  
」

「いい加減に話を進めろ————！」

すば——ん！

こんな混沌とかした空気の中で誰が真の後頭部をはたいたのか

もちろん真の目の前にいる一刀は論外、その後ろで口を開けて啞然としていた子やビクビクしている子、にじしし笑っている子、柱に隠れて笑いを我慢してピクピクしている青髪の子、心配している朱里、オロオロしている雛里でもない……

そう、この場で動き、空気とかしていた張本人！  
公孫贖である！

「（空気とかいうな！せめて空気が薄いつて言えっ！……自分で認めてしまったー！）」

そんな会話が作者と行われていたとも知らず真は

「おお、頭がグワングワンと、ナイスなハリセンツッコミ、  
ハリセン!?」

頭を抑えながらそんな事を言っている時に真の頭に豆電球が「ピコーン！」と付きケロツと

「思い出したっ!」

そう言った瞬間みんなの我慢の限界でみんなが吹き出し笑っていた

そんなみんなを見てその空気を作った張本人の真は最初こそキョトンとしていたがおかしくなったのか照れたのかそれともこの空気が好きなのかニコニコと笑っていた

そんな澄んだ笑顔を見たこの場にいる女性人全員が赤面し  
胸をキュンとさせたのは言っまでもない

意外な出会い（後書き）

どうだったでしょうか

少しギャグに挑戦してみました

劉備玄德と仲間達（前書き）

みなさん次話です！

それではどつぞー！

## 劉備玄德と仲間達

何故かぶっ叩かれて記憶が戻るなんて俺の頭も遂に壊れたかねえ、それにみんなが顔赤いのはなんでなんだろう？

「てか、わりいくな一刀、ぶっ叩かれてやっと思い出した」

俺がそう言つと後ろからはたいた張本人が咳払いをするが無視し

「それにしても、こんなちっこくていつも俺の後ろにトコトコ付いてきて良く俺の真似してたよな、そんな奴がまあ、こんなにかっこ良くなっちゃって」

俺とすいが三回目の親戚たらい回しのところで偶々一刀のじいちゃんに会って道場まで連れてかれた時が初めての出会いだった。

それから良く遊ぶようになり夏休みや長期の休みがある時など俺とすいはお世話になっていた。

そんな事を思い出しながらケラケラ笑い一刀の頭を撫でる

「真兄はずいって、みんな見てるからっ／＼／＼」

そんないつちよまえに言ってる奴の髪をこれでもかとクシャクシユにしながら自己紹介が始まる前だった事を思い出し

「そうだ、そうだ、一刀がいきなり来てぶっ飛んだこと言って話が中断したんだった、  
だからみんなに自己紹介したいとこなんだけど」

と、そこで一度区切り、みんなは何事かと首を傾げる

「その柱のところで隠れてる女の子、  
そろそろ出てきたらどうだい？今が出る機会だと思うけど？」

柱から音もなくユラッと出てきて

「はっはっはっ、バレていましたか」

どの口が言うのかね、喰えない子だけど根は良い子そうなんだけ  
どね

「ふふ、爆笑して、ある程度落ち着いた後にあれだけの殺気をぶつ  
けられたらね」

俺は苦笑しながらいい

「すみませぬ、その性格、後あの戦いを見ていつか会った時手合わせ願いたいと思っていたらこちらに来てく出されたのでな、我慢が  
できなんだ」

「そっか、やっぱりあの視線は勘違いじゃなかったんだ、  
貴女だけじゃなくてもう一人見てたと思うけど」

『!?!?』

おう!?!?これは感だっただけど当たったみたいね

「それは私です」

一刀の後ろから一歩出てきて答える、

その姿はとても綺麗で髪は艶があるのかキラキラと光って見えた

「すみません、見ていながら加勢もせず静観しておりました」

とても綺麗にお辞儀をした、

素直に綺麗だと思った「あっ、謝らないで、ね？」

君たちには君たちの役目がある、それを貫いただけなんだから。

それに殺気もなかったし、気にしてないから」

俺は安心するように微笑んだ

「  
/  
/  
/  
/  
/  
」

「愛紗ちゃん？」

隣にいるぽやくとした子が顔を覗きこむ

「い、いえっ／＼／＼」

「愛紗をもう籠絡ですか、やはり“白き龍”の名は武だけでなく恋も伊達ではありませんな」

『なっ！？』

誰が声を上げたのか分からないが多分今怒ってプルプルしてる子なのだろう

そして後ろにいて俺の腰にしがみついて頬を膨らませている可愛い天才軍師二人よ、  
何故か怒っていらっしやるのですか？  
とてもとても腰が痛いです。

そこにそれを畳み掛けるように青髪の子は爆弾を投下した

「ふむ、私も貴方を気に入りました、  
あの強い武、とても優しい眼、こつこつときまっていた、  
私は貴方を主としたいと思います。  
姓は趙、名は雲、字を子龍、  
真名は星<sup>せい</sup>、  
星とお呼び下され主」

へえーこの子があの“常山の昇り龍”ねえ、

・・・おい、

ちょっと待て、あ、主だつて!?

「お、おいおいいきなりだな、いいのかそんな簡単に決めて、しかも真名まで」

「簡単ではありませんよ、何より気持ちを正直に言っただけです」

ダメだな、こりゃあテコでも動かん、それにこの眼は真剣だ。

こんな妹と同じような目をされたら俺はもう何も言えん

「わかった、慎んでお受けするよ、“星”」

真名を呼ぶと星ははにかんだように微笑んでいた

それを機に俺はみんなが見えるように二歩下が

ぱんっ！

拳と掌を前に合わせ

「御剣流現当主、  
姓を御剣、名を真、  
字、真名はありません。

名の真がこの世界の真名みたいなものなので“真”とお呼びください」

それを聞いて順番に自己紹介

「姓は関、名を羽、  
字を雲長、真名を愛紗あいしやです、  
愛紗とお呼びください」

「真名までっ!？  
いいのかい!？」

「はい、ご主人様の兄君なのですよね？  
ご主人様は優しい方です、  
その優しい方の兄君なら優しい方だと思いますので。  
それに私も星と同じくあの武も見ています、  
信用に足るか」と

血の繋がった兄貴じゃないけどな・・・それにしても・・・  
ほゞご主人様って一刀だよな？  
よく信頼してんだな

「そうか、

優しいかどうかは分からないけど、あの関羽殿に武を認めてもらえるのは嬉しいな、

ありがとう、よろしくね“愛紗”」

愛紗が紅くなって俯くと星が

「愛紗よ、正直に言えば良かるっ？

真殿がs 「

「せーいーい!!」

なんかまた星とやりだしたな、なをだかんだで二人は仲が良さそうだ

そんな事を考えていると今度は赤髪の小さい子が手を上げ自己紹介

ってこんな小さい子まで武将クラスなのか!?

「ほーい!

次は鈴々の番! 鈴々はね張飛なのだ!

姓は張、名は飛、

字は翼徳、真名は“鈴々”なのだ!

お兄ちゃんのお兄ちゃんなら“鈴々”って呼んでほしいのだ」

俺は名前を聞いてビックリ

あの張飛がこんな小さい子なんて

「(マジ?)」

と一刀にアイコンタクト

「（マジ！）」

一刀は満面の笑顔で答えた

「君がああ張飛なのか？」

俺が思わず声に出してしまうと

「そうなのだ！あの張飛なのだ！」

「鈴々、また分からぬのに答えるな、  
どの張飛が分からぬであろう？」

「分かるのだ！鈴々なのだ！」

鈴々が胸を張り答え、  
愛紗は呆れて額に手を当てて頂垂れ一刀に慰められていた

「それじゃあ鈴々よろしくな！あと一刀を兄ちゃんって呼んで俺も兄ちゃんじゃ分からなくなるだろ？  
それなら一刀と同じく真兄でいいぞ」

俺が優しく頭を撫でながら言うと

「にやはは、分かったのだ！  
これからは真兄って呼ぶのだ」

気持ち良さそうに元気に答えてくれた

「それじゃあ私だな、  
私は公孫贄、真名は“白蓮”（ぱいれん）、

白蓮で良い、  
みんなもそう呼んでくれ」

「貴女が公孫賛殿でしたか、  
さっきのはたきは良かったですよ」

「冗談で言つと」

「もう忘れてくれ」

恥ずかしいのか頭をかいて俯くので

「冗談だ、“白蓮”よろしくな」

二人で握手した

「それじゃあ、私ね、

私は劉備です、劉備玄徳、真名は“桃香”（とうか）です。

桃香って呼んでください、

今皆で笑って平和に暮らせる世の中にするために義勇兵を集めてるんです！

良かったら真さんも一緒に

「

「ちょっと待った！

とりあえず桃香・・・だよなよろしくな、

これからは真でもなんでも呼びやすい呼び方で呼んでくれ」

「は、はい！

それであの

「

「申し訳ないがその答えは」とわ

「

「兄さん！」

「一刀ちよつと黙ってる」

「うっ……」

俺は一刀を睨み黙らせ指を三つ出す

「桃香の提案はとても魅力的だけど悪いけど断らせてもらっ、ごめんな。」

それで理由は三つ、って今日はもう遅いな、

俺の話は明日にしてまずはこの子達の話聞いてあげてくれ、きつと桃香達の力になってくれるから」

俺は腰にしがみついている二人を桃香の前に出し

「はっ、はい。分かりました」

朱里と雛里は事情を話はじめ俺は少し離れた一刀の方に行った

「すまん、  
睨んで」

「うっん、大丈夫、  
でも懐かしいね、  
言わなくても分かったよ、相変わらず真兄の理想めづは変わってないんだね」

一刀は懐かしむようにみんなが笑って話しているのを見詰める

「ああ、ホントに懐かしい・・・、  
あれで何回喧嘩したかね」

俺も一刀の様に懐かしむように見詰める

俺はみんなを護れる正義の味方になりたい！

何いつてんだ一刀、みんななんか護れるか、  
いいんだよつ、大切な家族さえ護れれば

一刀はみんなを護る正義の味方

俺は大切な家族愛してる者を護る

その理想おもいの違いでよく喧嘩をしたっけ、  
すいはそんな俺達を見て苦笑し、一刀のじいちゃんは懐かしむ様に  
見てたっけ

「そんな正義の味方を目指す一刀君にその手助けとなる刀をお届け

だ  
」

俺はずっと背負っていた“普通の日本刀より長く少し重い”刀を  
刀に渡す

「ホントこの話になると真兄は嫌味ったらしくなるね、  
ってこれじいちゃんの刀じゃん！？  
なんでこんなところに？」

俺は渡された事とどうして渡されたかを話した

「そのフンドシムキムキマツチヨは凄く気になるけど聞かないでお  
くね、  
じいちゃんがね、この刀ってさ本郷流を全て受け継いだらくれる  
話だったんだよ、  
なんでも妖あやかしを退治してた刀でじいちゃんも昔親友と一緒にこれで戦  
ってたらしいよ？  
なんでも本郷流は元々悪い妖怪を退治するための技らしい、  
俺まだ会ったことないけど本当に妖怪なんているのかな？」

「いるぞ？」

俺の使う拳法も元々は妖怪に生身の体でも勝つ為に編み出されたらしい、

修行中死ぬ思いで妖怪とも戦ったし」

「へっ？ホントに！？ってそうだよ！

真兄元々武術なんて学んでなかったのに千人を相手にして全滅にしたらんでしょ？

そんなぶじゆ

「

「それはまた今度な、

それより話が終わったみたいだな、話は今度話すとして一刀」

「うっ、何その目、なんかやだなあ」

「俺お前とずっと前から戦ってみたいって子供の頃から思ってたんだ、明日話が終わったらちよっと“死合おう”」

「に、兄さん！字か違う字が！」

「おっと、試合おうだな、それと一刀」

「な、なに？」

「あの子の事好きだろ？」

「なっ！？／／／／」

俺は劉備ごと桃香を指さし言う

『んっ？』

一刀の驚きの声に離れてた俺達の方を桃香だけでなく皆が一斉に振り向く

「兄さん！」

「なっはっは！兄に隠し事をしているからだ、まっ、一刀、上手くいくといいな」

笑いながら一刀の頭をポンポン叩いて撫で、みんなのもとに行き白蓮に城に泊めて貰えるように頼むと元からそ

のつもりだったらしく食事も付けてくれた

俺も村を護ったのは義務みたいなものだと言ったのだから白蓮は譲る気がなかったたのでこの食事と泊まらせてもらうのがお礼と説得し、  
渋々了承してくれた

因みに、

朱里と雛里は無事仲間になれそれを俺に嬉しそうに話してくれた、  
一刀を紹介し朱里と雛里を紹介し、一刀は心底名前を聞いて驚いていた

正直俺も鈴々のを聞いて驚いたけどね  
そんな事を思いながら白蓮が開いてくれた宴は無事終わり夜は更けていった

「は、真様にどうやって話かければ」

恋をしてしまった愛紗がなやんとともに知らずに……

劉備玄德と仲間達（後書き）

どうでしたか？

一応仲は良いけど理想が違いその葛藤を少し描けたらいいなと思ったのですが

キャラの性格ってゲームの時は掴めてもいざこうなると表現難しいですね

それでは感想なども何時でもお待ちしておりますので宜しかったらお願いいたしますね

## 真の理想、桃香・一刀の理想（前書き）

皆さんまだダラダラと話が続いてしまうことをお許しを。

あと皆さんにご報告なのですがこの小説は正史を基準として作ったのではなくあくまでも真恋姫夢想のゲームの外史を基準とした小説を作って、新しい主人公が来てこうなったら楽しそうだなと思って小説を作っています。

云わば自分の妄想です。

そういう正史をシカトしたような小説がやな場合は悲しいですが見るのを辞めるのをオススメします。

あるかたに助けて頂き元気づけて頂き自分は自分の思った小説を貫いていくことをここに伝えたいと思います！

勿論ご指摘や感想は全然嬉しいのでジャンジャンしてくれと嬉しいのですがあれはあんなじゃないなどは正直自分は言われても困ります（笑）

これからも自分の思った小説を書いていきますので楽しんでくださる人が居てくだされば嬉しいと思います！

## 真の理想、桃香・一刀の理想

おはようさん、昨日は宴ということでもかなり飲んだが体質なのかな  
ぜか二日酔いになることはなく、

日課としている瞑想、なんていう大それたことは出来ないので無  
になることを心掛け朝も早く邪魔にならないよう自分の部屋で上半  
身裸で部屋の真ん中の床に座禅を組む

なんで裸かって？

それはね、まだまだ使いこなせてないのか御剣家を使う“神脈”  
をより取り込みやすいように外気に体を晒して取り込むようにして  
るんだ。

ほんと服を着てやれるようにしなきゃいけないんだけど、  
無意識なら服を着てでもできるんだけどね。

263

「神脈」は気とはちょっと違うんだ、気は元来体にあるエネルギー  
を主体にするんだろうけど、神脈はね、自然のエネルギーを、  
ちょこつと借りて技の密度、体の向上などを人間じゃ到達でき  
ない位置に底上げするんだ、  
気の強化バージョンだって思ってくればいいかな。

でもね、この説明だと完璧超人だよな。

俺もそれだけだったら何も気みたいに鍛える必要はないんだけどや

つぱりデメリットもあるんだ。  
それは二つ。

一つ、これは気にも言えるんだけど俺の神脈の絶対量。

気は元々かなりの量が天才的にあつたみたいんだけど、如何せん、神脈を授かって間もないからもって十分。

今のまま賊のレベルしか出てこないなら十分もあれば十分なんだろうけど、

もう武將に会い始めてるからね、これから先、必ず戦う。必ずこの力を使いこなさないと死ぬ思いは必須だよな。

二つ目、さつき十分って言ったよな？

それはね、何も神脈の絶対量の質量が十分しかもたないんじゃないんで、今のままだと俺の体が十分しかもたないってことなんだ。

なんでそれが分かるかというと翠のところにいるときに試しに限界を越えてみようと怖いもの見たさにやったらね、なんと十分を越えた辺りから骨が軋む音や筋の切れる音が聞こえる聞こえる、気付いたらベット？に寝かされてるは、翠は泣きながらキレるなんていう珍妙な状態になるは、

半月は寝たきりだわで、かなり大変だった。  
なので今は十分。

このままでは終わるつもりはないけどな。

だって・・・

俺の理想を叶える為には必ずこの力は必要だから

それじゃあ・・・

「地獄の鍛練を始めますか」

無になる為に目を瞑る。

『無心』という言葉は『何も考えない』と言う言葉とは違う。

その言葉を思い出しながら自分の体を自然に溶け込ませる、  
いや・・・、

“自然を取り込む”

俺の体に自然の純粋なエネルギー、体に異物を取り込みはじめた

## 愛紗サイド

昨日真様が明日話すと言っていたので桃香様達と一緒に広間に集まり真様と星以外のみんなが集まった。

「ねーご主人様、昨日私変な事言っちゃったのかな？  
多分あの時真さん、怒ってたと思うの・・・一瞬だったから勘違いかもしれないけど」

いや、あれは間違いではないだろう、なんであの時怒ったのかは、昨日知り合った私では知ることができないが・・・  
その質問に口を固く閉めていたご主人様は重い口を開いた。

「まず、このことは他言無用でお願い、もちろん本人には絶対！」

ご主人様は真剣な顔をし、事実を告げようとしたところを私は止めた。

「ちょ、ちょっと待ってください、まだ星が来ておりません！」

「星にはもう教えたよ、昨日思う所があったんだろうね。俺のここに来て聞いて黙って帰って行ったよ、それじゃあいいかな話して」

私はそれ以上何も言えず恐い思いを打ち消すように頷く。

「まず、さっきの桃香の質問の答え、答えは怒った。

なんで怒ったのかというと、

多分昔俺に言った理由と同じだと思っただ。

後で真兄も言うと思うけど、

桃香の理想はさ“皆で笑って平和に暮らせる世の中”だよ、勿論

俺も桃香の元に来てくれた皆ま、 あゝ白蓮は違っけど皆はそうだよね？」

桃香様は勿論私も皆も黙って頷く、 若干分らない妹がいるが・

「俺もね、 三人には話したよね、 朱里と雛里には話してないから今話すけど、 俺の理想も桃香と似てて“皆を救う正義の味方になる”なんだ、 困ってる人をほおっておけない・・・ 言葉は違っけど思いは一緒だ、 だから俺は桃香と共に居る、 だけど兄さんにはその言葉は偽善にしか聞こえない・・・、 だって兄さんは救われてないから兄さんからしてみたらただの幻想にしか思えないんだろうね。 俺の理想も桃香が掲げた理想も・・・、 だけど勘違いしないでね兄さんは決して冷たい人間ではないんだ、 ただ多分そうしなきゃ生きていけなかったんだと思う。」

私が固まっていると、 皆もそうだが、 桃香様だけが拳を握り締め質問をする。

「生きて・・・いけなかったって？」

「うん、真兄は辛いとも苦しいとも言わず、俺に何の事もないように淡々と話たんだ……」

親が死んだ、なんで死んだのか記憶がない、気付いたら死んでいて葬式が済まされ五歳の俺とまだ言葉も喋れない妹を残して死んだ。

それからは親戚をたらい回し、うち二回、最初と次は地獄だった……。

飯は残飯のようなもの、家の事をずっとやらされ出来ていないとき、機嫌が悪いときは暴力、学校に行けばいじめ、それはもう生きている事が地獄だったって……

普通の人なら既にもうこうなったら壊れてるよね、心が。

だけど、真兄にはできなかった……、だってまだ小さい小さい『家族』がいたから……。

真兄はそれこそ自分の思いを、やりたい事を全部棄てて妹を、家族を護ってたんだと思う。

だからかな、

自分で護ってきた真兄には『皆を護る正義の味方』、 『皆が笑って平和に暮らせる世の中』に対して怒るのは。

それで三回目にやっと平和に暮らせる親戚の家に預けられたらしくて俺と出会って、 この話をしてくれたんだ、 その時に俺が理想を決めたのが最初、  
その後“ある事件”で俺は理想を必ず叶えると誓った

「そ、 その事件・・・とは？」

私は声が震えるのも構わずご主人様に言う。

「その事件はね俺が十二、 兄さんが十五の時の話なんだけど

あの時はほんとに一生忘れない……。

俺はじいちゃんに剣術を小さい時から習ってて喧嘩をしても負けな  
しだったんだ、それが慢心だったなんて事件が起きるまで知らず  
に。

その日もまた柄の悪い奴に絡まれてね、多分真兄と同じ年ぐらい  
の奴だった……。俺はその日も同じように敵をやっつけたん  
だ、完膚なきまでにそれで終わったから帰ろうと気を抜いたとき  
だった。

多分年下に負けたのが悔しかったんだろうね、気付いて後ろを向い  
たら奇声を上げてこっちで言うと小刀みたいな物を持って迫って来  
てて俺もいつもならそんなのすぐ避けられるんだけど、その時は  
違ったんだ、気を抜いてたから……。間に合わないと思っ  
て刺されて死ぬのかって思ってた。恐くなって目を瞑って顔を手で覆っ  
た……。

一向に痛みが来ないから恐る恐る目を開けて後悔したよ……。

目の前で汗を流しながら笑顔で真兄は俺を庇って言ったんだ。

「大事な家族が護れて良かった」って。

「間に合って良かった」って。

その時やっとなんか気が付いたよ、その後あまりにも血を流しすぎて意識がなくなつた兄さんを医者の方に連れてって治療しようとしたんだけど、そこじゃあ出来なくて直ぐに良い医者の方にいったとき新しい親戚の所に預けられてそれっきり……。

その時決めたんだよ、もうあんな風な事が目の前で起きない用に強くなって今度こそ真兄を、皆を護れる正義の味方になりたいって

みんな固まって俯いていた、  
涙を流すもの、悔しそうに歯を食い縛るもの、みな同じ気持ちだった……。

「皆ありがとうね、でもね真兄はそんなことなんとも思っていないだよ、

もし何かあるなら俺を思い出した時に何か言うはずなのに言わない、多分自分が傷つく事に無関心なんだ。家族や家族と認めた者が傷つけられると怒る、自分が傷ついても何も言わない、小さい時からそうだから、怒っても、恨んでもいいはずなのにね……、

真兄はさ、ただ『家族』さへ護れればそれでいいんだ、

だから桃香の想いに答えられないんだと思う。」

「でも、 想い」

「桃香、 これだけは多分真兄は曲げない、

桃香がその想いを曲げたくないように真兄のそれが多分信念なんだ。

」

桃香様が俯いてしまうとそこで朱里がご主人様に質問をする。

「ご主人様、

それでは先の戦いで戦ったのはどういことですか!?

何故戦ったのですか?

今の説明だと家族以外は助けないと思います。でも実際戦ってくれましたし、村を救ってくれました!」

朱里は涙目で訴える。

「それは多分、『目の前で起きたから』だよ。真兄は“家族”に凄く執着心があるけど、基本はお人好しだよ、見てみぬ振りは出来ない質なんだよ。」

自分みたいに悲しい想いはしてほしくないってさ、だから桃香、多分仲間にはなってもらえないけど桃香の手助けはしてくれると思う。だから皆……真兄を嫌わないでほしい。」

ご主人様は皆に頭を下げる。

そんなことを言われても絶対ここに居る皆は嫌わない。  
桃香様なら……。

「嫌わないよ、ご主人様の“家族”だよ！  
それは私達の“家族”でもあるんだよ！  
ねっ！みんな！」

桃香様が振り向いて笑顔で皆に賛同を求め、  
皆が強く頷く。勿論私も。  
こんな桃香様だからこそ私と鈴々は桃香様に着いて行くこと決めたのだ。

「ありがとう、それとこの話は特に、と・く・に兄さんにはばれないようにばれたら俺殺される。」

ご主人様は汗を流しながら苦笑いしそれを見て皆が笑いだし、場の空気は和んだ。

「それじゃあそろそろ真兄を起こして話を聞こう。」

皆が頷いて皆で起こしに行こうとしたので。

「ご主人様達は休んでいてください、私が起こしてきますので。」

そう言って真様の部屋に行こうとするど。

「鈴々もいくのだ!」

そう言った鈴々と二人で部屋に向かう途中鈴々が言った。

「真兄は鈴々達と同じなのだ」

そんな寂しそうに呟き言った。

「そうだな、

親が死に、 兄妹で生きて、  
悲しくても悲しいと言わず、  
ずっと頑張つて……、 私達と同じだな」

「うん」

泣きそうな鈴々の頭に手を置いて優しく撫でる。

「ご主人様や桃香様ならきっとこう言うだろう。」

「そんな悲しい思い出を忘れるぐらい楽しい思い出を作ろう」とな。

「

「そうなのだ！鈴々と愛紗で楽しい思い出をいっぱい作ってあげればいいのだ！」

「バカモノ、“みんなだ”だ」

そんなことを言った鈴々の頭を軽く小突き部屋に向かうと部屋の前に星がいた。

「星何をし

」

「（じー）」

私と鈴々の口を塞ぐ。

落ち着いたのを確認したのか星が部屋の扉の隙間を指差す。

「良いから見てみる」

「なんだと言っただまったく」

私は呆れながら扉を覗くと上半身裸の真様が座禅を組んで床に座っていた。

「は、はだかー！ー！？」

せ、星不謹慎だぞ！

ずっとあの裸を覗いてたのか！？

うらや ごほん！」

「凄くよく鍛えた体なのだあ」

「馬鹿姉妹！

見るところが違うわ！

い、いやそれは主の体はとも引き締まっっていていいが……  
って何を言わせるか！？

そうじゃない見ろ、あの尋常じゃない汗を、私にも分からんがあれは鍛練ではないぞ。

あれは拷問だ、それをあんな苦の顔もせず、  
ずっと続けている。

なんとかして止めたいと考えているところにお主達が来たのだ。

あれだけの力だ、三人の力を合わせればなんとかなるかもしれん」

「どうするのだ？」

「正攻法で外から強い衝撃を与えればなんとか……」

「真兄を傷つけるのは嫌なのだ」

「それは私も同じだ、それで星。どうするのだ？」

「ふむ、勿論傷つけたくないのでな、体当たりしかなかるう。  
鈴々は頭、愛紗は左、私は右だ。  
一、二の、三だいいな？」

皆同時に頷く。

「それでは」

「

一、

二の、

三！

三人同時に部屋に入り体当たりをした。

愛紗サイドアウト

もっとだ！もっと力を！

そんな力を求めるのは何故だ？

家族を二度と失わない為に！家族を護る為に！

そんな力を求め過ぎたらいつか破滅するぜ？

言われたる？

手は綺麗に

心は熱く

頭は冷静に

ってよ、今自分それ見失ってるぜ？

一度だけ助けてやるよ、甘ったれの真ちゃんよっ！

このまま体をぶっ壊されちゃ迷惑なんだな！

おっ！？

俺が助けなくても外の甘ちゃん達が助けしてくれるみたいだぜ？まあ

精々足掻いて生きろよ！

またいつか会えるからよ！

その時は

その声が遠くに行つた瞬間意識が元に戻されると同時に背中と頭にどでかい衝撃が俺を襲つて床に這いつくばつたと思つたら後頭部に暖かい温もり、左右の腕に柔らかい感触がした。

「ぶっは——！　いってえ——！」

そう言いながら倒れている体を起こし床に座る。

「なんなんだいったい？」

いつまでも腕をロックしている左右を見るとプルプルとこれでもかというくらい頬を膨らます星さんに愛紗さん。

ん〜この後頭部にいるのは・・・。

「ん〜頭にいるのは鈴々さん？」

「鈴々さんなのだ！」

怒っている二人を現実逃避するため鈴々に話しかけるが若干鈴々もプリプリ。

「あー、そのー。」

と何か言おうとするとボクサーもビックリなボディーパーローを星さんから一発。

悶えて転げ回りたいが如何せん両手を星と愛紗でガツチリロック。

「この馬鹿者！主はなぜこんな危険な修行をおやりか！  
もう少しで危ないところだったのでぞ！」

「あーそのです

」

「だまらっしやい！  
いいですか？

主はもうちよつと自分の体を大切にすべきだ！  
そんなんで強くなつても体が壊れてはどうにもなかるう！  
そもそも修行とは

」

もうこれでもかと説教をくらい耳がキーンの状態でいると左の愛紗  
と上の鈴々に、

「私もあなたは自分の体を大事にするべきだと思います」

「鈴々もなのだ、真兄は無茶し過ぎなのだ、体は大事にするべきなのだ」

かなり無茶な状態だったんだ俺は、ここは素直に謝らなきゃな・  
・・・。

「ほんとにすまん、それとそろそろ離れてくれ、逃げないから。つてか汗かいてるし、そ、そのふ、二人の胸がだな、あ、当たっていて辛いんだか」

愛紗は紅くし飛び退きあたふたし、頭の上の鈴々は胸をさすって「早くおっきくなつてほしいのだ」と落ち込み、星はニンマリと、  
ニンマリと？

「主？ 触りたいのであればいつでもその手で胸を掴んで揉んで頂いて結構ですぞ？」

ぶっ飛んだ事を言った星に愛紗が即座に拳骨をしその場は収まった。

「おっぱい大きくなってほしいのだ」

鈴々も頭から剥がされ愛紗の鉄槌

「いたいのだー」

涙目の鈴々の頭を苦笑しながら撫でて裸だったので上着を着る。

「悪かったな、見苦しい体見せちまって」

こんな身体中傷だらけの体は女の子は引くからな。

「いえ、主それは違う。

主のその傷はきつと修行の傷でしょう？

それを醜いなどと誰一人思わない。

それは主に対する侮辱だ、ここにいる者は誰もそんなことは思いません  
ませぬ」

皆が強く頷き真剣に俺を見つめる。

「ありがとう、そう言ってもらえると助かる」

俺が皆にそう言いつつ、

「当たり前なのだ！」

鈴々達は“家族”なのだからな」

「り、りんりーん！」

はい？

鈴々は今なんと？

鈴々は愛紗にまた鉄槌を喰らい蹲っているの星に目を向けるとそっぽを向いて口笛を吹き視線を外し、愛紗に至っては普段のキリッとした態度がどっかにいってあたふたしていた。

あの愚弟喋りおったな。

何処まで喋ったか

なんて表情を見れば分かるか……。

一刀は後で“オハナシ”として……、今は

一刀サイド

ゾクッ！

なんだこの絶対回避不能の負の悪寒は！？

「ご主人様どうしたの？  
なんか顔蒼いよ？  
大丈夫？」

「あ、 ああ、 大丈夫だと・・・思う。  
なんかこの後俺なんかありそうな予感がしただけで・・・」

「あれじゃないか？」

鈴々辺りが真にはらしちゃったんじゃないか？」

白蓮さーん！

それ言っちゃだめー！

フラグが確定しちゃうからー！

もっぱれた後なんて一刀は知らない……。

一刀サイドアウト

「そうか、皆知ったか」

「ごめんなさいなのだ」

鈴々はシュンとして俯いてしまい、星も奥歯に物が挟まったような顔をし、愛紗も悲しいのか辛いのかそんなような顔をしている。

は、ほんとの世界の人達はなんでこんなに優しいのだろうか。

ひまりさん、

翠、蒲公英のように自分の様に悲しんでくれるそれはとても嬉しくてなんだか擦ったかった。

俺が何も言わず一歩踏み出すと怒られると思ったのか三人共ビクッとして目を瞑る。

そんな事ぐらいで怒らないんだけどな、それに一刀も無駄だと思うことは言わない、必要だと思ったからこそ、この子達に伝えたんだろう。

俺が言わないだろうと見越して……、あいつは昔からそうだからな、周りをよく見て気遣いをする。好ましいし、自信を持って家族と言えるそんなあいつが言ったんだ。俺も兄として、家族として信じなきゃな。

俺は一步、また一步と三人に近付き三人をおもいつきり抱きしめる。

『へっ!?!?』

三人は三人共驚き顔を紅くし、俺の顔を見ている。

「怒ってないよ、君達が俺の代わりに悲しんでくれて正直嬉しい。あの世界では一刀と一刀のじいちゃんだけだった、悲しんでくれたり元気付けてくれたのは。」

「一刀は無駄だと思う事は言わない、そんな一刀が信賴して君達に俺の事を伝えたんだ、一刀の兄として、一刀の家族として俺はあいつを一番信賴してる。」

「だから必要な事を言ってくれたんだ、感謝こそすれ、怒ったりなんか絶対しないよ。」

「俺ももう君達のを家族だっと思っててるから、だからもうそんな悲しんだ顔はしないでほしい」

抱き付きを解いて三人を撫でる。

二人は顔を紅くし俯いて、鈴々にいたっては、

「気持ちいいのだあ〜」

と猫みたいに顔がふにゃけていた。

ある程度落ち着き鈴々を肩車したら、

「父様に昔よくしてもらったのだ！

父様と同じくらい高いのだ、

父様みたい」

なんて言うから「父様でもいいぞ？」なんて言って嬉しそうな顔を見て、星と愛紗の手を左右の手で握り何も言わない事を良しと肯定し、四人で部屋を出て広間に向かった。

誰かが見ていたらそれはとても幸せな家族の姿だったに違いない

因みに広間に着くまで手を繋いでいて愛紗は赤面し自爆し、鈴々は俺から降りて桃香に報告したのか頭を撫でられ嬉しそうにして、星は白蓮、朱里、雛里に何かを吹き込んでいるのか三人が三人紅くなって悶え、星は自信満々に胸を張っていた。

俺はとらじと……。

「かゝらずとくくく、言うなら言いで相談ぐらい兄さんにはしてほしかったな。」

「あつ、とつ、そつ、それわねつ、あのねつ」

「問答無用じゃバカタレ！」

一刀は危険を感じ後ろを向いて逃走。

敵に後ろを向いたら命取りじゃ愚弟よ。

「御剣流秘技

鞘差し さやさし（ケツバージョン）」

何処から取り出したのか刀の鞘を両手で持ち、思いっきり引き一刀の尻目掛け突く！

「ぎゃあーーーーー!!」

見事鞘は尻に収まり“オハナシ”という名の鉄槌を俺は一刀に行使し、見事任務完了した。

真の理想、桃香・一刀の理想（後書き）

前書きでも書きましたがほんとに心の弱い俺に助言をしてくださいましたかたがいて助けになりました。

感想でもほんとに力になりました頑張ろうと思う事がいっぱいです。

ちよつとしたことでも嬉しい作者（単純）なので皆さんも良かったら感想など書いてくださると嬉しいですよ。

時話は遂にあいつとあいつの真剣勝負！  
勝敗はどちらに！

皆さんお楽しみにです！

真剣勝負（前書き）

みなさん長い間次話を最新できず申し訳ございません！

ここはアイアム土下座で許してたも〜です。

これからもちよくちよく間が相手しまうこともあるかと思いますが長い目で見てくだされば幸いです）\*^・^（ノ

## 真剣勝負

「ご主人様は大丈夫なの!？」

「ほっとけほっとけ、直ぐに生き返る」

俺は笑いながら桃香に答え、当の一刀は、尻に鞘を差しピクピクしていた。

そんな一刀に鈴々が近づき指で突付いていた。

「それであのピクピクしてる弟から聞いたと思うが一つはそう言う事なんだ」

俺が話し始めると場の空気が変わりみなしんと静まる。

「はい、ご主人様に聞きました、それが真さんの信念だから多分変わらないと」

「信念と言うほどの物でもないとは思っけどな、残りはあと二つ」

一つ、俺には目的があって今旅をしている。

その目的が達成するまではどこにも留まる気がない。

二つ、各地がどんな状況か調べてみたい。

どんなものがあつて、どんな人がいてどんなことをしているのか。見聞をしたい。

ということをおみんなに言った。

「ということだ、だから俺は桃香達と一緒に居れない。

それでも俺に何か出来る事があれば手伝うから遠慮なく使ってくれて構わない。それに……。」

俺が言葉を区切り視線を未だピクピクしている一刀にもっていきみんなも分かったのか同じ様に一刀を見る。

「俺がいなくてもきつと一刀が君たちを護ってくれる。  
なんせ天の御遣い、……俺の弟だしな！」

俺は安心するように桃香の頭をポンポン叩く。

「何かあつたらあいつを頼りなつ！  
きつとあいつは君の力になる」

「は、はい！」

畏れ多くもあの劉備の頭を撫でてしまった事を今更ながらビツクリしながら話はおしまいという感じで一刀の方に向かい起こす。

「ほら、一刀。いい加減起きろ！約束通り真剣勝負すんだろ？」

みんなはそれを聞いて驚くがそれを気にせず一刀を起こす。

「いたたたっ、もうちょっと優しく、尻、尻に響くっ！」

「うるさい。自業自得だ。」

俺は一刀の襟を掴み引きずっているとな刀は唐突にこんな質問をしてきた。

「そう言えば俺も真兄に聞きたいことがあったんだよ。」

真兄の妹、すいは元気にしてる？離れてから一度も会えずにこの世界に来ちゃったからさ。」

その言葉で俺は固まり一刀を下ろしてしまふ。怪訝に思ったのかみんなも近づき一刀も急に下ろされたのが不思議で俺の顔を伺う。

そうなのだ。

いくら一刀に会えて嬉しかったからといって肝心な事を一刀に言っていないままだった。

「真兄？」

一刀が心配な声色で問いかける

言おう。言ってしまおう。

みんなも聞いているが隠すことではないし、何より一刀には知る権利があるから……。

すいのこと。俺のこと。

一呼吸おいて。

「死んだよ、病気で。」

「えっ!?!」

「それとあの世界で俺もすいが死んだ二年後……、交通事故で死んだ。」

「えっ!?!? な、何言ってるんだよ兄さん、すいが死んだのが本当だとしても現に兄さんは生きてここにいるじゃないか!」

一刀は信じられないというようにちょっと怒った感じに声をだす。周りも交通事故の単語で首を傾げたものの俺が死んでいたことになくならず驚いている。

「まあーから話すよ。」

俺はより詳しく一刀、もといみんなに説明する。すいがあれから病気になるまで、そのあと俺が死んで神じいちゃんに会って修行をしてこの世界に来たことを。

「そうだったんだ……、ごめん。そんなことも気付かずに俺」

みんなもそれを聞いて沈んでいる。

「謝んなよ、一刀のせいでもないんだから」

「でもっ！」

俺は一刀の頭を掴んでクシャクシャと撫でる

「そんな顔をすんな、そんな顔されるほうが辛い。それに死んでか  
らすいにも会った。」

会って自分の人生を歩んでほしいって言われた。なら俺は今ここに

いるんだ、頑張つて俺がしたいことをするつもりだ、すいが死んだことは悲しいけど、最後見たあいつの顔は笑ってたんだ、なら俺も沈んでなんかいられないさ」

なんて半分かつこつけながら言つて場の沈んだ空気を払つ為笑顔で見回しパンパンと手を叩く。

「ほら、一刀！勝負するつて言つたろ？行こうぜ、白蓮修煉場ってどこだ？」

一刀の手を取り白蓮に場所を聞く

「あ、ああ。案内する」

まあ無理もないけどどもりながら俺達を案内してくれようとしてくれる

「みんなも良かったら見に来なよ、見せられるほどのものでもないとは思うけど気になるなら」

俺はそう言い返答も待たずに白蓮を追いかけた

みんながそんな俺の背中を悲しんだような目で見つめていたことを俺は知らない。

「それじゃあ準備はいいか？」

俺は屈伸をしながら一刀を見る

「うん、いつでも」

一刀の獲物は刀二本、俺は徒手空拳。

「いいの？俺だけ武器もって」

「なめんなよ、俺もこれでそれなりにやってきてんだ。それに俺あんま武器使えないんだよ！これは用訓練ということだ。」

「わかった」

一刀が剣を抜く

「ん？それ刃が逆なんだな」

「うん、右が翡翠、左が紅蓮。これは相手を粉碎して戦闘不能にするための刀だよ」

「えげつないな、生きてるのが辛くなりそうだ。」

俺がおどけて外人みたくジェスチャーする

翡翠は緑に、紅蓮は赤に、今にも破壊せんというように輝いていた

「兄さんのは？」

「俺のは龍拳御人、なんでも龍の鱗で造ってるらしいぞ。何人も傷つかない俺の籠手だ。一刀の天敵かもな」

「ちよつと笑えないかな」

ひきつった笑いをしお互いに目を瞑り丹田に力を籠める  
みんなは少し離れたところでその様子をみている

空気が変わる。お互いに構え殺す気がなくも二人は互いに殺気を纏う

やだやだ、ビンビン肌に殺気が刺さる。一刀が構える。俺も構える。

円華拳。

妖を倒すために編み出された

幻の拳技。

拳では駄目。

妖は不定の存在。拳では波動が伝わらない。

外を破壊するのではなく、内を穿ち、波打たせる。

相手を一撃で穿ち貫く力。

相手を一撃で戦闘不能にする力。

相手が思うより迅く相手を討つ力。

誰かが固い唾を飲む。

それを合図のように一刀が突っ込む。

一刀は先の先、俺は後の先だ。

双剣が襲い掛かってくる

反射的に掌打で上下に打ち捌いた

掌を再び拳に戻し、半回転しながらの肘打ちを一刀に喰らわせる。

間髪入れず足を絡め、腕を押さえながら胸板に掌打。

一刀は堪らず後退しながらたたらを踏んでお互いの間合いが開きすくにお互い間合いを詰め攻撃し、捌きあっていた。

最早それは人同士の戦いですらないようであった。

迅く、烈しく、重い連撃が相手の肉体を破壊しようとして凄まじい勢いで繰り出される。

人の目にはとても追えぬ「それ」を、時に薄ら笑いすら浮かべながら捌いていく。

捌いた後、迅くもなく、烈しくもなく、重たくもない、だが喰らえばその部分が丸ごとこそぎとられるような一撃を繰り出す鉄甲と剣が弾かれる音は、さながら炸薬。

最早これは

神域に達した戦いだった

「アレはなんなのだ!？」

誰に言うでもなく愛紗が叫ぶ。周りも同じなのか黙ってずっと見つめる。

かまいたちのような斬戟が、技が

鉞のような手刀が、大金槌のような掌打が

人の目に追えない速度で放たれていく。  
一撃で死ぬと理解していて、尚あの距離であの一撃を放つことができ  
きるだろうか？

否だ。そうかと言って、機械的な動きではない。  
どちらかと言えば、これは本能で動く獣に近い。

だが只の獣には、あそこまで戦闘に特化することができないのもまた事実。

今の二人には、己の死に対して全く無関心だろう。

ただ、ただひたすら。

前へ、前へと。

一撃を喰らわすために、動き続けている。

「糸蜘蛛 (いとぐも)」

まるで真の両手が絡むように、一刀の右腕に巻き付いた。肘に拳が当てられる。拳を支点にして、一刀の腕を千切らんばかりにヘシ折ろうとする。

舌打ちしながら、一刀は右腕を捻った。  
捻った腕が抜け出る方が真の拳と手よりも幾分早かった。  
間合いを取る。

二人共が互いに不敵な笑みを浮かべた。

二人が離れた途端、誰かが息を止めていたことに気付いたのか慌てて呼吸をし、刺激でむせかえる。

「それじゃあ、続けようか一刀。俺の拳と掌と一刀の剣技、どっちが上か！」

「兄さんの捌き、俺の一撃、どっちが上か！」

「御剣流と北郷流、どっちが上か！」

「御剣真と北郷一刀、どっちが上か！」

確かめるとしようじゃないか！

捌きが骨子であるはずの御剣流が先に動いた。

熊が獲物を打ち倒すように右腕を振り上げる。

一刀は狙い変わらず、糸を針に通すような精密さで右腕の急所に二撃、打ち込んだ。

素早い斬戟に真は顔をしかめる。右腕は空へ。

「ちっ  
」

隙が有った。

「北郷流  
」

散弾のような斬戟が真の全身に襲いかかった。

真は驚愕の目を見開く  
が、最初の一撃を喰らって、残り  
すべてを捌き、その顔は笑みへと替わった。

「まだまだこんなもんじゃないだろ！」

真の強烈極まりない左腕が連撃を薙ぎ払った。

後退る。

荒い呼吸は即座に整え、再び向かい合う。

「何発喰らったのだ………？」

我知らず愛紗はそんなことを呟いていた。

並の人間ならば、一撃喰らえば悶絶か昏倒のそれを無造作に軀に受けて尚、真は左腕で薙ぎ払っていた。

それもそのはず、真は無意識のうちに神脈を体に纏っていた。

「疲れたな一刀」

「そう……だね、俺もそろそろ。」

「それじゃあ」

「あいやまたれい！」

構え直そうとお互い考えていたら急にでかい声で遮られた。  
その声の張本人は星だった。

「これ以上やったらお互いただでは済みませぬ！」

まあそりゃあお互いに本気モードだしな。  
でも少しはお互いに実力も分かっただろう、ここは素直にやめよう。

「分かった、分かった。分かったからそんな敵を見るような顔しな  
いでくれ」

今にも掴みかからんというような体勢だった。

一刀に目配せして二人共に殺気を鎮める。

「一刀は強いな、気を抜いたら負けるところだった。」

「兄さんこそ、武なんてからっきしだった人がこれじゃあやになるよ」

「俺の方がいやだったつうの！こちとら死ぬ思いで五十年も修行したつていうのに圧勝もできない。じいちゃんが言ってた通り俺には武の才能ないのかもな」

「う、五十年!？」

一刀が驚きながら質問をする。

「五十年。あっちじゃな」

なんてあっちでの修行の話をしていると武に長けていない三人、桃香、朱里、雛里がペタンと床に音をたてて座ってしまった。

「一刀」

「うん！」

俺と一刀は即座に三人の下に駆けつける

「ごめんね、桃香。辛かったよね」

「ごめんなさい、気が抜けたら腰ぬかしちゃった。」

それを聞いた一刀はいきなり桃香をお姫様抱っこをする。

うむ、弟ながらやる事がすげー！

俺はと言ひつゝ、

「あつゝ」

「はつゝ」

目を回している二人を流石に二人共お姫様抱っこはできないので左右の脇に挟み一刀と二人後ろを向いて部屋に運ぶ事を伝えようとして二人同時に固まった。

そう、さつきまで立って声を上げていた星さんがしなだれて俺をウルウルした目で見つめる。

「主いゝ、私も腰が」

ないよね！さっきまで大声出して止めてたよね！？

「一刀くん、俺はどうしたら？」

「兄さん。ここは素直に運ぶのが吉だと思っよ」

他人事のように苦笑いしながら言う。

「いやいや、俺両手塞がってるんですけど！？」

「心配はありませぬ」

言うか早いかスタスタと立ち上がり俺の背後に来ておぶさってきた。

てか今普通に歩いてきましたよね星さん！？  
てか胸！胸が！？

「役得ですな主」

分かっててやってる……！？

「鈴々も……！」

と断る暇もなく鈴々が俺の顔に張り付き息をするのに「苦勞だ！このばか……！」と言いたい気持ちを堪えているところに神が降臨した。

「この……ばかものが……！」

と素早く頭を星と鈴々に拳骨を浴びせ二人を昏倒させ

「ご主人様と真様は部屋に三人を。私はこやつらを運びますので。  
白蓮殿行きましょう」

「あ、ああ」

二人を引きずる愛紗とそれに続く白蓮を口をあけて見送り俺と二刀は苦笑いをしながら別々の部屋に三人を送った。

夜

城壁に一人真は夜空を眺めていた

一刀はあれでまだまだ発展途上か……。は、未恐ろしいな……。  
武の才能のない俺には羨ましく思う。

その時そんな想いを吹き消すように一陣の風が吹いた

「良い風だ……。死ぬにはいい日だ」

なぜかそんな事を呟いた。  
その瞬間風が答えてくれた気がした、その後、声が聞こえた。風が  
俺の体に纏わりつく。

今日は死ぬにはいい日だ

こんなに暗い夜だけど

今のボクには、繋ぐ手があるから

こんなに寒くて、悲しくても

ここにはあなたがいる

あなたを見れば、朝日が見える。

あなたの手から、温もりが伝わる

夜は、こんなにも冷たくて。

けれど、ボクには、あなたと一緒に朝が見える

だから。

それはきつとよらじやド

今日は、死ぬにはいい日だ

「いい詩……ですな」

横にはいつの間にか星がいた

「聞こえたのか？」

「？何を言っておられる？主が今詩っていたではありませんか」

何を言ってるんだ？話が噛み合っていないな俺が詩っていた？  
無意識に口ずさんでいたのだろうか？

「そんなことより一献どうですか？」

星はどこかからだした杯を俺に渡す。  
出した場所は突っ込まないでしよう……。

「おっ、いいな。ありがたくもらっつよ」

「はい」

星に注いでもらいそれを一口で飲み干す。飲み干した杯を星に返す。

「ほら、星も」

「かたじけない」

俺は星に杯を渡し酒を注ぐ

「それで、星。ここに来たのは何か聞きたい事があって来たんだろ？」

「ふむ、主に隠し事はありませんが、これでは隠し事ができませんな」

ははは、と笑いながら星はまた酒を飲む

「それで？」

「はい、主はいつここを発つおつもりですか？」

俺は驚いていた。そんな素振りはまだ見せていないつもりだかやはり歴代の英傑の観察眼には分かるのだろうか

「星にも隠し事はできなそうだな、出来れば二、三日には発ちたい  
と思ってる」

「二、三日……ですか、早いですな。そんなに急ぎ何を求めている  
のですか？」

何を求める……か。何を求めているんだろうな、自分でも分からないことだらけだ。だけど、今思っていることを実行したいとも思う。今はそれをしなきゃな。

「そうだな、何を求めているのかは分からないけど、今は残り二人、曹操、孫策、この二人がどういう人物なのか見てみたい。それかな。あとは旅をしながら考えるかな」

「そうですね……。ふむ、私も主と行きましょう」

「へっ！？いきなり何言ってるんだ、お前はここの客将だろ？いいのかよ！？」

「もとより旅には出るつもりでしたからな。それが早まっただけのこと。主よろしく願います」

何を言っても付いてくる気なのな。俺はポリポリ頭をかいて苦笑しながら言った

「は、何を言っても付いてくるんだな。………わかった。俺の背中は星に預ける。これからもよろしくな、星。」

俺は手を差し出し握手を求める

「？なんですか、これは？」

俺の手を見て首をかしげる。握手はこの時代にはまだないのかもしれない

「まあ、信頼の証みたいなものだ」

いつまでも出さないの強引に失礼だが手を取り握手をした。有名な武将でもやはりそこは女の子。手はゴツゴツせずとても柔らかかった。

その後星は離れた手をニギニギしているのは微笑ましかった

「さっ、それじゃあこれからの旅路に乾杯だ」

俺達は丸い丸い綺麗な月を肴に杯を交わした。

その後ろの物陰でこの話を聞いていた男が居たことも知らずに……  
…。

**真剣勝負（後書き）**

ご質問ご感想ジャンジャンお待ちしております！

それぞれの想い、次なる場所（前書き）

次話です。

最新遅くてほんとに皆さんごめんなさい！

見捨てないでくださると嬉しいです。

## それぞれの想い、次なる場所

二、三日といわず一週間ぐらい経ってしまった。  
旅の準備を終え、部屋の窓の外を眺めているとドアを叩く音が聞こえた。

「主、そろそろ」

その声は星だった。

「ああ、もうそんなか」

俺は短くも世話になった部屋を一通り見て頭を下げる

「お世話になりました」

俺は旅の荷物を掴み廊下に出て星と二人門に向かう。  
挨拶はいらない。また会えるのだ。さよならを言う必要はないだろう。

一刀には怒られそうだけど。

しかしそんな俺の思いを裏切るように桃香、愛紗、鈴々、朱里、雛里が門の前で待っていた。

「主よ、何もかもお見通しですな。」

クククと声を殺し笑う

「そうだな」

俺も笑みを浮かべみんなに近づいていく

「もう行くんですね……。」

開口一番桃香が言う

「ああ、いつまでもこんな居心地の良い所に居たら抜けなくなる  
しな」

俺は苦笑しながらおどける。

それに対して一度悲しい顔をしたがすぐにそれを拭い笑顔になる

「道中お気を付けて」

「ありがとう、桃香も頑張れよ」

はい！と大きな声で答えてくれる

俺はそれが終わり他の皆を見ると皆は俯いていた。無理もないよな、色々あったもんな……。俺は空を仰ぎ見てその短くも楽しかった思い出を思い出す。

ある日の朝。

朝の日課をするため鍛練場に行くとき愛紗が一人鍛練をしていた。

すごい集中力なのか俺が来たことも気付かず一人黙々と鍛練を続ける

「ふっ、ふっ、ぶっ、でやあ！」

俺は見いつていた。

とても綺麗で洗練された武。

それを追いかけるように後から流れる黒い綺麗な髪。

何度も何度も反復練習してきたであろう青龍円月刀の繰り出す音。

そのどれもが綺麗だった。

「ふう、……ん？」

一息入れるのか動きが止まりこちらに気付いた

「ああ、真様いたのですか。お見苦しいところを、お声をおかけくださればいいのに」

「おはよう、いや真剣に鍛練してんだ。邪魔なんてできない、それにあんな綺麗な武は見たことないからね。勝手ながら見させてもらったよ。」

「綺麗なんてご冗談を。それにまだまだです。これでは今も苦しんでいる民は助けられません」

「急いで事は仕損じるだよ、愛紗。ん〜そうだな、俺が教えられた言葉なんだけど、良かったら愛紗も使って」

「言葉……ですか？」

「そう言葉。想うのはいい。それを糧に鍛練を積むのは愛紗にとっても良い事なんだと俺も思う。」

「ただどそれが通じない敵が君の目の前に来たとき、大切な何かを傷つけられたとき君は必ず冷静さを欠く気がするんだ。その想いが強ければ強いほどに」

愛紗は黙って下を向いてしまうそんな愛紗の頭に手をぼんつと置く

「愛紗は俺に似ているんだ。直情的って言うと言葉が悪いけど思いが強すぎてそれが壊れると冷静な判断ができない。そんな時にとっておきなおまじないを君に教えるよ」

俺は手を頭から離し愛紗から少し離れ、パンパンと両手で頬を叩き気合いを入れ直し、構えをし言葉と想いを紡ぐ

「手は綺麗に」

所作は、何時如何なる時でも優雅たれ。

「心は熱く」

闘志に己を焦がせ。それは勇氣と言つ名の武器になる。

「頭は冷静に」

思考だけは別領域に。半端な憎悪は頭を鈍らせる。氷の思考で、敵に対する戦略戦術を編み出すべし。

「ふ、これが俺が師匠に受けた最大の教え」

「……手は綺麗に、心は熱く、頭は冷静に」

愛紗は言葉を染み込ませるように言葉を呟く

「言うのは簡単。やるのは難しいんだけどな。良かったらいつか思い出してくれ、俺としてはそんなことがないことを願うけどな」

けど、いつか俺は君たちの　　になるかもしれない。

その思いを拭い去り愛紗に言う

「良かったら俺も付き合おうから、良かったら鍛練再開しようか」

「是非ありません。こちらからお願いしたいです」

「よっしゃ！それじゃあ始めるとしよっ」

「はい！」

その後俺と愛紗は昼時まで鍛練をしていた。

とある昼。

公孫贖が治めている村を見回りしていた時の事。俺もブラブラ見回りと言つ名の散歩をしていた。

「はあく腹が減ってきたなあ」

音の鳴る腹を擦りながら前の肉まんの売っている店をチラチラ見ながら悩んでいると、どこからか声が聞こえてきた。

「し　　にい　　！」

どこからか俺を呼ぶ声が聞こえるが一向に姿が見えない

「なんだ？空耳か？」

俺がキョロキョロ周りを見ていると地震が起きたように地響きがおきる。

と、それは後ろから来ていた。それに数秒気付くのに遅れそれは勢い余って俺の背中に突っ込んできた！

「ぐはっ！」

俺は数メートル吹っ飛ばされ受け身も取れず地面に顔面から落ちた。

「おっす！なのだ」

ああ、この声は鈴々だな、一刀に教えてもらったのだろう、こつちの世界では使わない言葉を使う。

「いたたたたつ、鈴々か……、熱烈な突っ込みだな」

腰を押さえ苦笑しながら立ち上がると鈴々は小首をかしげていた。

「ん？よく分からないのだ。それより真兄は何してたのだ？」

「俺か？俺は町の見回りが一通り終わって暇が出来たから腹こなしな」

そのことを鈴々に言うと鈴々は満面の笑顔になる

「鈴々もお腹空いたのだ！」

がおーと言いたげな大きな口で主張。ほんと元気な子だな……。

「お腹空いたのはいいんだけど、今日の鈴々の仕事は終わったのか？」

「休憩なのだ！」

俺はいいんだが愛紗怒らないかな、俺でも怒った愛紗はとめられねえぞ。

ま、そうだった時はその時か。

「解った、それじゃ、一緒するか」

「一緒するのだ！」

はは、和むな、大変だけどいつか子供ができたらくっという元気な子が生まれて来てくれたら幸せだな。

『父上！』

『おい、そんなに走ったら危ないだろ！真もちゃんと止めてくれ』

……。

何故翠とたんぽぽをちっちゃくした子供が出てくる！？

いやいや、訳が分からんぞ！？

「それで何食べるのだ？」

「ん、あ？あ？どうすっかな、近くに肉まんがあったから肉まんにしようと思ってたけど、鈴々は何食べたい？」

「ん、鈴々も肉まんがいいのだ、だけどここはまずいのだ」

こら鈴々！このばかたれ！正直なのはいいが店の前で言う奴があるか！

ほれ見ろ、店主が睨んでるだろうが！

「失礼しましたー！ー！」

鈴々を小脇に挟み逃走

「こ、このばかもん！正直なのはいいが、目の前で言っちゃめーだ  
ー！」

「い、ごめんなさいなのだ」

たく、あそこ何気に気に入ってたのに……、仕方ないか。

「まあしょうがない、今日はラーメンでも食いにいくつ、奢ってやるから行くぞ鈴々」

「やったのだー！ー！ラーメン、ラーメン」

さっきまでシユンとしてた子がこれだ。鈴々にはずっとこんな風に笑っていてほしい。

こんな時代でも……。いや、こんな時代だからこそか。

「鈴々。」

「なんなのだ？早くラーメン食べに行くのだ」

鈴々は笑顔で振り向く

「鈴々、その笑顔を忘れるな。お前が笑顔でいれば皆が辛い時でもまた頑張れる」

「ん？分からないけど分かったのだ」

はは、ちょっと不安だか大丈夫かな

「俺はお前の笑顔が好きだ、鈴々の笑顔を見ていると不可能も可能な

気がしてくる、いつでも笑顔でいてほしい」

「じゃはは」

俺はこの子の笑顔を護れるようにまた一歩強くなるぞ。

「さ、ラーメン食いに行くか」

鈴々の頭から手を離し鈴々の手を引いて二人店に向かう

「出発進行ー、なのだ！」

二人は仲良く手を繋ぎ店に向かった。

その後鈴々と店に向かい飯を食ったのはいいが鈴々の食いつぶりに度肝を抜かし胃がもたれたのは良い思い出……なのかな。

「ほんと、短い間だったけど楽しかったな。良い思い出だ」

俺は思った事を皆を見回し言う。

「愛紗、鈴々。俺が言うのはお門違いだ、桃香と一刀をよろしく頼むな」

「大丈夫ですよ、鈴々共々命に代えましても桃香様もご主人様もお守りいたします」

「頼むから命に代えてもなんて言わないでくれ。愛紗たちが死んでしまったらみんなが悲しむ、勿論俺もだ」

俺は愛紗の頭に手を置いて撫でる

「あ……、はい……」

顔を赤らめ下を向いてしまう。

「鈴々もー！」

なぜか鈴々も頭をずいっと出してせがむので苦笑しながら頭を撫でる

「にはははは」鈴々も嬉しそうに顔を赤らめる

俺は残りの二人、朱里、雛里の方を向く。

二人にはこの一週間ぐらい桃香の手伝いで忙しかったのか会えず今久しぶりに会う

「二人共顔を上げてくれ。」

黙って顔を向けるがやっぱり寂しそうな顔は変わらない

「二人に会ったおかげで一刀にも会えた。ありがとうな。」

俺は二人共抱きしめ背中を撫でる。すると雛里は耐えられなくなつたのか泣いてしまう。

「こらこら、泣くな、泣くな。これじゃあ心配で旅にでれなくなるだろ」

俺は懐にある布で雛里の顔を拭く

「いかないでください……」

今度は朱里までそんなことを言いしがみついで離れようとしな

「主は愛されておりますな」

「はは、ほんとにな。……二人とは旅を初めてからずっと一緒だったからな。でもな朱里、雛里」

俺は二人の目を見て真剣に言う

「俺も朱里、雛里と気持ちは同じだよ。だけど朱里雛里にもやるこ  
とがありように俺にもやりたいことがある。それが終わって会える  
ときが来たら必ず二人に行くさ。だからこれが根性の別れじゃない  
から。な？」

グズグズ鼻を鳴らす雛里に布をあて

「ほら、可愛い顔が台無しだぞ。ほらチーン！」

チーンとして鼻を拭く

「あー」

「よし、可愛くなった。ほら笑顔！笑顔！俺に二人の笑顔を見せてくれ」

二人は決意を固めたのか二人で頷きこちらを向き満面の笑顔を見せてくれた

それから少し話をしていたら遅れて白蓮がやってくる

「いっちまうんだな」

「ああ、世話になった、白蓮」

「よせよ、私はあの黄巾党から救ってもらったから礼としてただけだ」

「それでもだよ」

俺は笑顔で答える。なぜか顔が紅くなり下を向いてしまい震える

「お、おい。大丈夫か？」

俺は心配になって近づくと突然顔をあげ

「死ぬなよ！またいつか会おうな！」

それだけを告げ急いで城に帰ってしまった

「はははっ、……白蓮。お前も死ぬなよ……。」

聞こえてはいないだろうが白蓮が向かって行った方に言葉を紡ぐ

「主。」

「ああ、そろそろか」

結局一刀は待ってもここには現れなかった

「ほんと俺の弟は薄情な奴だな、みんながいるのにあいつだけこないなんてよ」

みんなは何故か苦笑いで何も言わない。

「さて、そんな弟はほつといて。それじゃあみんな俺も頑張る。みんなもこれから大変だろうが頑張れよ！」

「はい！」

「それじゃあな！」

俺は星と二人手を振り町の門に向かった

「行ってしまいましたね……。」

「うん」

みんなが真が向かった方向を見つめる  
そこで愛紗は桃香に疑問に思った事を伝える

「桃香様、真様にあの事を伝えないでよろしかったのですか？」

「うん、それが約束だったから」

「そうですか……、これから大変になりますね」

「うん、だけど頑張るよ！あの人たちにまた会ったとき驚くぐらい頑張ろう」

「はい！桃香様！」

決意を新たにみな城に戻って行くのであった

「主、それでこれから何処に向かいますか？」

「ああ、次はここからだと言ったと曹操だな。」

「そうですか、あの曹操の」

「ん？なんかあんのか？」

「いえ、ないと言えませんが……」

となんか聞こえない声で物騒な事が色々聞こえるが黙っておく

「そっかそっか、次は曹操のところか」

「ああ、あの曹操だ。正史でもすごいからな。簡単には会えんだろ  
うが」

「そうだね、どんな人物だろうね。やっぱり女の子なのかな」

「ああ、多分な」

と声の方に振り向き固まる

「……。」

「……。」

「せっ」

気持ちいいぐらいの笑顔で手を掲げる

「星？」

「はい、なんですかな主」

「なんか俺目が疲れてるみたいだ、今日はもうこの町出ないで宿に泊まって明日にするか」

「何を言っているのです？まだ昼にもなっていないではありません

か

「あゝそうですね。……それで星に聞きたい事がある、ここに見たことがある人物がいるんだが、俺の目が正しければこいつは俺の弟ですよ」

星は一度一刀を見て笑顔で見送られまたこちらを向く

「？はい。一刀殿ですな、あのきづかなかったのですか？」

あゝるうれえ？気配探知は苦手じゃないはすんだけどな〜もう見るからに一刀で一緒に行きます！付いて行くという風なんだけど……。

「それで……。一刀君、なぜ君はここに居るのかな？」

俺は次に言う言葉を予測しながらも言わずにはいられなかった。

「うん。俺も付いてく」

「は、俺は良いが桃香達は知ってるのか？」

「うん、最初は止められたけど説得した」

なんか勝手に向こうで話は決まってるたのね。

「分かった、分かった。もうその目をしてるときの一刀には敵わな  
いって知ってるさ！ああ、分かったよ！付いて来いよ！だけど危な  
くなったりこれ以上って時は桃香の元に返すからな」

「やったね！ひどいよ真兄、やっと会えたんだ。こんなチャンス二  
度とない。行けるとこまで一緒」

「はいはい、分かったよ。と言うことだ、星も悪いがよろしくな」

「大丈夫ですよ、一刀殿も立派な男、主が心配するほど弱いわけで

はありませんからな」

「ああ、分かった、……それじゃあ向かうぞ！」

「うん！」

「御意！」

三人これから色々大変なことがあるだろうがそんなことを考えていないような笑顔で一路新たな旅を始める！

それぞれの想い、次なる場所（後書き）

どうだったでしょうか？

話がズルズルと遅いですがこれからも頑張りますので未長くよろしくです！

それでは感想などもお待ちしてます／ (^| ^) /

## 真の覚醒

あれから街を出て三日。

相変わらず村はボロボロで黄巾党などに滅ぼされ人っ子一人居ず今日も今日とて野宿。

「まゝ今日も野宿だ」

「まあ、しょうがないよね」

「一刀もそこは解っているのか文句も言わず従う。」

「しかし被害が大きくなってきていますな」

「ああ、いよいよ軍隊並みに規模は大きくなってきているな」

そんなことを三人で話しているとキュウ〜と可愛らしい音が星のほうから聞こえた。

「す、すみませぬ」

「そうだな、腹も減ってきたし飯にするか」

飯を炊いたはいいがオカズがな〜。

「主、これを」

星はいつも持っている小さな壺を渡す

「これは?」

俺が言う前に一刀が言う。

「メンマです！メンマ！」

星よ、何故そんな目がキラキラしてんだ。

ま〜これは上に乗っけてメンマ丼にしちまつかと準備をしながら俺は禁断の扉を開けてしまった……………。

「星はメンマが好きなのか？そんな壺までm」

「主！よくぞ聞いてくださった！メンマとは

「

何故か趙雲こと星はメンマのウンチクを語り始めた。

「いただきます。」

「  
であるからしまして」

「いいの？」

「一刀が指を指して聞いてくる」

「俺じゃあ止められん。一刀聞いてやってくれ」

「俺は全てを一刀に丸投げし、さっさと寝ることにした。」

ここは夢の中。

何故かそう確信してしまう。

俺はそこで目を瞑っていることに気づき目をゆっくり開く。

しかし突然突風が吹き目が開く状態ではなくなりまた目を瞑る。そこでわずかに変化があった。俺ではない声が聞こえる。

一つは英語。

もう一つは日本語？

英語は理解できないがもう一つはなぜか理解できる。

体は 剣で 出来ている

血潮は鉄で 心は硝子

幾たびの戦場をを越えて不敗

ただの一度も敗走はなく、ただの一度の勝利もなし

担い手はここに独り

剣の丘で鉄を鍛つ

ならば、我が生涯に 意味は不要ず

この体は 無限の剣で出来ていた

なぜだろう。

理解したと同時に俺は目を瞑ったまま涙を流していた。

その時前から声が聞こえた

「なぜ泣いている」

そこで俺は地面に立っていることに気付き涙を流しながら目をゆっくり開いた

そこはなぜか半分が紅い夕焼け空、もう半分が曇りのない青空が広がり地面には墓標のように色々な所に剣が突き刺さっていた。それはまさに詩の通り、担い手をそこで静かに待っているようだった。

気配がし前のほうを見るとずっとそこにいたように独り剣の丘で立っていた。

髪は白、肌は赤錆た鈍色、黒の鎧に紅い布を纏う俺より少し高い背の男が居る。

「あなたは？」

「ふむ、まず私がここに居るのも不思議なのだが、まずは君の名を聞こう」

「は、はい。御剣真です」

「そうか、君が……。そうだな、私はアーチャーと名乗っておこう。この名前は気に入っているのね」

「はあ。」

「それで君に魔術回路を授けたのもこの私だ」

「あっ！あの手品みたいなやつか」

「手品！？ま、まゝ君の世界では手品みたいな物かもしれんが。」

なぜか呆れられてしまった。

「それでなぜ俺はここに来てしまったんでしょうか？」

「それは俺にも解らんがどっかのバカな聖杯の気まぐれであろう」

「ん？わからないんですが」

「これも何かの縁だ。今君が悩んでいるこの魔術の知識、その使い方教えよう」

「ほんとうすか!？」

「ああ。だが覚悟を決めてもらおう」

「覚悟……ですか？」

「ああ、強制はせん。全てとは言わん。できるだけでいい。苦しんでいる人を助けてやってほしい。独りではなく仲間と一緒に。」

「そんなことですか？大丈夫ですよ！元々体が勝手に動いてしましますし」

「ふっ、そうか。……では、俺の全てを君に教えよう」

俺はアーチャーさんが教えてくれることを全て吸収していった。

数時間後。

「しかし、存外君も剣の才能がないな」

「も、って師匠も？」

「ぐっ、なんだねその師匠とは」

「そりゃ師匠は師匠。俺の魔術の師匠すよ。アーチャーさんは。」

「そんな大層な人物でもないんだがな、私は。」

なぜかアーチャーさんはそこで寂しそうに空を見上げ、語りだす。

「これは独り言だ。君が聞いて私を蔑んでも私は一向に構わん。」

なぜかそれは君に聞いてほしいと。そんな風に俺は聞こえてしまった。

気づいたら其処は死の海。

命はどんどんなくなっていき、自分も死ぬのだらうと核心を得る。

体は当に死に体。心はすでに死んでいる。

ついに身体も動かなくなり死を待つだけ。

そこにはもう何もなかった。

だがそこにヒーローが現れる。

その人に命を救われその人が輝いて見え自分もそうなりたいたと思った。

それがアーチャーさんの始まり。

結局色々あり最後には助けたものにも裏切られた。  
それでもアーチャーさんはそれでも良かったらしい。

それで救われる命があったから。

だけどそこから歯車が狂いだす。

アーチャーさんが目指したものは結局絵空事でアーチャーさんはそれを『掃除屋』と皮肉気に言う。

いつもそうやって自分を蔑んできたのだろう。そして世界の守護者となったアーチャーさんにまた運命が訪れる。

過去の自分との再会。

そしてずっと心の中に秘めていた闇。  
自分を消すという八つ当たり。

「それで……、どうなったんすか？」

「ふ、……負けたよ。それも完膚なきまでにな。」

その時のアーチャーさんはそれはもう清々しい笑みだった。

そしてその聖杯戦争なるものが終わりアーチャーさんはもう元の場

所に戻らなければならなかった。

最高のパートナーとの別れ。

それでも寂しくないと。答えを得たからと。

そうしてアーチャーさんの物語は終わる。

「と云うことだ。俺はその後君に魔術与え今に至る。」

「……、やっぱりその話を聞いても俺にとって師匠は師匠すね。」

俺は確かに正義の味方は嫌いだ。俺は助けられていない。けどアーチャーさんが言うように全てを救えるなんてあり得ない。それでもと。

そう、それでもこの人は自分の出来る精一杯のことをしてきた。それを救われなかったからといって俺が否定するのはお門違いだろう。

「君はほんとに……、昔の私にそっくりなのだな。あの馬鹿な考えを愚直に真つ直ぐ突き進む愚かな私に」

「それでも貴方は答えを得たんですよ？ パートナーさんに伝えたいんです。それはきつと良い答えを得たんだと思います」

「ふっ、そうだと嬉しいんだが。」

「それに師匠はその人がなんだかんだで好きなんですね。話しているときの師匠優しい顔してましたし。」

「なっ!?!しかし凜は」

となぜか小声で赤い悪魔と聞こえた気がしたのは気のせいかな?

「長々と話してしまっただな。後は少しでも生きながらえるように弓と剣の使い方ぐらいはしよう。剣は私と同じだが君も目はいい。弓ならかなり良いところまでできよう」

「宜しく願います!」

「まあ、こんなものだ。君が言っていたその詩は私の生涯の魔術。『固有結界』。君にも聞こえたのなら使えるのだろうが、君には分不相応だ。それでも使うというのであれば覚悟しろ。何が起きるか分からんからな。」

「はい！」

「それとこれは記憶でしかないが、君に私が使ってきた魔術の記憶を流し込む。そうすれば使い方は解るだろう」

頭に大きな手を乗せられなぜか頭の中に剣などの情報が流れ出してくる。

「これで君にも私と同じ魔術が使えるはずだ。……忘れるな。君には剣の才能はない。ならばそれに負けない物を創れ。偽物が本物に負ける道理などないからな」

「はい！ ちよつとの間でしたがありがとうございます。」

「ああ、私が言えた義理ではないが諦めるな」

「はい！」

「そろそろだ、外がちょっと騒がしいな。君の仲間が心配しているようだ。行ってやるといい。」

「はい。もう会うこともないと思いますが……」

「ああ、頑張ってきたまえ」

そうして俺は現実を引き戻されていった。

「遠坂。俺は答えを得て今こうして俺に近い奴を見送った。俺なんかを師匠なんて言う変な奴だったけど俺みたいに失敗するような奴じゃないだろう。」

『当たり前よ！あんたが間違っつてそして答えを得てそれを教えたのよ！間違えるはずないじゃない！』

アーチャー　　未来の士朗はそんな声を聞いた気がして空を見上げた癖の皮肉気な笑みを残し消えていった……。

夢の中で真が修行なるものを受けている頃現実の世界では朝を迎え星が真を起こそうとしていた。

「主、朝ですぞ。起きてくだされ」

星は旅を初めてから欠かさず真を起こしている。

しかしそれは何時もと違った。真は息をしていなかった。

「主?……主?」

星は嘘だと言つように嫌々と首をふっている。そんな様子を一刀は変に思い様子を見に近づくとあのいつも人に対しておどけている星がペタンと地面に座り静かに涙を流す。

「どうしたの!?!星!」

星は泣きながら遠くを見ているように何も言わない。  
本当に何が起きたのかわからない一刀は当の原因である真に近づく。

「兄さん?」

声をかけるが死んでいるように反応がない。

「なんだよ……これ。兄さん……ウソだろ?」

本当にそこには死んだ人間が静かに眠っているようにしか思わなかった。

しかし、そう思っているとき、一刀や星には奇跡に等しいことが起きた。それはさっきまで息をしていなかった真が咳込んでいたのだ。

「ゴホッ、ゴホッ！」

なんだ？起きたら急になんか喉に詰まったみたい違和感。

俺が咳き込み急に起き出すとそこには心配そうに佇む一刀と座り込んで泣いている星がいる。

「じほっ、こほっ、おお、ふ、二人ともおはよう」

俺がいつも通り挨拶をすると一刀が声をかけるより早くなぜか取り乱した星が俺に飛び込んできた。

「主！主！私を置いていくなんて許しませんよ！あるじいー！」

なぜかめちゃくちや嬉しいが意味が分からん。だけどこんな取り乱された星を見るのは勿論初めてで俺は落ち着かせるため星の背中を撫で、目線を一刀に向け説明を求めた。

「そういうことか」

まさか俺が夢みたいの世界にいて現実では死にかけてたなんて笑えない冗談だな。  
つて冗談じゃないのは今でもくつついて離れない星や一刀の説明でも分かるんだが。

「ほら、もう大丈夫だから星も離れないか？」

「嫌です。また離れたらいなくなってしまう」

ぶくうと頬を膨らまし主張。

「それで……、兄さんは兄さんなの？」

なぜか一刀は意味の分からない質問をしてくる。

「ん？どう言っことだ？」

「いや……、気のせいみたいだからいいけど」

なんだ？訳が分からんことを。

一刀は直感で思っていた。

今いる真は昨日までの真ではないと。

何か纏うオーラみたいなものが昨日とまるで全然違うことを。

だが一刀は勘違いと思おうとした。

この漠然とした不安。

いつか真が自分より遠くに、もう会えなくなってしまうのではないかと思っていたからである。

「ほらほら、いつまでもくっついてたら準備ができません。離れてくれ」

「ほら星。兄さんも無事なんだ。もうそろそろ僕らも準備するよ」

星は一刀に剥がされ自分達の準備に取り掛かる。

真は自分の手を開いたり閉じたりする。

「夢じゃ……ないんだな」

真は現実で傷ついていなかった体の部分に師匠との修行で傷ついているキズに気付く。

それはもう誰が見ても分からないくらい薄いが自分が直接傷ついたキズには気付く。

「師匠……。師匠に教えてもらったことは必ず困っている人達のために使う。ありがとう。」

俺はもういないはずなのに空に向かって言葉を投げかけた。

そんな真を一刀と星は各々の想いを胸に抱き見つめている事を真は知る由もなかった。

とある城。

「準備はできているわね？」

「はい」

「それじゃあ出陣よ」

「「御意！」」

どこか戦争が始まるのか、それともただの視察なのか城から出る兵と武将。

そののさらに後ろにいるそれを従える主君がこの日城から出ていった。

とある村。

「あか〜ん。全然売れへん」

そこに籠を売るには少し目のやり場に困る服装をした女の子がいた。

「こっちもだめなの〜」

そこにまたその子の仲間なのか顔にそばかすがある髪を後ろに束ねている女の子がやってくる。

その時走ってまたもや近づいてくる無骨な鎧を纏った銀髪の顔にキズがある女の子がやってくる。

「二人とも急いで準備だ。旅人が言っていたんだがこの町に向かつて賊がくる。あの方なら必ずこんなとき自ら先陣を切って敵を迎え打つはずだ。」

「でたで。凧の『あの方』。ほんまに凧はその人に憧れてるやな。」

「当たり前だ。あの白き龍様は何も見返りを求めず来た賊を一人で倒し、そのまま去っていく。そんな人みたいに私はなりたい。」

凧と呼ばれた女の子は拳を握り締め熱く語る。

「沙和も興味はあるの。なんかとても綺麗な人らしいの。真桜ちゃんに興味ないの？」

沙和と自分の事を呼ぶ女の子は真桜と言つ子に聞く。

「会いたくないわけないやろ。噂じゃあ天の御使いなんて噂もあるんや。興味はあるわ。それにこうやって義勇兵募ってるんも憧れてうちらも頑張るためにやってるんやし」

「そうだな、いつか会えたら嬉しい」

「凧ちゃんは白き龍様が好きなの」

「こ、こら、沙和！私はその、だな」

「凧ちゃん顔真っ赤なの」

「沙和〜！」

凧という子は顔を真っ赤にしながら追っかける。

「ほらほら、二人とも、遊んどらんで準備するぞ。」

「わかったの」

「む、仕方ない、真桜は北、東、西、三ヶ所に防壁を造ってくれ。沙和は協力してくれる人を出来るだけ集めてくれ」

「風はどうするんや？」

「私は地形を調べてくる」

「わかった。またここに集合や。」

残りの二人は頷き三人それぞれの場所に向かう。

ここに新たに出逢いがあることをまだみな知る由もなかった。。。

## 新たな出逢い、霸王曹操

私達は昨日来るであろう賊を迎え撃つため町の入り口に急造の防壁を張った。しかしそれももう持たない。

それは私の所だけではなく残りの二つも同じだろう。

仕方がない……。

せめて兵の人達だけでもまもらなくては。

「みなさん。私ができます。みなさんは私が出た後矢で援護を。」

「……しかし、それは無謀です！自分達も夏口淵様の部隊です、死ぬ覚悟は当に出来ております」

そつだ、そつだとみな同じように頷く。

「しかしこのままでは……。」

「大丈夫です、俺達は俺達で何とかします。それよりあなたが一人前にでるほうが危ないと」

「私は大丈夫、こういうときの為に体を鍛えてきたのですから、あなたたちはここをなんとしてでも死守してください！」

銀髪の髪の子一人敵陣に突っ込んで行った。

「しかしそうはいったものの、一人でどこまで持つか。さっきの使者の方二人はあと一日持ちこたえれば増援が来ると言ったが」

それまで持ちこたえたいのが正直なのだか……。

「おお、ねえちゃん一人で勇ましいねえ。……よく見れば可愛いじゃねえか。これは今日俺らの慰めものだな」

ゲラゲラと下種な笑いをする。

「うるさいぞ、下種が」

その言葉を聞いて賊は笑いを止め睨む。

「おもしれえ、死んでなきやいい、こいつを痛めつける！」

その言葉で士気が上がったのかみな獲物を構え直す。

「今更謝っても容赦しねえ、痛めつけて俺達の慰めものだ！」

「……黙れといった。」

その瞬間賊たちは何が起きたか分からない。

ゆういつ解るのはさっきまでいた仲間が吹っ飛ばされたということだけだった。

「き、きさまあ！」

「はあああ！」

気を練り込みそれを拳や足に乗せ放つ。  
それが凧ことこの楽進の技であった。

半刻その戦いは続きついに凧も力尽き膝を付く

「はあ、はあ。」

「やっと力尽きたか、ここまで仲間が殺されたんだ。こいつは殺して残りの二人でも慰め者にするか、お前ら！殺せ！」

「くそっ！あの二人には手を出させんぞ」

真桜と沙和だけは。  
でももう力が……。

「それじゃあ、……死ねえー！」

頼む！私はどうなってもいい！あの二人だけは！

目を瞑り神に祈る。しかし一向に痛みがこない。

死ぬと言うことは痛みもないことなのか？

恐る恐る目を開けるとそこには私を護るように立ち剣を持った男の手首を掴んでいた。

「間に合ってよかった。死ぬほどのケガはなさそうだな、ちょっと待ってろ」

掴んでいた男を蹴り飛ばし此方を向く。

ビリビリと自分の服を破り血がでているところに巻かれる。

「よく耐えたな、あとは俺が何とかする。残りの二人も気にするな、俺の仲間と弟が向かったからな。」

頭を撫でられる。撫でられたところから暖かい温もりが伝わってくる。

「あ、あなたは？」

「ん？おお、名乗ってなかったな。俺は御剣真だ。」

「えっ！？」

私は信じられなかった。あのずっと会いたかった『白き龍』が今私の目の前にいる。

「え、炎鬼だ！あの炎鬼だ！」

何故か賊たちも名前を聞いていたのか騒ぎだす。しかし一瞬で場の空気が変わる。

「うるさいぞ貴様ら、少し黙れ」

さっきまでとても暖かい笑みで語りかけてくれた人と同じだとは思えないほど冷たい声で振り向かず賊に殺気を放つ。その声で賊たちは一歩も動けなくなる。

「ごめんな、すぐ片付ける。そしたら君の仲間の所に連れて行くから」

そう言つと背を向ける。

「い、いえ、自分も戦いま、あ……。」

立とうとして力を入れるも叶わず前のめりに倒れる

「おっと!？」

だが最後まで倒れず御剣様に抱えられる。

「こら、無茶すんな、いくら死ぬケガがなくてももう体力が底を尽きかけてんだ。ここは大人しくしてろ、な？」

「あつ、……はい」

なぜだろう。

胸の鼓動が早くなる。沙和が変なことを言ったせいで意識してしま  
う。私は懂れているだけなのに。  
紅くなっていないだろうか。

「大丈夫か？」

「は、は、はい！」

ど、どもってしまった。

「それに俺も西に向かった弟ほどじゃないがキレてんだ。後は俺に任せとけ」

「はい……。」

西……、沙和の所に。

「そこで待ってるよ、君の所には一歩たりとも近づかせねえから。」

そういつと、私から離れ背を向ける。その背中はとても心強かった。

数刻前……。

「主、もつすぐ町に着きますぞ」

「ああ、けどなんか動物達が怯えてんな。」

周りの空気がざわついている。

「崖かなんかで周りを見渡せないか？」

「それなら今一刀殿が」

「真兄！星！こっち来てくれ！町が襲われてるっばい！」

俺と星は顔を見合せ急いで一刀の所に向かう。

「こりゃあ、……襲われてんな。」

「兄さんここから見えんの!？」

俺はそれに答えず俺だけの呪文を唱える

「“想いを胸に”」

「!？」

弓を静かに構え後ろの奴らを次々と倒す

「兄さんそれ!？」

「ああ、なんかあの日起きたら使えるようになってた。」

訳を省き俺はそう答え一刀達に言う。

後方の賊に弓が当たり賊たちは慌てていた。

「今なら混乱してる。二人ともいけるか？」

二人は頷く。

「俺は北、星は東、一刀は西だ、あそこは三人居れば何とか数は減らせる」

今俺が弓で倒した方を指差す。

「俺が突破口を作るよ、そしたら真兄と星は突っ切って」

「しかし、それは」

俺は星の言葉を手で遮る。

「できんのか？」

「まかせて、こんなにムカついてんのは久しぶりなんだ」

一刀からは沸々と闘気が溢れている

「久しぶりだな、お前がキレんの。」

「さすがに理不尽だ、赦せない」

「そうか。それじゃあ先陣は任せた、そろそろ押さえてる三人もやばそうだ。」

「ここから落ちればショートカットにはなるだろ。」

「崖から飛び降りるぞ、いけるか？」

「うん」

「いけません！」

なぜか星は威厳たっぷりに胸を張って主張する。

「せーいー」

一刀は崩れ頂垂れた。

「兄さん……。」

はいはいわかりましたよ、やればいいんでしょ、やれば。

「わかった、星俺の首に掴まれ」

もうこれでもかトルンルンにしがみつく。

「じゃあ一刀、行くぞ！」

「うん……。」

ああ、弟よ、意気込んだんだやるせないよな、しかし俺でも星は止まらん。諦める。

俺達は微妙な気持ちを振り払い崖を飛び降り三人賊の下に向かう。

俺達はすぐに賊の後方にたどり着き賊もそれに気付く。

「なんだなんだ、お前らもあいつらの仲間か？」

前の方を見ると鉄球を持った鈴々より幾分大きい女の子とその少し後方に青を基調にした方目を隠した女の人がいた。

「聞いてんだ、こた」

と前に賊が出た瞬間そいつは一刀によって切り捨てられていた。

「うるさいよ」

あちゃー完全にキレてる。こうなったら気が済むまで無理だぞ。

「兄さん、星、俺に続いて。数を減らす」

「分かった、突破したら二人はそのまま目的地に行ってくれ」

「兄さんは？」

「俺は前にいる二人のうち一人に弓向けられないように話ぐらいはしときたいからな」

「分かった。星もそれでいいね。」

「御意！」

「それじゃあ」

場の空気が変わると同時一刀が突進するそれに続き星、俺と一列に並び突破。

「二人とも後は任せたぞ！」

「兄さんも、また後で。」

「主、一刀殿御武運を」

二人はそれだけ言うとそれぞれの場所に向かった。そこにさっきの鉄球娘が敵をぶっ飛ばしなから向かってきた

「兄ちゃんたち強いね!」

「おっ!ありがとうございます、そっちはケガないか?」

「大丈夫だよ!それより兄ちゃんたち……」

となぜか鉄球を構え直していらっしやる

「おい、まてまて。俺達は通りかかったら襲われてたから助けに來ただけだ。それより他の所も危なそうだから、後は君たちにここは任せるけど大丈夫?」

「うん!まかせてよ、兄ちゃんたちのおかげで数が減ったから」

「わかった、俺はあっちにいる女の人と話したらそのまま真っ直ぐ北に向かう。この戦いが終わったらまた話そうな！あと無理すんなよ！」

「うん！兄ちゃんも」

そう声を掛け合いお互い別々に駆け出す。  
そして俺はもう一人の方に近づく。

「君がここの指揮をしてる人でいいのかな？」

「ああ、そうだか貴様は？」

「俺は偶々通りかかった旅人、仲間を見逃してくれてありがとうな。」

「ふっ、私たちに危害がないのならいいさ」

「危険なんてとんでもない、加勢に来たんだ。ここはもう君たちでも大丈夫みたいだからこのまま行かせてもらおうな」

「ああ、助かったよ、後でお礼がしたい。すぐに旅立たないでくれよ？」

「はは、了解。弟も喜ぶ。」

俺はその子の横を通り過ぎ一言伝える。

「なあ、あんた」

「ん？まだ何かあるか？」

「ん、殺気をぶつけるのはいいけど、もうちょっと狙いを定めた方がいい。それじゃあ、俺や弟には通じない」

と一呼吸おいて

「それと、あんたそんな目付きで睨んでるより笑ってるほうが綺麗だと思っぞぞ」

そのまま振り返らず目的地に向かう。

そのまま振り向かず行ってしまった。

まさか殺気の場所まで当てられるとは侮れない奴だ。

姉者より強いかもしれん。

華琳様の邪魔にならなければいいがな。

「ふっ、それにあの男、他の男が言えないことを平然と私に言っ  
て行ったな。」

ああいう男もいるのだな。  
それにあの男、華琳様が言っていた噂の天の御使いの風貌に似ているな。

「まさかな……。」

男が行った方を見つめすぐ気持ちを切り替え敵に向かって矢を放った。

「おっ！一刀の奴おっはじめたな」

俺が銀髪の子を助け敵の前で対峙していると左の方で火柱が立っていた。

「あ、あれは!？」

「ああ、大丈夫だ。俺の弟が暴れてるだけだから」

心配そうにしている銀髪の子を落ち着かせる。あつちに仲間がいない、心配なのはわかんだけだな。長引くのも不安にさせちまうな。

「さあ、俺もさっさと終わらせますかね」

腕をグルグル回す

「お、お願いだ！見逃してくれ。もうこの町は手をださねえ」

「あん？今更命乞いか？ゆるさねーよ。謝ったら死んだ町の人たち

「が生き返るのか！」

俺は構え丹田に力を込める。

「地獄で詫びてこい」

拳を握り締める。

御剣流。

「散華

（はららばな）」

拳が幾重にも幾層にも打ち込まれる

御剣流の拳を使うときは理由がある。

それは刀を持った、あるいは銃を持った人間を相手にしたときだ。拳は一体多の時。

出来るだけ迅速に一撃を加える事が求められる。肝心なのは銃を持

つた奴、刀を握った奴そういう奴らが総出でこちらに襲ってきた時に一撃で相手を戦闘不能にし、一撃の後も尚動き続けること。

「ふう。」

こればかりはホントに疲れる。まだまだ体力の向上が必要か。って休んでる暇はないか。あの子の仲間の下に連れて行かなきゃな。そろそろあっちも終わるだろう。

「おい、大丈夫か？」

なぜか俺が近づいても反応がないので、近くで顔を覗いてみる。

「ひゃー！」

やっと正気を取り戻したのか我に返る。

「大丈夫か？ざっと見て酷い傷がないって判断したけど、辛いところあるか？」

何が起きたか分からない。

気付けばそこには白い服を風になびかせ威風堂々と立っている。あの人は何をしたのだ？

高速の……いや迅速の速さで何かをして気付けば賊を倒していた。

それも一瞬で。と考え事をしていたらいつの間にか目の前に御剣様が！？

「大丈夫か？ざっと見て酷い傷がないって判断したけど、辛いところがあるか？」

さっきまで冷たい目をしていた人には見えないぐらい優しい目をしている。

この方はほんとに私の思った通りの人だったねだな。

やはりこの人の弟子になりたい。この人のように強く。もっとみんなを護れるように。

つと考えてないで返答を。

「いえ、御剣様のおかげで少しは体力も戻りましたので。」

と立ち上がろうとしてもやはりまだ立てるだけの体力は戻っていない地面に座ってしまふ。

その時御剣様は何を思ったのか急に屈み私を抱き上げてしまふ。

427

「無理をされても困る、このままみんなのどこまで運ぶぞ」

「い、いえ、自分は」

「黙って言うこと聞け。動けば傷口も広がる」

「は、……はい。」

ってこの抱き方はちょっとあの……あう。

俺は銀髪の子を抱き上げ兵たちの横を横切り町の中央にいる仲間達のもとに向かう。

そこでこの子の仲間が声を上げ手を振る。

「あの子も無事だったんだな。」

安心してみんなに近づく。

「凧ちゃん！良かった、無事だったの〜」

「だから言っただろう？兄さんなら必ず助けるって」

「うん！お兄さんありがとうなの」

「いや、大事にならなくてよかった。」

一刀と合流して話していると星たちも無事合流してきた。

「一刀、星ケガはないか？」

「うん、俺は何も。星は？」

「私も大丈夫です」

と聞いて安心すると星と一緒に来ていたかなり際どい服装をした子

が俺に近づいてきて上から下まで眺め言っ。

「ふうん、兄さんがあの有名な『白き龍』の御遣い様か、風助けてもらって良かったな」

と俺が連れてきた子にニタニタ笑いで問いかける。それにあたふたしていた。その言葉を聞いた一刀と一緒に来た子が驚く。

「えええええ、ほんとなの？真桜ちゃん!？」

マジやマジと三人盛り上がっている。そんな光景を見てなぜか俺は助けられた達成感なのか自然と微笑んでしまった。

「……………」

なぜか三人、いや星もか？固まってしまっていた。

「兄さん」

「ん？どした？」

「それは反則だよ」

俺は意味が分からずずっと首を傾げていた。

「今の見たか？」

「うんうん、見たの」

「……………」

「今は反則や、さすがにドキッてしてもうた」

「真桜ちゃんも？沙和も今のはちょっと反則だあて思ったの」

「……………」

「風ちゃんは？」

「……………」

「風？」

「……………」

凧はあまりの真の笑顔に倒れてしまった。

「凧〜！」

「凧ちゃん！」

このあとその状況に真も驚き凧を起こすもそれは逆効果でもう一度凧は倒れてしまう。  
そんな戦った後のちょっとした微笑ましいお話。

女の子たちの騒動が一段落しあらかた治療も終わって残りの連中を

待っていると最初に出会った二人の他に、仲間を連れてこちらにやってくる。

「あなたたちが秋蘭と季衣が言っていた子達ね。」

いきなりきて三人を見て言う小さな子。

「むっ、あなた今失礼な事考えなかったかしら？」

なぜか何も言っていないのに睨まれてしまった。  
しかしこの子背に似合わずすげー覇気を感じる。なにもんなんだ？

そんな事を考えてるうちに話が進み三人は今来た子達の仲間になるらしい。

三人の自己紹介が終わったのか今度はこちらを向く。

「それであなた達は？」

そうこちらを向いて言つとその横にいた方目を隠した子が説明する。

「はっ！こやつらは先ほど伝えた旅人と名乗るもの達です。この者達のお陰でなんとか敵を倒す事ができました。」

「そう、私の部下が助けられたなら礼をしなくてはね。名はなんて言つのかしら？」

「俺は御剣真。こっちから本郷一刀」

「私は趙雲です。曹操殿」

なんだって？

この子が曹操？……どおりで覇気がすごいわけだ。

「一刀、どうやら目的は早くも達成したみたいだな」

「すごい偶然だね」

二人で小声で話していると曹操は口を開く。

「そう、あなたたちがあの天の御遣いなだね。……そうねあなた達も私の部下になりなさい。」

いきなりだなあ。まあいいお誘いなんだが。

「いい誘いだかそれは断らせてもらつよ」

俺は二人に相談もせず一言で断る。  
すると後ろにいた黒髪の子が吼える

「貴様！曹操様の誘いを断るなど許さん！たたっ斬る！」

そう言うと一直線に突っ込んで来て上から剣を振り落とす。

だが俺が対応するより早く一刀が対応する。  
ガキンと剣と剣のぶつかる音がし、鏝迫り合いになる。

「貴様……、どけ！貴様もたたつ斬るぞ！（こいつ出来るな！？）」

「悪いけど兄さんには指一本触れさせないよ。（この子も愛紗と同じぐらい強い！？）」

そこで俺と曹操は同時に口を開く

「一刀」

「春蘭」

二人は呼ばれたと同時に力を抜き下がる。

「悪い、ありがとな、それと曹操もすまない。うちの弟が失礼なことをした」

素直に頭を下げる。

「いいえ、うちの春蘭も悪かったわ、気にしないで。」

さすが曹操かな。こんなことでは動揺もなし。……か。

「それで提案なんだが曹操たちはこのまま奴らの根城を潰すんだよな？」

「あら、分かってるじゃない。ええ、新しい部下も得たし、そろそろ私の名を上げるには頃合いだしね」

「なら俺達もそれを手伝おう。客将として扱ってくれるならばだが」

「ええ、いいわ、元々礼はするつもりだったのだから。」

と異議を唱えるものが二人。

さっきの黒髪と猫耳帽子が言う。

「か、華琳様！こんな汚らしい男どもを近くに置くと言うのですか？」

何か失礼な扱いを俺と一刀は受けている。

「私も納得いきません！こんな軟弱者など。」

一刀に止められてたけどな。

と心の中でツッコミを入れていると方目を隠した女の人黒髪に言う。

「姉者、私はこの目で見たがなかなか骨のある男達だぞ」

それは珍しいのかみんなその言葉に驚いている。

「しゅ、しゅうらゝん！お前まで」

姉妹なのか、姉の方はその言葉に崩れていた。

「珍しいこともあるものね、あの秋蘭が男を褒めるなんて。ということよ。あなたの申し出受けるわ」

話はまとまったのか曹操はこちらを向いてそう言った。

「そうか、それじゃあこれからよろしくってことで、俺の事は真っ  
て呼んでくれていい。よろしくな曹操。」

と笑顔で答えると曹操は

「華琳よ」

いきなり真名を預けてきやがった。やっぱり霸王は何考えてるかわかんねえな。周りも驚いていた。

「いいのか？」

「これから少しでも居るのよ？なら真名を預けるのは礼儀ではなくて？それに私はあなた達を認めているわ。なら真名を預けるのは当然よ」

おもしれえなこの世界の霸王は。……気に入った！

「そっか、それじゃあよろしくな、華琳」

俺はこれからの事を考え笑みをこぼさずにはいられず笑みが自然と

こぼれていた

そのあとみんなとも真名を交換した。

若干二名ほど嫌な顔をしていたが華琳の一睨みで終わった。

曹操、真名を「華琳」。夏侯惇、真名を「春蘭」。夏侯淵、真名を「秋蘭」。荀イク、真名を「桂花」。許緒、真名を「季衣」。華琳が連れて来たメンバーである。

残りの三人娘も真名を交換した。

李典、真名を「真桜」。于禁、真名を「沙和」。楽進真名を「凧」。

「それじゃあ真名の交換は終わったわね。桂花！」

「御意。もう兵には伝えております。」

おお、さすが曹操の軍師だな。考えてることは直ぐに行動に移すのか。そうとう俺と一刀は嫌われているからな。

「それじゃあ、それは桂花に任せるわ。春蘭、季衣は周りを見てまだ逃げ遅れている民を誘導しなさい。」

「「御意!」「」

「秋蘭は怪我人を。あと真にもお願い出来るかしら?」

お?なんか知らんが呼びが掛かったぞ

「おお、了解した」

その時三人娘も手を上げ、華琳に言う。

「華琳様私達は……。」

凧が一步前に出て言う。

「そうね、あなた達は三人いつも一緒だったのよね、そうね……。」

なんか俺と一刀を交互に見てるけどなんかあんのか？

「真、真の元にとりあえず付けるわ。帰ったら町の警備隊も作りたかったから、真。あなたがこの子たちを鍛えてあげて頂戴」

それを聞いて驚いていると三人はやったーだのよっしゃーだの騒いでいる

「いやいや、嬉しがつてるとこ悪いが俺客将だぞ？そんなの任せても良いのか？それに人を使うのは俺には不向きなんだけど。」

「あら、それならちょうどいいじゃない。不向きと認めるならそれを克服しなさい。」

おいおい、なんだこの完全断り不可能な包囲網は！？

曹操………恐し！

「あ、あのだな、それなら一刀のほうか」

「一刀ならもう居ないわよ」

一刀……！

「ああ、もう分かった！分かりました！やります！やりますよ！そのかわり一刀も俺の下に付ける！これが条件だ」

「あら、それは何故かしら？」

「ふふふふ、あいつは俺に何も言わず逃げやがった。その報いじや！罰は受けてもらう」

真からは黒いオーラが沸々と沸き上がっていた。

「てのもあるんだけど、ほんとにあいつのほづが結構頭回るんだ。色々相談したりして手伝ってもらいたいってのが本音だ。」

「分かったわ、一刀には私が伝えて起きましょう。」

「よろしく頼む」

「それじゃあ各自動いて頂戴」

それぞれ持ち場に行き、残ったのは秋蘭、三人娘だった。

「た・い・ちよ・ちよ！これからよろしくやな」

「たいちよ〜よろしくなの〜」

「沙和、真桜！挨拶はしっかりと……、隊長これからよろしくお願  
いします。」

口々に隊長、隊長って言いやがって。それと頼む！真桜！俺の前だ  
けでいいから上着とかあるなら羽織ってくれ！

そこで肩に手を置かれ振り向くと秋蘭が一言。

「頑張るのだな、隊長殿」

と言った。しかも二ヒルに。  
この子楽しんでませんか？

「分かった。よろしくな、それと二人の手綱は凧。君に任せる。君なら見ている限りしっかりしてるし信頼できる。真面目な子は俺好きだしな」

なぜか場が止まってしまった。なぜだ？

と考えているうちに凧がバターンと勢いよく倒れてしまった。

「お、おい大丈夫か！？この子はいつもこんなに倒れるのか！？」

あたふたしていると沙和と真桜は溜め息をする。

「あかん、あかんよ隊長。凧は隊長らぶくやねん。そんな隊長が好きだ」なんて言ったら凧じゃなくても倒れてまっわ」

「そうなの、凧ちゃんはずっと隊長に憧れてて、会いたがってて、急にそんなこと言われたら凧ちゃん倒れちゃうの。」

「らぶ」の意味がよくわからないんだけど取り敢えず俺が悪いんだな。起きたら凧に謝るよ。」

「あかん。沙和。隊長完全なジゴロの鈍感や。これからうちらも大変やで！」

「これはもうあとで一刀さんに協力……」

となぜか二人で会議を初めてしまった。

「取り敢えず、凧が起きてから……かな。」

俺はわからないのでポリポリ頭をかいて凧が起きるのを待ち、起きてビックリさせないように謝ったが終始顔が紅く心配だった。凧が落ち着いた頃、秋蘭とともに端から端まで怪我人を運び城に戻

るよう伝える。死んでしまった人達は一刀を捕まえ一刀と相談し火葬にすることを華琳に話した。理由も含めて。

俺はその火葬をずっと眺めていた。

「た、隊長？」

「おう、どうした？」

ずっと眺めていて誰かが来たことも気付かなかった。そこには風が心配そうに見つめてくる。

「いえ、……ずっと眺めていたので。……すみません。」

「なんで風があやまんた？」

「いえ、あの方達は自分が殺したようなものです。もっと……もっと自分に力があれば」

凧が悔しい思いを拳に込める。

「力があつたつて護れないものもあるさ。ただこれ以上犠牲を増やさないように少しでも努力していこうと俺は思ってる。

それとこれは俺の勝手な気持ちだな……。俺が殺した者。俺が助けられなかった者。その人たちの最後は今俺が見なきゃいけないと思うんだ。それが俺の殺した者への覚悟で義務な気がする。だから、君がそんな苦しそうな顔をするな」

今にも泣きそうな顔をしている。俺はその顔が嫌いなんだ。

ほんとのことを言えば俺だって桃香の言うようにみんなが笑顔で居れば良いと思う。

決してそんな幻想は叶わないとみんなが言っても。だけど俺もどっかで諦めているんだろうな。そんなことは自分じゃできないって。だから俺は自分に言い聞かせながらせめて大切に思うものだけでも笑顔でいてほしい。

そう思うのかもな。

「ほら、笑顔笑顔！そんな暗そうな顔してたら可愛い顔が台無しだぞ！」

「ふあ、ふあいひょう！？」

俺は自分の闇を誤魔化し振り払い風の頬を引っ張りながら笑う。

「なあなあ、沙和。あれ良い感じなんちゃう？隊長が風の頬引っ張ってんで、そろそろウチらもいこか？」

「ぶ〜風ちゃんばっかりずるいの！真桜ちゃん突貫なの！」

キヤイキヤイ言いながら二人は真の下に向かう。その二人の後ろで他のみんなはそれを眺めていた。

「主には気付いてほしいですな。主が思っているほど主は非情な人間ではないと」

星は真を眺めながらそう語る。

「そうだね、兄さんは人一倍考えてしまうから。頑固なところはあ  
るけど、それでも最後まで見捨てるような真似は絶対しない人だか  
ら。」

ああやって一人でなんでも抱え込んだ。弟としては誇りに  
も思っけど、寂しいとも思っよ」

「一刀。真はいつもああやって最後は眺めているのかしら？」

「ん？そうだね。この世界にくるまでは俺も兄さんも人は殺してな  
いから」

「一刀。真がそのままあんなことを続けていたらいつか潰れるわよ。」

星が一步踏み出そうとするのを手で制し一刀が答える。

「兄さんは潰れないよ。」

それは迷いも何もない澄んだ言葉だった。

「あら迷わず言っのね」

「うん。華琳が仲間を信じるように俺と星も兄さんを信じてるから。」

「仲間……ね。まあいいわ。あなた達の信頼はよく分かったわ。ますますあなた達がますます欲しくなっただわ。いつそ二人共私の旦那様にしようかしら」

「か、華琳様!？」

春蘭が驚き声を上げる。

「はっはっは。曹操殿ご冗談を。主は私のものです。そして一刀殿は劉備殿のものです。残念でしたな、はっはっはっは」

星それ、初耳だよ。いつ兄さんは星のものに？

「あら、そうと決まったなんて本人から一言も聞いていないわ。残念だったわね、趙雲殿」

「か、華琳様」

「春蘭もいいのよ。少なからず気に入っているでしょうっ?」

そういつと春蘭は獲物を落とし固まる。勿論俺たちもだけど。

「あ、姉者？」

「あ、あの、そ、そのあのですね、黒髪が綺麗だなとか女として扱ってもらったことに少なからず嬉しかったとかではなくてですね」

「ばか」

桂花は呆れてものも言えないようだ。

「き、貴様今私をばかと言ったな!？」

「姉者が声に出してもらっていたからだ」

「秋蘭まで〜」

「秋蘭も少なからず認めているのだからいいのではなくて？但しあくまであなた達は私のものなのだからそれは忘れないでね」

「はい！」

二人もそこは分かっていたらしい。

「季衣は？」

「ん？ボクも兄ちゃんは好きですよ。流琉の話したら会ってみたくて言ってくれましたし、さっき天の国のくんとんだっけ？名前は忘れましたが美味しいお菓子もらいました」

兄さんなんかお菓子で可笑しな話になってきてるよ。

「そう、あとで私も貰おうかしら。気になるわ」

「ああ、華琳様今は一個しかなくて後で流琉と会ったら作ってくれ  
るって約束しましたよ」

「そう、なら楽しみに待つとしましょう」

兄さんこれからある意味大変だよ。星はなんかぶつぶつ言ってるし、  
いし、なんか春蘭は戦いたくてウズウズしてるし、桂花に至っては  
ずっと黙りっぱなしだし。

軍師が黙るのはなんか恐ろしいよ。

無事に三人ここから出ていけるんだろうか。

そう心配しながら一刀は真を見るがそんなことを全然分らない真  
はあとから来た二人に揉みくちやにされ風がそれを止めていた。

「まあ、なんとかなるよね」

一刀は苦笑しながらも真を呼びに行きみな曹操、華琳の城に向け出発するのだった。

「みてらっしやい。あんな汚らわしい男なんてすぐ追い出してやるんだから。」

なんて考えている人がいるのを知らないまま。。。

## 魏の食の柱・三羽鳥

俺達は無事華琳の城に着いた。城の門の前には誰かが心配そうに待っていた。その姿を見た季衣は急に走りだし声を上げ走り出した。

「流ーーーー琉ーーーー！」

そうか、彼女がこの前言った料理がとても美味しい季衣の親友か。俺たちも続いて季衣の下に向かう。

そこには少し膨れながらも怪我がないことを安心した顔で季衣を受け止める。

「おかえりなさいませ、華琳様、秋蘭様、春蘭様」

「ただいま、流琉。変わりはなかった？」

「はい、これと違ってありませんでした。あの〜こちらの方達は…」

そう挨拶を済ますと俺達の方を見る。

「紹介するわ、今日から客将として迎える」

そこで俺は一步前に出て自己紹介をする。

「俺は姓が御剣、名は真だ。」

続いて一刀と星が自己紹介。それを聞いて驚き華琳を見る。

「そうよ、この二人は今有名な天の御遣い。驚いたかしら？」

コクコクと可愛いらしく心底驚いていた。

「季衣、二の子が？」

俺が季衣に聞くと

「そうだよ、この前話した流琉」

「何を話したのよ、季衣は。……自己紹介が遅れました。典偉と言います。真名は流琉です。ここで料理を担当しています。」

そうかもつここで典偉が、それと真名まで……。

「真名まで許されるとは思わなかった。」

「季衣も真名をあずけているみたいですし、お二人の噂も聞いていますから。それと……。」

何故か急にモジモジしだし爆弾をぶっこんだ！

「わ、わたしも兄様と……呼んでもよろしいでしょうか？」

その上目遣いにここにいる男達、俺と一刀は撃沈した。

「何をしているの？」

俺と一刀が倒れ崩れていると華琳は冷たい目で俺達を見ていた。

「……いや、これは世の男達と妹大好き兄貴にしか分からないさ……」  
「一刀。」

俺は一刀をととても良い笑顔で見てスツと手を出す。  
それに気付いた一刀もスツと手を出し声を高らかに告げる。

「妹万歳！」

終始みんな首を傾げていた。

「ゴホン！すまん脱線した。ああ、全然いいぞ、よろしくな流琉！」

「はい、兄様」

俺達の挨拶も終わり他のメンバーの挨拶も終わり。

「それじゃあ私は料理の準備を」

と言って城に向かおうとした流琉を止めて

「ああ、それなら俺と一刀も荷物を置いたら手伝つよ。」

と言つと華琳が

「そういえば、季衣が確かあなたの天の国のお菓子を食べたって言

ってたわね。手伝わならそれも作ってほしいのだけど」

季衣に聞いていたのか、何故か流琉も目をキラキラさせていた。

「べっこう飴なんて夜に食べるものじゃないぞ。それなら今度作るから今日の食べるものを見てそれに会うものを作るよ」

「そう、残念だけど楽しみにしてるわ」

みんな期待していたのか若干落ち込むが新しいものを作ると言ったので気分は幾分直ったみたいだ。

俺と一刀は荷物を置き侍女に流琉の場所を聞き着くと料理は一通りできている様子だった。

「なんだ、俺達が手伝わなくてももう殆んど出来てるんだな、すごいじゃないか流琉」

と声をかけると此方を向いて苦笑いで答える。

「兄様、一刀兄様。いえいえ、まだまだ半分も作り終わってませんよ。」

なんて言うから二人でまた料理を見るがかなりあるぞ！？  
すると俺達の後ろから秋蘭がやって来た。

「流琉遅れてすまない。手伝いにきたぞ」

「ああ、秋蘭様、ありがとうございます」

嬉しそうに流琉は答える。

「二人もそこで立っていないで早く手伝え、華琳様を待たせる訳にはいかんからな」

と秋蘭も流琉の隣に立ち料理を始める。  
俺達も我に返り手伝うことに専念した。  
なぜ大量の料理を作らなければならなかったのかはこのあとすぐに  
知った。

「はぐはぐはぐー！」

「もぐもぐ、んっ、流琉！」

「はいはい、季衣も春蘭様ももう少しゆっくり……。」「

「何を言っているのだ！こんなに美味しい物いっばい食べなくてど  
うする！」

なんて春蘭は言うは季衣は喉に詰まらせるは、秋蘭は終始そんな春  
蘭を見てニコニコしてるはで流琉はそんな二人を見ながら苦笑いで  
ここはまさに戦場だった。

「それで？あなたは何を作ったの？」

華琳が星と意気投合して酒の話をしていたのだがそれが一通り終わったのか俺に聞いてきた。

「ああ、まだ作ってないぞ、あれは出来立てのほづが美味しいからな」

頃合いを見て席を立つ。

やっぱり油物が多いし胃の中をスッキリさせるのにこれにするか。

「じゃね？」

華琳は俺が作った物を見て首を傾げる。

「杏仁豆腐だ。少し甘めにしてある。みんなも疲れているだろうか  
らな」

「やった！兄さんの杏仁豆腐、この世界に来ても食えるなんて思わなかった。」

そういえば一刀とすいのはよく作ってくれてせがまれたっけ。すると季衣は突然お椀を持って一刀のところに行く。

「兄ちゃん、一緒に食べよ」

と一刀の膝に乗る。一刀もまんざらでもないのか嬉しそうに向かい入れる。

それを見ていた流琉も羨ましそうにそれをチラチラ見ていた。

そうだよな、いくら有名な武将でもまだまだ少女だもんな。よしっ！

「流琉、おれんどこ来るか？」

と答えるとみんなも驚いていたが流琉は驚きながらも申し訳なさそうに俺の膝の上に来た。

「流琉良かったね」

満面の笑顔で一刀の膝の上から季衣は流琉に言う。

流琉も嬉しそうに頷く。それを見ていた俺と一刀も目を合わせ二人して笑った。

それを見ていたある人物がいきなり立ちもつ片方の俺の膝に座った。

「……………。あなたはいきなり何をしていたらっしやいますかね？」

みんなもいきなりすることに固まる。あの曹操、華琳でさえ。

「……………、ふむ。」

ふむ。……………じゃないはぼけー！いや、あほかー！  
おお、あまりの混乱に関西弁になってしまった。

「あ、姉者？」

そう春蘭がいきなり俺の膝に座りやがったのだ。

「……………、はっ！？」

それに気付いたのか機械仕掛けのロボットのように俺の顔を見て急いで立ち上がり剣を向けてきた。

「き、貴様私に妖術を使ったな！？」

この子は何をいっとなりますねん

「い、いきなり座りに来たのは春蘭だろ！？い、いや、座りたいなら全然いいんだけどさ」

それを聞いて怒っていた春蘭が固まる。  
てか秋蘭。無言の圧力を感じるんだが。

「へっ!?!……う、うむ。そこまで言うならば座ってやるつもりではな  
いか。」

とまた俺の膝に座るが座り心地が悪いのか少しお尻を動かす。

おいおい、春蘭!頼むから膝の上であまり動かないでください!

それを見ていた華琳が一言。

「面白いわね。」

このあと俺と一刀は交互にみんなが一回ずつ座るまでずっと座らせられ桂花以外みんな満足してそれぞれ部屋に戻っていった。もちろん俺が作った杏仁豆腐もちゃんと残さず食べ、流琉が片付けようとしたのを止め俺と一刀と流琉、三人で後片付けをした。

その後。

俺は少し城の見取り図を頭の中に描き色々見て回っているとある部屋を通りかかったところでカチャカチャ何かを弄くっている音が部屋から聞こえて来た。それが気になり声をかける。

「おい、誰がいるのか？もう夜遅いんだからそろそろ寝ろよー。」

扉の前で声をかけると知っている人物の声がかかった。

「この声は隊長？まさか夜這いに来たんとちゃうやろな、……んゝま、ええか。入ってきてええよ隊長」

許しがでたので扉を開く。

「まさか三人の部屋とは思わなかった。こんな夜中に何してんだ？」

そこにいたのは真桜。残りの二人はもう寝ていた。二人が寝ているのには申し訳ないが好奇心が勝った。

「隊長こそこんな夜中に何してるん？まさか部下があまりにも可愛すぎて夜這いにきたんとちゃやうやるな」

と訳の分からんことを言っていた。

「ん？意味が分からんが俺はちょっと城の中を散歩していたら音が聞こえてな。それは何してんだ？」

「ほんと隊長は弄くりがいがないわ、そこはツツコムところやで、ん〜うちこついうからくり弄くるの好きやねん、造るのも好きやけど」

工具らしき物を触り苦戦しながらいじくる

「はは、なんかすまんな。……、なんだ、そんな難しい顔して。ち

よつと見せてみる」

と俺は真桜の隣に座りそれを借りる。

「なんや、隊長もこついうのできるん？」

「ああ、昔から妹の壊したやつ直してたらいつの間にか得意になってた。」

からくりを弄くりながら答えていると隣にいる真桜から返事が来なかった。

すぐ近くにいる真桜に顔を向けると真桜の顔が紅くなっていた。

「どつした？真桜？」

覗きこむが慌てて真桜はからくりの話に戻す。

「そ、それで、どこがわるいん？一応この歯車がつまみ噛み合わなくて少し削ったところまではいいんやけど、そこからがどうもあかんねん」

「ああ、着眼点はいいんだ、けどなここの歯車を削ったならこのほかのところも微調整して一個ずつ確認しないと全てがずれるんだな。」

そかそかとからくりを見ながら頷く。俺はからくりを真桜に渡し、真桜の頭を撫でる。

「お前ら三人と一緒にだな。一人一人が噛み合って動く、一人が噛み合わないと残りの二人も噛み合わなくなる。そういうときこそ落ち着いて全体を見ればいい。急がずゆっくり一つ一つ直していけばいい。からくりの歯車も一緒に、全体を見て足りない何かを補えばお前ら三人みたいになるよ。」

と頭を撫でながら話し

「なんて長々かたつちまっただけど、用は冷静な判断と大きな視野だ。精進あるのみだよ、真桜。頑張れよ！」

頭をポンポン叩き俺は踵を返し部屋を出ようとする。

「それと、いつまでも起きてないで寝ろよ、明日から俺達も警備の仕事がある。寝ておかないとばてんぞ。」

なんか分からないことがあったら言いに来い。少しなら手伝えるから。俺の気晴らしにもなるしな、それじゃおやすみ。」

俺はそのまま部屋を出て自分の部屋に向かった。

「は、何年振りやろ、頭なんて撫でてもらったの」

まだ温もりのある部分を触る。

「こりゃ、風をからかっただけど、ウチも本気になりそうやな」

苦笑しながら隊長が出ていった扉を見つめる

「けどまだ出会って日も浅いのによーみとるんやな隊長は」

うちらは凄い人の下についたんやなかるうか。これから楽しそうやな。なんてからくりを片付けながら真桜は床についた。

朝。

俺は早く起きてしまったので部屋をでようとすると一刀が寝返りをうち布団がめくれたのでかけなおし静かに部屋を出る。

そう、俺と一刀は相部屋ね。

なんて誰に説明しているんだって思いながら庭に向かうとそこには  
凧がいた。

「お！？風、おはようさん」

声をかけ近づく。

「おはようございます、隊長。どうしたのですかこんな朝早く。」

「俺は早く起きちまったからな、外の天気も良いし気持ちの良い空気を吸いに来た。風は？」

「自分も同じようなものです。早く目が覚めたので少し汗を流そうかと。」

それを聞いて俺も汗を少し流そうかと提案する。

「それなら俺も一緒にいいか？」

そう提案するといきなり風が目の前にきて目を輝かせ手を掴む。

「ぜ、ぜひやりましょう!」

「と、とりあえず落ち着こうか?」

と声をかけ落ち着かせる。

「それでさ聞きたかったんだけど風のあの手から放つ奴俺もやってみたいんだけど出来るか?なんか見てる限り気を放ってるのは分かるんだがどうやるのか分かんなくてさ。」

首を傾げ腕を組みあの時見たものを思い出しながら言う。

「見ていたのですか!? 隊長に教えるなんて畏れ多いのですが……、隊長。気は使えますか?」

教える気になったのか聞いてきたので説明する。

「それでは体全体には出来るのですね。それでは私が手を握りますのでその部分に気を留めてください。」

手を握られ俺は目を瞑り集中。気を全体に行き渡らせそれを風に握られている手に集める。  
しかしそれは初めて。抑えきれず、その気が手の部分で弾ける。

「うわっ！」

弾けた瞬間風が吹き飛ばされた。

「すまん！大丈夫か風」

「は、はい。コツは少し掴めましたか？」

「ああ、少しな」

二人で続きをやり少しづつ慣れてくる。

俺は調子に乗り風がやったようにやってみた。

「風みてろ！今風みたいに手から出すぞ！」

「た、隊長！いきなりぞ！」

俺は風の制止も聞かずおもいつきり空に向かって放った。  
その瞬間全身から気がかなり持っついていかれぶっ倒れる。

「た、隊長——！」

その声を聞いて俺は気を失った。

誰かが俺の髪を撫でる。

それが気持ちよかったがだんだん意識が戻ってきて目を開くとそこに風の心配そうな顔があった。

「気付きましたか隊長」

「ああ、……俺気絶したみたいだな」

体を起こそうとすると胸を押さえられ寝かされる。

「まだ体を動かさないでください、気の使いすぎで倒れたのですから」

素直に従いまた横になるとなぜか後頭部の部分が柔らかい。  
これは？

「た、隊長、あまり頭を動かさないでください。く、くすぐりたいです。」

ああ、凧の膝枕だったのね。

「……、す、すまん！凧は辛くないか？」

「はい、倒れてすぐ目を覚ましましたので大丈夫ですよ。」

優しい落ち着く笑顔で答える。

数分そうして落ち着き起き上がり体を動かし悪いところはないか確認する。

「よし、もう大丈夫だ。凧すまなかつたな。足は辛くないか？」

「はい大丈夫です、それよりこんな硬い足で隊長が休めたのか心配なのですが……。」

なぜか落ち込んでしまう。

「なんでだ？とても落ち着けて気持ちよかったぞ」

あっけらかんと言つとなぜか風は紅くなる。

「あ、ありがとうございます」

何度も何度も頭を下げる。

「いや、俺の方こそ休まった、ありがとうな。お礼になんか聞きたいこととかあるか？」

色々あるのかかなり考えていたがそこは風。  
律儀に一つに絞り疑問に思ったことを質問してきた。

「あの、あの時私を助けて下さったときいつたいどうやって賊を倒

したのですか？あまりにも速く姿を追えなかったのですが。」

「ん、説明すると簡単なんだけどただ、迅く動いて敵を破壊した  
だけなんだけどな」

その説明で驚いているが特別何かした訳じゃないんだよな。

「そ、それでは、ただ敵を叩きのめしたと？」

「ま、そういうことになるな。武には二つの性質があるよね。外側  
を壊す『剛』。内側を壊す『柔』。俺は一对一に『柔』。一对多は  
『剛』に一応分けてんだ。」

その説明に凧は真剣に聞く。

「それこそ凧たちも敵に対してそれぞれ戦略を変えるだろ？それを  
俺もしてるんだけどな。ただ凧が見たやつは相手に攻撃する暇を与え  
ない為に迅さがかなり重要なんだ。敵を倒しても余韻に浸らず、無  
心で次の行動を迅速に遂行する。それをするには体力がないとか

なりきついんだ。多分凧も鍛えればできるようになるぞ?。」

「ほんとですか!?!是非教えてほしいです!。」

「おう!お礼に教えるよ。そうだな、まずはこれぐらい取れるようにしようか。凧も格闘が主体だから後は迅さをもっと底上げしよう。」

俺は踵を返し後ろにある大きな木を指差す。

もちろんそれだけでは凧も今してるように可愛いく首を傾げるので説明を続ける。

「この木の葉をなるべく地面に落ちないように掴む。これかなりきついけど続けていくと結構速さも上がるからな。見ててくれ。」

木の前に立ち構え正拳突きを放つ。

ズンと鈍く重い音と共に葉が落ち始める。

「シッ!。」

一瞬横に揺れたかと思っただけ。地面を見ると土は抉れそこから次の場所はかなり遠くで弾ける。それは凧が見えなかったあの時の再現だった。

「はあ、はあ、これでっ、はあ、全部……、かな？」

凧は呆然としていた。

それを見ながら息を整えていると俺の後ろから声がかかる。

「見事ね、だけど一枚落ちたわ。」

そう簡潔にしかし悔しい一言を告げ現れる。

「こりゃあ手厳しい。おはようさん華琳」

凧も挨拶をして華琳に何をしてるか説明。

「いいわね、仲良く二人で鍛練」

なぜか凧は縮こまるが俺は普通に答える。

「ああ、仲良くな。色々教えてもらったり教えたりしあってるぞ。」

と言つと二人共目をパチクリさせながら苦笑した。

「凧そこは振り返らずそのまま突っ走れ！そのまま壁に行って壁を蹴って葉を蹴りで弾け！そうすれば間に合う」

遠くで指示を出し見ている。

凧は返事をする余裕もないのか返事も出来ずただひたすら走る。

「華琳悪いな立たせたまま。華琳をたてなきゃならないんだろ？が、今は凧を見ているから。華琳だけを特別にはできそうにない。」

「いいのよあなたはそれで。そういうところも気にいっているのだから。それより三人はどうかしら？」

「ん〜今日から本格的に動くんだろ？ただ三人それぞれ良いところがあるからいいけど、強いて上げるなら凧は武に関しては何分これからグングン伸びるぞ。それこそ将にはなれる、ただ真面目すぎて臨機応変にするとき少しまだ危ない。真桜は武はそこそここれからのな。ただ考えることは結構凄いぞ。あの子が考えることには興味がある。沙和はまだ見ていないが一刀に聞いた限りだけど戦いにはあまり得意な方ではないそうだ。ただ三人でこれまで義勇兵を募ってやってきたんだ。なんとかなるだろ。これからここでやっていく上で必要なことを一刀と話して一刀に全て一任した。一刀も案があるみたいだし大丈夫だろ。」

「そう、まだ会って間もないのによく見ているじゃない。」

「ん〜想像が結構占めてるからまたやり方も変わるだろうけどな。俺達も黄巾党討伐まではいるからその後はよろしくな」

「やっぱり考えは変わらないのね。……わかったわ。この曹操が必ず貴方達をものにしてみせるわ」

分かったけど一々覇気をぶつけないでください。

「ああ、俺も一刀もその日を楽しみに待ってるさ」

そう告げると華琳は部屋に戻っていった。  
俺も凧の為に水を汲みに行く。

「はあ、はあ、はあ。」

隊長は今までこれが続けてきたのか。  
本当にあの方は……。

あんな無邪気に子供のように無謀な事をしたかと思っただけなら急に眼つきが変わって空気が変わる。あの方の掴み所のなさはもうずっとなのだろうな。

遠いなー。

地面にねっころがり空を眺め悔しさを噛み締める。すると急に目の前に隊長が現れた。

「お疲れさん。どうだ？ なんとか掴めそうか？」

「はい、後は体力だけかと。」

貴方の横に並ぶにはこれからも努力が必要なのですね。

「そかそか、お互いこれからも努力だな。ほれ水持ってきたから洗って飯食いにいくぞ。」

無邪気な笑顔で手を握られ木桶の場所に連れて行かれる。  
隊長はこれからも変わらずこうやって色々な人に世話を焼いてどん  
どん一人で前に行ってしまうんでしょね。  
私は引かれながら隊長のこれからも変わらない背中を眺め苦笑した。

昼。

俺達は今警備隊全員町に繰り出し視察をしていた。  
まではいいのだがあるところで沙和の趣味が爆発した。  
いやー刀もか？

「も〜すごい可愛いの！これもあるも凄く欲しいの〜」

沙和は服を見て悶え

「なあ店主、こんなの作れないかな」

「刀は小さな声で何か頼んでるし。」

「沙和！いい加減にしないか！今は仕事の最中なんだぞ」

と凧は怒るし

「ええやん、ウチもあつちにあつた材料を少し……。」

なんて抜け出そうとした真桜も凧に捕まっていた。

「は、これはもうカオスだ。」

俺は呆れて放置。まあ、視察だから色々回るつもりでいたのでいい

んだが。

「たいちょうお、どお？どお？この服沙和に似合っ？」

色々周りを見てみると沙和からお声が掛かる。

「ん？いいんじゃないか？沙和の性格にもあってそうで明るくてその色もいいと思うぞ」

素直に感想を言うと沙和は戸惑いながらも嬉しそうに

「う、うん。ありがとうなの」

なんて言いながらまた服を見に行く。

「隊長！隊長も眺めてないで早く止めてくださいー！」

おおー！今度はこっちか

「真桜少しならいいから見てきていいぞ。後で声かけるから。」

凧は驚き真桜は

「隊長はなせるやん！それじゃあ行ってるでえ」

固まっている凧をそのままに真桜はからくりに見える材料を見に行く。

「はあ、隊長は何をお考えなのですか？これは仕事ではないのですか？」

凧は固いな

「まあなこれも仕事だ。だけどさ、凧こつ頑なに仕事仕事と構えろと見えてくるものも見えなくなるぞ。二人は緩すぎるかもしれないが、凧はもう少しあの二人のように少し力を抜いてみるといい。」

「しかし……。」

いきなり言っても今までの性格をかえるのは難しいけどな。

「そうだな……、こついかんかはどうだ？二人のように色々見るとさ、中のことや、どついう人がいてこついうところに探してるものがあるって分かるだろ？警備は確かに罪を犯すものを捕まえるけど、それだけじゃなくて困っている人を助けるのも一つの仕事だと思っんだ。確かに一番は罪を冒す前に捕まえるんだけどな。」

納得はしてくれたみたいだしいいかな。

「ほら凧もこつ言つときだ、なんか見ておいで。俺はここに居るか  
ら」

凧にも少しでも力を抜いてもらうために言っが

「い、いえ。自分はあまりにっついつのは」

凧はそう言って一歩下がるが

「凧ちゃん、凧ちゃんに似合っ服見つけたの、来て」

「ほら、お声が掛かった。行って来い！」

逃げようとした凧の後ろに回り込み背中を押す

「なっ！？隊長いつのまに！？」

「まだまだあめーよ」

「凧ちゃん捕まえた！ありがとうなのたいちよう！」

「おう！二人で楽しんで来い」

終始沙和は笑顔で凧は戸惑っていた。

沙和の服を見終わり真桜を探しに行き合流して休憩と評してお茶。

「た〜いちよ！ここは隊長のおごり？」

真桜がいきなり聞いてきてそれを沙和も目をキラキラさせ

「やったー、隊長のおごりなの〜」

二人でキヤイキヤイしていると隣にいる凧がプルプルしだし、一刀と目配せしその場を沈める。

「分かった、分かった。奢るから騒ぐな、他の客の迷惑になるぞ」

「はいはい。食べるの決まったか？」

一刀が回りに聞きすぐに店主を呼ぶ。

なんとか風の怒りは収まったか。と二人安息の溜め息をはいた。この先のことが心配になってきた。

「それでね沙和がね」

俺と一刀は女子トークについていけないので黙って静観。

だけど沙和はこのムードメーカーなんだな。二人もなんだかんだでしっかり聞いている。さっきまでの空気もいつの間にか全てなくなった。

「そつだ、隊長にも聞きたいことがあったの」

話し込んでいた沙和が方向転換し俺に向く。

「沙和ずっと気になってたんだけどその首から下げてる首飾りってどこに売ってるの?」とても綺麗なの」

俺の下げているペンダントを指差し目をキラキラさせる

「これか?これは俺と一刀の世界のものでな」

俺がこれを買った切っ掛けと失敗を語る。

「隊長ならありえそつやな」

真桜はケラケラ笑い

「でも妹さんとても嬉しかったと思うの。だって大好きなお兄ちゃ

んにもらったんだもん」

「はは、そう思っていてくれてたら嬉しいけどな」

ペンダントを触りながら思いを馳せる。

それに気付いてしまった一刀はそうそうと切り上げ店を皆で出て視察を再開する。

「おし！一通り見てもらったな、明日からここを俺達が護る。俺と一刀は黄巾党討伐まで精一杯やる！三人もしっかりそこは覚えて三人でもできるように頑張れ！分からないことがあれば随時俺が一刀に聞いてくれ。」

三人は真剣に聞き頷く。

「じゃあ、今日はもう解散。後は今日のことを復習するなりしてくれている」

そう言っつてそれぞれみんなは思い思いの場所に向かうのだが沙和だけはずつと立っていた。

「沙和？」

それに気付いた凧と真桜は戻ってくる。

俺も心配になり顔を覗き込むと沙和は泣いていた。それを見た凧も真桜もそれを見て驚いてあたふたする。

「うっ、うっ、ごめんなさいなの隊長。」

なぜかいきなり謝られてしまったが心当たりがない。

とりあえずここに突っ立っつていてもあれなので一刀もどこかいったし俺達の部屋に招き備え付けの茶を出し椅子に座らせ落ち着かせる。ある程度落ち着いたところでさっきの事を話す。

「それで沙和、さっきなんでいきなり謝ったんだ？心当たりがないんだが。」

そこで沙和はどうして謝ったのか語り出す。

「沙和気付いたの。隊長首飾りの話したときとっても嬉しそうだったけど目はとても淋しそうだった。それに一刀さんも辛そうにしたの。だから隊長の」

そこで沙和が言いたいことに気付いた凧と真桜は止める。  
何が言いたいのか大体分かった。それで謝ったのか。

「こらこら、二人とも落ち着け。大丈夫だって、確かに妹の話をするのは悲しいけどでももうある程度は仕方ないしな。それに死んじまったけど今でも俺のこれにあいつの想いは詰まってる。」

俺はペンダントを摘まみみんなに見せる

「ほらこれって指輪が欠けてるだろ？これはもう一つないとしっかりした指輪にならない。今はこの首飾りをもう一つ持ってくれてる子がこの世界にいる。その子を家族のように思ってるから渡したんだ。だから妹も嬉しく思ってるって沙和がいつてくれたとき言ったる？そう思ってくれてたら嬉しいって。沙和とすることは違ってたけどそれでも妹が俺が大切に思った新しい家族を嬉しく思ってるっていつてくれてる気がして嬉しかった。だからもう謝んな、な？」

俺は優しく頭を撫で落ち着いてもらおう気持ちを込めて撫でる。  
ある程度落ち着いてくれてここでこの話を終わらす。

「まあ、そういうことだ。この首飾りの話は三人ともう一つの首飾りを持つてる人しか知らない。秘密だぞ！」

三人の頭を一撫でし俺は

「華琳に今日の報告があるからとりあえず俺は先に出るが三人も早く部屋に戻れよ」

三人にその事を告げ俺は華琳の部屋に向かった。

「それにしても隊長の大切な人って誰なんやろ」

真桜ちゃんが隊長が出て行くと開口一番そんなことを言う。

「いや、家族……」

凧ちゃんはそれを訂正するように突っ込むけど無視されたの。こんな風に重い空気を軽くしちゃう隊長はすごい。

沙和もあんな風にみんなを笑顔にできたらいいな。

改めて隊長の優しさが分かった気がしたの。

私を助けてくれた一刀さん、沙和を優しくあやしてくれた隊長。二人はそうやってみんなの笑顔を作っていくんだね。

凧ちゃんと真桜ちゃんを見て沙和も頑張ろうって思うの。

「凧ちゃん、真桜ちゃん」

二人は取っ組み合いながらこちらを向く。

「隊長の大切な人も気になるけど、沙和たちも大切にしてもらおうよ  
うに頑張ろうね」

そう言って部屋を出て自分達の部屋に向かう。

「沙和まつて〜!」

真桜ちゃんと凧ちゃんもついてくる。

三人でいつか好きになって隊長に大切な人って認めてもらおうね。

そう思いながら追いついた二人と並んで部屋に向かった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7373/>

---

愛する者のため全てを駆ける者

2011年5月21日15時49分発行